
怒濤のうた 鎌倉幕府第三代將軍源実朝の青春 銀杏は見ていた！

春野一人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怒濤のうた 鎌倉幕府第三代將軍源実朝の青春 銀杏は見ていた！

【NZコード】

N71780

【作者名】

春野一人

【あらすじ】

源氏は平家と戦って勝利し、鎌倉に幕府を開くことができた。初代將軍源頼朝が亡くなつた後、二代目を息子の頼家が継いでいる。しかし頼家の母方の氏族である北条氏の権力欲は、安定したかに見える鎌倉幕府を再び争乱の中にひきずりこむ。・・・最近倒壊した実朝暗殺の隠れ銀杏の時代の真相にせまって、歌人として歴史的に高名な実朝がどのような人であったのかを描く。また平安期のたそがれに、王朝に打ち勝つてどのようにして武士の時代が成立したのかも表現する。

1 賴家 病にかかる

建仁三年（1203年）七月二十日（旧暦）晴れ 蟬がうるさい、うだるような、新暦では八月末のこの日、鎌倉幕府第二代將軍源頼家は、夕方まで蹴鞠を楽しんでいたのに戌の刻（午後八時頃）突然、頭痛、腰痛とともに高熱を発して寝込んだ。見るところ、恐ろしい死の病、疱瘡（天然痘）と思われる。將軍の母で、故源頼朝の妻、尼御台所（北条政子）と政子の父の北条時政は、鎌倉中の社寺に向けて、將軍の治癒の為の祈祷をするように命じた。それで鎌倉中の社寺は狂氣のように祈祷に取り組んだ。しかしながら、病状はいつこうに快方に向かわなかつた。

七月二十四日 将軍の恐ろしい高熱は去つたが顔面を中心に、髪の生え際まで、びつしりと白っぽい豆粒のような、デキモノが発生した。その日から、デキモノは全身に広がりだし、やがて発疹は化膿してぶよぶよとなり、再び高熱が頼家の身体を襲つた。ぜいぜいと呼吸もひどく荒くなり、下痢も発する。食事はまったく受けつけず、死んだように伏せているのみとなつた。

八月十日 頼家将軍の病気見舞いをして、午の刻（昼）に時政と政子は、大蔵御所（鶴岡八幡宮至近。三万坪ほどの敷地で、將軍が寝起きし、政務を執る場所である）から要塞のような名越山の中腹の名越北条時政邸にもどつて來た。名越邸の部屋に入り、時政はあたりを見回してから、声を落として上座に座る政子に話し始めた。

「殿は助かるまい」「そうでしようか……駄目でしようか」

「うむ、重い疱瘡だと医の者が申しておつた。……嫌な話だが、万一亡くなられる事になると大変な事態だ。……次の將軍は当然ながら頼家の長男の一幡と云うことになる。……一幡の母、若狭局は比企能員の娘だ。幼い六才の一幡が將軍になると、比企能員は將軍の外祖父となってしまう。そのような事ともなれば鎌倉は比企一族の思うがままになつてしまつから、この俺も貴女も立場を失つ

てしまふに違ひない。我らが北条家は日頃、御家人の恨み嫉妬もかつてゐるから、北条の明日は無いと思える」「…ひよつとすると父上は比企の族滅（一族の全滅）を考えていませんか。そうなると私の孫である可愛い一幡はどうなるのですか？」「なに比企を押さえるだけだ。一幡を殺すようなことはさせん」「そうですか？約束ですよ。若狭の局と一幡の身は守つて下さいね！一幡は父上にとつてもひ孫ではありませぬか」

八月二十七日 雲飛ぶ 夏も終わりに近づき、鎌倉の海は嵐の余波で白く泡立つてゐる。海から東方面十五町（約1500メートル）に満たない狭い鎌倉の市中は潮の匂いが充満している。このような日、いよいよ、頼家公は最期と思われた。政子と時政が実権を握る幕府は将軍名を持つて、関西三十八力国の地頭職を將軍の弟の千幡（のちの実朝）十才に、関東一十八力国の地頭、總守護職を將軍の長男の一幡、六才に譲るとの声明を発した。本来、將軍の長男である一幡に全て与えられるはずの領地が、その半分以上を過分に与えられたのだ。当時はいまだに平安朝廷の配置するところの国司（行政、司法、警察、軍事、収税の権限を持つた長官）の支配する国領と貴族、寺社の支配する荘園と本来は荘園であったが、今は鎌倉幕府の名目上の領地となつたが安堵（地域の支配保証）された武士の土地とが囲碁の石のように入れ組んでいた。鎌倉幕府は徐々に軍事力の恫喝をもつて国司の権限を形骸化していきつつあつたが鎌倉時代の初期はいまだ、学者の研究を持つてしても定かでない所がある。言える事は、関東、東海の領地化は進んだが、関西の領地はまだらであり地頭という、かなり領主めいた者を設定することができず、監督するという権限で半領地化するために守護を設けていたということである。鎌倉幕府は、朝廷や寺院、貴族と適当な和を保ちながら当面は支配を維持せねばならない事情があつた。平家は、朝廷、貴族、寺社、地方豪族の権益を急速に強引に奪つたから猛烈な反感を買って没落してしまつた側面がある。ここで頼家の息子に与えられた関西の権益は、千幡に与えられた関東の権益に比べるとずいぶん見劣りのするものだつたと言えよう。これを聞いて一幡の外祖父である比企能員の怒りはすさまじいものである。「頼家公が亡くなるとあれば、次の將軍は嫡子（相続権のある正妻の長男）の一幡が当然ではないか、將軍にならない千幡に何故、次代將

軍を超える所領を「超えるのだ！」と大声を出したと言つ。

3 北条と比企の争乱

九月一日 賴家将軍の病がひどく重い。各所の治癒の祈願、祈祷もまったく効き目がないようだ。将軍の危篤を伝え聞いた諸国御家人が、何らかの争乱を予想して、家来の中でもとりわけ屈強の部下を連れて鎌倉に上がつて来ている。御家人の鎌倉屋敷内に入りきれない馬、兵が辻々に群れを作り、天幕まで張るので騒然とした雰囲気は高まるばかりである。鎌倉の庶民は「叔父・甥（将軍と北条時政）の不和と争乱がすぐに始まりそうだ。関東の行く末は、どうなるのだろうか」と、顔を集めて囁きあつてている。

九月一日 北条時政が突然中原広元の邸宅にやつて来た。時政は広元に比企を撃つという計画を明らかにした。時政から相談を受けた広元は「良く考えて行動なさつてください」と、内諾とも否定とも取れる返事をした。時政も官僚とはそのような風見鶏であると知つていたから、それを行動への承諾と捕らえるのであつた。中原広元（母は再婚している。当時中原姓を名乗つていたが中年になつて大江姓に改名した。中原姓は平安朝で文書官として名高い家柄である。家格は大江姓よりすぐれていた。しかし実父が大江氏であるので大江の姓は広元にとつて捨てがたかったようだ。広元は一度目の結婚で生まれた子供と考えられるが詳しくは判らない）は京都から頼朝のもとにやつて来たから朝廷の風習や規則、人事に詳しく、朝廷との交渉役として鎌倉幕府のなくしてはならない中心的な文書執政官として重きをなしている。朝廷の風習に飲み込まれてしまつた平家の轍を踏まないためにも、朝廷政治を良く理解している広元の様な人物は不可欠であった。それ故に北条時政の威力を持つてしても中原広元抜きには事を運べなかつたのだ。

時政は突然、 天野遠景、 新田忠常などを連れて比企追討に向かつ

あまのとおかけ にうただつね

た。天野遠景は頼朝が亡くなつた時に出家した。出家と言つても当時の出家は、所領、役職に影響するものではなかつたので、多くの武士が何かにつけて出家することが多かつた。出家名は連景れんぎょうとつけたので、現在は天野連景で呼ばれている。遠景は頼朝が平家と平安朝によつて伊豆韭山あたりに流罪として流されて來た時に近所の天野の地の小さな所領の地侍であつた。同じ地域の郷士、工藤氏の娘を母として持つた。

平家との戦いに負けて、伊豆に流されてきた十三才の頼朝と相撲を取つたり、狩りをしたり、何かと遊び回つていた。頼朝とほぼ同年配であり、今五六十才だ。すでに若いとは言えないが、人が「殺し屋天野遠景」と呼ぶほど今までにも数々の謀殺に関わつた腕力の持ち主である。もう一人刺客として選ばれた新田忠常は弱小な所領しか持たない伊豆仁田の百姓みたいなものであつた。頼朝と二十一才も年が離れているが、頼朝のお気に入りで、今から十五年前に忠常が急病で危篤状態になつた時には頼朝自ら見舞いに出向いたと言ふほどであった。忠常は、將軍頼家にも信頼が厚い。ちなみに、この後の歴史に登場する新田氏とは関係がない血筋である。北条時政の呼び出しで頼家側の比企追討に出たのは一人ともしかたがない保身のためである。比企に就くか北条に就くか選択はひとつしかないのだ。

どんなに比企や頼家に親しかろうがおのれが生き残るためにには友や息子も見捨てねばならないのが武者の常識なのだ。北条時政にとっては、この古豪の二人を共犯者に引きずり込むことは利の多いことだつた。

時政の一団は途中で騎馬を加えたが、その時天野遠景が時政にこう進言した。「軍兵を出すまでの事はありますまい、御邸に召しだし、これを討つべきです」「そうだな、そうすべきだ。事を荒立ててはいかんな」時政は軍勢を名越の邸にもどした。

時政は邸に戻つた後、中原広元を呼び出した。広元は突然の呼び出しに先刻の曖昧な返事の処分と思い緊張した。命を取られるかもしれないが、出頭しなければならない。そのただならぬ雰囲気と表情に驚いた家人が、みな広元に付いて行こうとするが広元はそれをおし留めて飯富宗長だけを伴つて屋敷を出た。

5 北条と比企の争乱

馬上の広元は馬を引く宗長に「うづ」言つた。

「世の中の有様は本当に恐ろしい。重大な事について、今朝、時政殿と細々と協議したのに、又すぐに呼ばれるとは何事だらうか？ひょっとしたら私が罷にはまつてゐるのだらうか。殺されるぐらいならお前が私の命を素早く絶つてくれ」

時政と広元の対面中、宗長は広元の背後について座を離れなかつた。時政が広元を呼び出したのは屋内で謀殺するという計画の変更が因であつた。時政と広元は綿密な計画を再度練り上げた後、別れた。広元は午の刻（正午）無事自宅に帰ることができた。

時政は「仏師に造らせていた薬師如来像が出来上がりましたのでその供養のたに、高僧栄西が読経し尼御台所も列席なさる。ついてはあなた様にも来邸して頂きたい。そのおり、積もる話なども致しましよう」と書いて一階堂行光に持たせて比企邸のある比企が谷戸（現在妙本寺がある谷戸）の能員に出した。（一階堂行光は鎌倉の文書官として京都から下つた一階堂行政の息子で父の仕事を継いだ鎌倉幕府の優秀な筆頭執事で、鎌倉幕府の歴史書である「吾妻鏡」の筆者の一人と言われている）

一階堂行光が帰つた後、比企能員の息子達が集まつて、能員にいさめて言つた。

「父上、謀り^{はか}」とかもしれませんな。代わりの者を出すなどした方が良いのではありませんか？たとえ行かれるにしても甲冑を着けた郎党に^郎を持たすなどなされた方がよろしいのではありませんか？、北条に氣を許してはなりませんぞ」能員はしばらく無言で一点を見つめるようにして「武具を着けた格好をして行つてみるがいい、かえつて人の疑いを受けるのではないか。比企の能員は謀反の考えがあるぞと、鎌倉中の人々が騒ぐに違ひあるまい。この

招待は仏事のこと、先日の一幡公に対する不当な相続のことで讓歩するなど、合わせての用事なのだろう。急いで行って参るぞ」

だが、そのような能員の樂観的な考えはつち崩された。北条時政は名越邸に屈強な強兵を武装させて待ちかまえていたのだ。中野四郎、市河五郎といふの名手を呼び、弓矢を持たせ、門の陰に立たせた。天野遠景、新田忠常はしつかりと腹巻きを着けて西南の脇戸の陰に隠れていた。

まもなく能員は訪ねてきた。白い水干に、麻の様な風合いの葛袴くずはかまを身につけ黒馬に乗っている。郎党を一人、雑色（身分の低い侍）を五人ともなっている。

6 北条と比企の争乱

能員よしかずは従者と馬を正門の馬場に残して、次のやや小さい主門から案内の者一人に邸内に導かれた。山中の昼下がりであるから、ひぐらしがカナカナと鳴いている。涼しい風も吹いてくる。それを感じながら渡り廊下を能員は歩いている。その時。後ろからひそかに忍び寄った筋骨たくましい新田忠常が能員を突然羽交い締めにする。能員は「何事か！」と大声を上げて振り返ろうとするのだが、能員はひどく強い力でそれを押さえられる。あがいでいる間に前から天野遠景が短刀を光らせ素早い動作で能員の胸元めがけて飛び込んで刀身を能員の体内に深く突きいた。能員は心臓をさされてにゆるゆると廊下に倒れ伏した。しばし一人は能員を見つめていたが、その後、お互いの緊張した見開いた眼をあわせ、うなずいて仕事をし遂げた事を確認するのだった。北条時政は物陰からその様子を見ている。能員は静かに床に伏している。足音もあらがう人もなくなつた邸内にはひぐらしが鳴いているだけである。

馬場の待ち部屋にいる、能員の従者にも能員の大声とともに争う音が伝わっていた。能員に良からぬ変事が起きたことはあからさまである。従者は手近の屋敷の者になにがあつたのだと訊ねるが、はてそのような物音は聞きませんがと言うばかりである。それに読経の音も尼御台所が来ている気配もない。どうやら謀られたようである。従者達は時政邸を脱けだし、近距離の比企邸まで走った。

比企の一族は能員に変事が起きたことを知り、直ちに能員邸に隣接している將軍頼家の長男、一幡の広い邸（將軍の長男の在所であるから小御所とよばれている）に集結して甲冑をつけ戦いの準備を始めた。比企一族が合戦の準備をし始めたことは、すぐに北条氏に伝わった。北条時政は將軍名を使って比企謀反の罪で追討命令を発した。

次の者達が比企追討に参戦する。北条義時ほうじょうよしひき、北条泰時ほうじょうたいとき、平賀朝政ひらがともまさ、

小山朝政おやまとちまさと息子の五郎、七郎、畠山重忠つねもり、
秩父一族ちちぶ一族）三浦義村みうらよしむら、和田義盛よしもり、
同常盛つねもり、
同景長かげなが、（前記三名は三
浦一族）

士肥惟光、後藤信康、所朝光、尾藤次知景、工藤行光、金窪行親、
 加藤次景廉同太郎（同じく長男）景朝新田忠常（前記は古郷、伊豆の伊豆の武士団）などを始めとした御家人と、その郎党の大軍勢が小御所を雲霞のように取り囲み、襲いかかつた。小御所に立てこもつたのは比企三郎、四郎、五郎、河原田次郎（比企の猶子、猶子は養子より意味が軽く、兄弟の子のように大事に思つていると言つことが相続に際しては重視される。このころまで養子と猶子は同じ意味だつたが、多くの猶子をつくるなどに際して関係を軽くしたようである）、笠原親景、中山為重、糟屋有季（前記三人は能員の娘婿と、その郎党である。

両者いずれも平家と鬪つてきた歴戦の勇士であるから激しい戦闘となつた。攻防は申の刻（午後3時～5時）まで続いた。北条側も多くの者が傷ついたが、源頼朝の拳兵からの重臣で、頼朝の一度の上洛（京に上ること）に際して先陣をつとめた古豪畠山重忠は良く采配を振るい、弱つた武者を新しい武者と入れ替えて激しく比企側を攻め立てたから、ついに比企の兵士は館から逃亡し、残つた笠原朝景は郎党とともに館に火をかけ若君の前で自殺し果てた。

九月三日 幕府は逃亡した比企の残党を捜し求めた。捕らえられた者には流刑、死罪の刑をあたえられ執行された。比企家ゆかりの妻妾や一歳にも満たない子息などは和田義盛に預けられ安房の国（千葉）に住ませた。

頼家の若君、一幡君六才の姿が見あたらなかつた。しかしこれの遺骸の中に混ざつて菊に枝を配した菊枝の文様が一寸四方焼け残つてゐる。生き残つた一幡君の乳母の一人の証言によれば、最期の時、一幡君はその染め付けの小袖を着ていたという。したがつて後世、一幡君がそこで亡くなつたのか逃亡したのか考証が別れている。

一幡君も亡くなつたと聞いて祖母の尼御台所（北条政子）は深い悲しみに包まれた。それとともに父、北条時政の思いやりのない采配を恨んだと言つ。

九月五日 北条名越邸に時政と息子の義時と政子が参集している。「頼家将軍が回復されただつて……」息子の義時からその事を知らされて、苦り切つたように時政は声を絞り出した。「さようでござります。今朝方より体調が良好なようで、かゆを召し上がつてゐるとの事です。誰かが将軍に告げたのでありますよう、比企一族の全滅と正室の若狭の局と子息の一幡君の亡くなられたのを知つたようで、私と近侍が行つた時には弱つた身体ながら時政、義時出てこい、と阿修羅の形相で大声を上げて、部屋の調度を蹴散らしておりました。我ら多数で、殿を縛り上げ、見張りをつけましたが、そのどなり声は鬼のようでありました。」答える義時は38才、戦で鍛えた精悍な身体と顔つきである。「私どもが行く前に、将軍は密かに和田義盛わだよしあつと新田忠常に北条征伐を命じたと言つことです。義盛が先ほど、その下知文げちぶみ（命令書）を、このような物を将軍から受け取りましたと尼台所（政子）に届けて寄こしました。新田からは何の音沙汰がないので、新田を良く見張るよう手配いたしました。・・・父上、この先はいかがいたしましょう?」

時政はしばし無言だった。田はキヨロキヨロと部屋のあちこちを見ているかのように彷徨つている。

「ふむ、そうだな・・・ここまでやつてしまつた以上、将軍が治癒されたからと言つて、このまま将軍を続けて頂く訳には行くまい。退位して頂き、将軍の弟君の千幡君に三代将軍になつていただくのが北条家にとつて最良だ。頼家将軍に置かれては隠居なつて我らが古里の伊豆でのんびり過ごしていただこう。尼御台所どこの方策でいかがでござるかな」

政子は時政をじつと見つめていたが、口を開いた。

「お父様には、あれほど一幡を助けてくださいと、お願ひしていきたのに、一幡も、その母の若狭の局も戦乱の中で犠牲になつてしまい

ました。今度は頼家の更迭ですか。頼家の日頃の所行を見れば更迭はしかたがないかも知れませんが、くれぐれも手荒に扱わないで大事に扱ってくださいね

「解つておる、約束する。頼家殿を粗末にしたりはせぬ

九月七日 亥の刻（午後十時過ぎ） 鎌倉幕府第一代將軍源頼家
は退位し、髪を落とし出家した。

9 賴家退位と実朝の着位

九月十日 北条時政は千幡を大蔵御所内の尼御台所邸から時政の名越邸に移すように手配した。三浦義村と北条泰時が、それにあつた。

四十才になる三浦義村は頼朝挙兵の時、父の義澄と、ともに参戦し、頼朝が石橋山で敗退し、安房（房総）に逃れる時も、それ以降も緒戦で頼朝を力強く支えた。三浦氏は三浦半島の？士だが、房総半島にも所領があり、頼朝は真鶴半島近くの石橋山で、最初の敗退をするのだが、三浦氏は、千葉の地縁をたよりに千葉の勢力をまとめ上げるのに多大な功績があつたのだ。後に登場する和田氏も三浦氏の分家で三浦一族であるが、三浦半島の和田に所領を持っていたことから和田姓を名のつている。北条泰時は義時の息子で、千幡より九才年長であり、この時二十一才の若者である。

故源頼朝の次男、千幡は数え年十一才で、突然、長男の頼家の後を継いで鎌倉幕府第三代將軍として擁立される事になつた。

朝、千幡は大蔵御所内の尼御台所邸で乳母の阿波の方から「今日は大事な日でござりますよ。どうぞ凜々しく振る舞われてくださいまし」言い含められながら、白絹水干の衣装に着替えさせられた。「阿波、何があつたのだ」ようやく幼児から抜け出したような、細い優しい顔と声で千幡は尋ねた。「それは私の口からは申し上げる事はできないのですよ。後ほどお母様がお伝えになります」

阿波の方は北条時政の娘で、尼御台所の妹である。今日の日まで、千幡は御所内の尼御台所邸で、のんびり育てられていたが、次期將軍となると頼家もいる御所は不用心だと言つので、要塞の様な小山に依つた広壯な時政邸に移されるのである。

甲冑に身を固めた御家人達、騎馬二十頭、徒步の五十人ほどが御所内の尼御台所邸に参集してきた。

輿じが一台用意された。担ぎ手が輿の周りに腰を落としている。馬が時々、ぶるぶると荒い息をする。甲冑を身につけた兵で馬場は埋まっているが、風に吹かれた木の葉のサワサワとした音が聞こえるくらい静寂である。奥から出てきた千幡は、その莊厳な一隊を目に見て、自分が、今までとは違つて命運をたどり始めたのを強く感じるのだった。

この精銳の武士達を先導するのが北条泰時と三浦義村だ。一台の輿には千幡と安房の方が乗る。

やつと夜が明けたばかりの、もやがたなびく街道を、真新しい甲冑束の強者達が馬の脚音と武具の音で賑わしながら通つて行く。朝の早い鎌倉の庶民が仕事の手を休め、あわてて路傍に何事かと言うような表情で互いの目を合わせながら平服する。

御所の政子邸から時政の名越邸までは、十五町（1・7キロ？）あまり、十町（1050？）ほど朝比奈方面に進んでから右の低い山に囲まれた谷道に入つて行く。すでに小山に紅葉が始まっているのが千幡の目に入る。

千幡の父、頼朝は千幡の誕生祝いをした十二年前には存命していた。その十年前の治承四年（1180年）頼朝は伊豆で平氏への反乱の兵を起しした。このことは、「頼朝旗揚げ」と呼ばれている。更に旗揚げからさかのぼると三十年あまり、久遠のように続いてきた天皇と貴族による支配にどごめを刺す、「平時の大乱」が起きている。

平安末期の朝廷は政治の様な野暮な事に巧みな者よりも、和歌と音曲に秀た者が重きをなしていた。血筋と風雅がやんごとなき人になくてはならない貴族の資格といった風潮がゆきわたり、当然のことながら

政治は置き忘れたようになつてしまつて、世に不幸が満ち溢れる事となつていて。朝廷から送られてくる国司と言つた長官はおおむね自腹を肥やして立身出世の材にしようともくろんでいることが多かつた。

そんな、腐敗した朝廷の政治にも、新鮮な意欲に溢れていた次代があつた事を次の歌あらわしている。

万葉集（天平宝治三年—759年—成立）載 欽明天皇の歌

欽明天皇の歌

大和には群山あれど
とりよろう天の香具山登り立ち
国見をすれば国原はけぶり立ち立つ
海原は鷗かもめ立ち立つ
うまし国ぞ
秋津島あきつしま大和の国は

（大和にはさまざまの山があるが、とりわけの山である香具山に
登つて、国を見渡すと平野には炊飯の
煙がたなびいている。海原には鷗が鳥山が入道雲のように立ち
あがつている。本当に豊かで良い国だ
大和の国は）

いじつした庶民を思う天皇の気持ちは、大和朝廷の正史である日本書紀・続日本紀にも度々書かれている。今日思われているほどには平安期の天皇家は執政をないがしろにしていたわけではない。源氏物語などが政務をとる天皇を描写していないから政治と朝廷は無縁のように思はせているのかもしれないが真剣なものであつたと言い得る。しかしながら平安後期に至つて陳腐化した相続と売官がはびこり、人々の苦悩を考えない代官と政治に情熱を持たない貴族が増大し、肥大する貴族達の贅沢は確実に人々を貧困な暮らしに引きずりおろさざるを得なかつた。まさに積み重なる人々の不満こそは政権打倒の原動力なのだ。

保元の天皇の座を巡る争いに際して、貴族の長い安眠が打ち破られる。それまでは政権の争奪は暗殺や流罪といった比較的、小さな鬭争によって決着が着いていたが、この抗争に（さぶろうもの）が加わることによって騒乱は一層はげしいものとなつた。ついに騒乱は貴族の手におえないほど大規模なものとなりはてる。いつなると政権を握る騒乱の中心勢力はもはや（さぶろうもの）達となつた。殿中の警備役である（さぶろうもの）は皇族から席を臣下に落とされて、何代も経つたものたちだ。従来は殿中にいる者としてはとるに足らぬ低い、卑しい身分と血なまぐさい仕事の下働き立ちだが、気がついてみれば、この殿中の庭で雨の日も雪の日も微動すらせらず侍している者達に日は燐々と当たり始めたのだ。（さぶろうもの）達のなかでもとりわけ源氏と平氏はその武力と経済力をもつて、諸国に育つてきた武装開拓領主の利益を守る事ができた。それは平氏も源氏も筆頭の開拓領主でもあるからであった。

保元の動乱（1156年）では平清盛、源義朝が武力の勝利者となつた。保元の乱後も朝廷内の勢力争いは残つて次に平治の乱（1159年）が起つた。平治の乱では平氏と源氏が武闘し、平清盛が（さぶろうもの）の最初の勝利者となつた。

平氏は最初こそは朝廷を警備する卑しい臣下であったが、いつしか朝廷の重要官職を次々と取得するようになつた。平清盛などは、最高の官である太政大臣かつ天皇の祖父として権威をほしいままとするようになつた。朝廷の官、地方の官に平家は急速に増大し、「平家にあらずんば人にあらず」とまで人に言われるようになつた。

清盛は京都市中に、おかげ頭の「禿」なる十五才ほどの少年を300人徘徊させて平家の悪口を言つ者を密告させる「恐怖政治」を現出させた。

また官職を得た平家の若君たちは、たちまちのうちに質素と忍耐の（さぶろうもの）の心得を忘れ、貴族の贅沢な風雅に染まり、かつ横暴、無禮で世を渡るようになつた。又、地方でも？士の所領、社寺の莊園を奪つて横暴はとどまる事がなかつた。こうした事に対する朝廷や世間の反感は積もつていつた。

平治の乱に平氏に破れたが、一方の（さぶろうもの）の旗頭である源義朝の若君源頼朝は14才ながら朝廷の官位もあつたが、平清盛の繼母（母が亡くなり、その後に父の妻となつた人）池禪尼の嘆願により一命を救われ、伊豆の蛭が小島（葦山近在）に流人とされていた。

それから二十年近い後、後白河天皇の第三子、以任王が平家の横暴に絶えかねて源氏に対し平家追討の令を出すにおよんで頼朝の運命は変わつてしまつた。

源頼朝その人は、この時すでに三十三才の年になっていた。頼朝はこの、伊豆の田舎で念佛三昧の質素であるが、従者達と狩りを楽しんだりもする日々をこの先も続けて行くつもりであった。頼朝の乳母、比企尼（比企氏一族）の手厚い「十年におよぶ付け届けもあって、生活に不自由はなかつた。又、源氏の若君であるから人気もあり近在の士、百姓からの頂き物も多かつたのだ。

以任王の令はこの平穏な日々の水面に石を投げこむような事だつた。この令のために平家が地方の源氏討伐を実行し始めたのだ。頼朝は妻の政子の実家の北条氏の助力を得て、この勝ち田のなさそな平家との戦いに腰を上げざるを得なかつた。

政子の父、北条時政は平家の憎まれ者である頼朝を政子の夫に選ぶ事を許さず他に嫁がせた。しかし政子の婚家からの逃亡という強い意志に押されて頼朝との結婚を許した。そして又、頼朝旗揚げに主力として荷担した。平家に対する絶望的ともいえる戦いに運命をかける北条時政という男は肝の座つた人であつた。

治承四年（1180年） 賴朝の平家に対する最初の反撃、つまり源頼朝の旗揚げと呼ばれる挙兵が行われた。

伊豆国の中代（国司の代理人）、山木兼隆は平家・朝廷の威を借りて横暴を極め、近隣の者の怒りとするところだつた。頼朝はこの山木邸襲撃を最初の目標に選んだ。この戦闘で勝利のあと、頼朝は相模に向けて進軍するのだが頼みとする三浦一族の合流の遅れもあって、小田原に近い海沿いの小山、石橋山で平家勢に蹂躪される。

生き残つた頼朝を始めとするわずかな兵は山中を逃走し、小田原に近い真鶴半島から小舟数艘に分乗して房総に逃れた。房総に逃れてから頼朝に運が向いてきた。房総に所領もある三浦氏の手引きで千葉の古来からの大郷士である千葉氏安房氏を手始めに、あたかも将棋倒しのように各地の領主達が頼朝の傘下に入ってきた。まもなく関東一円は頼朝と御家人（家来のうち重要な者、契約により中核的な家来として認証される）の支配する所となつた。やがてこの動きは甲州、信州、に広がり、頼朝の勢力の拡大に日時はからなかつた。関東の戦乱を知り、平家と朝廷は兵をそろえ駿河の富士川までやつて来る。しかし関東の十万騎という対岸の勢力を眼前に見て、それどころも貴族化した平家を中心とした朝廷軍は夜半の水鳥の飛び立つ音に驚き、敗走を始めた。

関東武士の追撃は、頼朝の弟、義経を将として続き、ついには本州と九州のあいだの潮流が激しい関門海峡の壇ノ浦で平家を悲劇的に水没させて終焉した。・・・武士の時代である鎌倉時代の開幕である。

頼朝が旗揚げした治承四年（1180年）から壇ノ浦の平家水没の寿永四年（1185年）までたつた五年間である。鎌倉幕府を立ち上げるために、このように短い歳月しかかからなかつたと言うこ

とに著者は驚く。

さて、このように瞬く間に鎌倉政権を立ち上げた頼朝だが、今に伝わらない事情で亡くなつた年は西暦1199年のことであった。頼朝は旗揚げから19年、57才の若さで世を去つた。主として北条家の手になる、歴史書吾妻鏡は写本の諸本いづれも頼朝が亡くなる一年あまりを記事とせず不気味な沈黙を保つてゐる。

正治元年（1199年）頼朝が亡くなつて、頼朝と政子の間に設けられた長男の頼家が十八才で鎌倉幕府第二代将軍として即位する。ちなみに後の実朝、千幡はこの時、数え八才であった。

北条名越邸は北条時政が広い敷地を求めて山林であつた材木座海岸に近い山に建てた邸宅である。鶴岡八幡宮と材木座海岸のあいだには小山群が壁のように立ち上がつてゐる。その中腹に台地状の土地があり、時政はこれからの戦乱を予測して城のようない邸宅を造らせた。名越は越える事が難しいという意味の「な・越え」が地名の起こりだといふ。

北条政子邸を出発した千幡を護送する一群の騎馬を交じえた甲冑の兵達は広い街道から右に折れて進んだ。やがて木々のあいだから時政邸の堀が見えてきた。門を入り広い馬場（馬を調練し、止める場所）にはいる。

千幡と乳母が乗つた二台の輿を守るよつて、はさんでいた騎馬の士達は馬場で馬から下りた。

白縄水干姿の精々『せいぜい』しい貫禄ある四十代の三浦義村と若々しい二十になつたばかりの北条泰時は輿から降りる千幡を片膝ついてまちかまえる。

輿の戸が静かに供の者の手で開けられると頬のふつくらした、色の白い愛くるしい少年が平伏する武士達の前に置かれた鳳凰輿（屋根に金色の鳳凰鳥を飾つた天皇が使うような豪華な輿）からおずおずと姿を現した。

時政邸では鎌倉幕府筆頭文官の中原広元が待ちかまえていて、広元一人が千幡を先導して邸内に入つていく。山中の邸内の渡り廊下には鳥の声が聞こえるばかりである。

とある広間の閉め切つ板ふすまの前で「しばしおまち下せ」こと広元は千幡を振り返り声をかける。

「若君ただ今、到着致しました」と室内に声をあげるとしばらぐの間の後に板ふすまがするすると開け放たれた。

見ると五十畳ほどの板の間に上座をしつらえた広間の下座に母の

政子と政子の父の北条時政、母の兄弟の義時が座している。千幡が母を見つめると、母が口を開いた。

「上座にお座りください」母の言葉はいやに丁寧だった。実朝がとまどいながら首座に座ると、母は待ちかねたように言った。

「将軍頼家様はご体調が悪く、将軍職を退かれます。頼家様は三代将軍としてあなた様を指命なされました」

「私が将軍になるのですか」千幡は、今まで考えた事もない立場に自分が立たされた事を知った。

兄の頼家将軍には子供が沢山いる。だから自分が将軍になることはないと、千供心にもそう思っていたのだ。

「近いうちに、元服と将軍引き継ぎを取り行います。あなた様に天皇家より源実朝の名を頂きました」

いつもは会うことにこなす母も祖父の時政も叔父の義時も堅い表情を崩さなかつた。「あなた様」と

母の政子に呼ばれたことは、今まで一度もないことなのだ。

母は御所で遊んでいる千幡を見つけると、遠くから手招いて、ひとと抱いてほおづりしてくれたのに、今日はよそよそしい他人のようだと思つた。

9月15日 突然、朝方に千幡の乳母、安房の局が時政邸から大蔵御所内の政子邸にやつて来てこう言つた。

「お姉様、それが良いと若君が時政邸に移られましたが、よくよく牧の方（時政の後妻）の様子を見ると笑顔の中に害心が含まれて、お守役として信頼できません。このままでは、きっとよくない事が起ること思われます」

尼御台所（政子）はこの言葉に答えて言つ。

「そうですか。私は孫の一幡が、比企との争いに際して亡くなつた時から父と、父を裏で操っている義母のやり方に疑惑を持っておりました。牧の方は若君の命を狙つているかもしません、すぐに千幡を迎えて行かせましょう」

尼御台所は北条義時、三浦義村、結城朝光を呼び出して千幡を迎えて行かせた。

一刻のあと、五十騎にものぼる一団が北条時政の名越邸に荒々しく駆けつけた。門衛が何事かという顔をして一行を見上げると、いつもの顔見知りの上司の面々ではないか。

「いかがなされましたか？」と門衛が声をかけると、「千幡君をお迎え申せと、尼御台所の下知げち（命令）があつた。若君を連れて帰る、すぐここにお連れしてくれ」と、一番年上の三浦義村が馬上から声を発した。

「それはまことですか」

「この面々を見て言う言葉か、千幡公を粗末に扱うという伝聞があつたので、急遽ここにやつってきたのだ、すぐお連れもうせ」

北条時政は邸に不在だつた。奥にいた牧の方は迎えに来た顔ぶれを聞いて事態のただならない事を感じて、千幡を連れて門まで出できた。

義時は、牧の方を無視して言つ。「若君、尼御台所がお連れ申せ

と下知なされました。一緒に来てください

「母が呼んでいるのですか？おじいさまは『存じなのですか？』

「良いのです。お母様の『一存なのです』

千幡は、こうして尼御台所邸に連れ戻された。夕刻戻ってきた時

政は政子と義時がやつたことを牧の方から知らされて激怒した。

怒る時政を、なだめられるのは、北条家の女中頭とも言つべき、伊豆で小さな領主であつた北条に昔からいる老練な駿河の局のみであつた。「すぐ取り返しに行く、兵も出せ」と声を荒げる時政をやんわりとした口調で「まあまあ、お怒り」もつともでござりますが政子様も義時様もよくよくお考えなのでございましょう。殿がお出かけになつては争乱になりかねません・・・私めが事情なり聞いて来ましょ」

駿河の局は尼御台所邸に参上してこいつ言つ。「こちらに多少の粗相はらつたかも知れませぬが、うわさのような大層なことはありません。お許し下さるよう時政殿は申しております」

「解りました。千幡の元服と將軍着任が済みましたら、そちらで又、お身の回りのお世話をお願いたしますと、お伝えください。・・・本当に、あなたのような方がおられるので私は安心しております」と政子は微笑む。

去る七日、朝廷は朝廷は実朝に従五位の位と征夷大將軍の宣旨（せんじ）（天皇の命令）を下された。
その文書が今日鎌倉に到着した。

九月二十九日 晴れ 將軍を退位させられた賴家が鎌倉から伊豆の修善寺に護送される。巳の刻（朝十時頃）、甲冑の武者百騎を先駆として女騎（武装した女性の騎馬）も十五騎、豪華な輿が三張、童子姿をした舎人が沢山の矢を馬にくくりつけて歩む。その後を一百騎の武装しない隋兵が続く。馬をゆっくり歩ませている。

女騎や童子姿の舎人（下級武士）を一隊に加えるのは、平安朝風の示威なのだ。天皇の一行には、与太者みたいな者に珍奇な格好を

させて歩ませたりすることがあった。この風俗の取り入れは、やはり中原広元の案によるのだ。

街道の庶民達は頼家將軍護送と知つて頭を深々と下げる。実に多くの庶民が街道に出てきて道を埋めている。合掌している者もいる。しかし事が事だけに、庶民はちらちらと行列を上田つかいで盗み見る様子だ。

騎馬は鎌倉の市中を抜け、江の島を沖に見る腰越のあたりの閑寂な田畠を抜ける道にさしかかるあたりから隊列は、速度を速め、あたかも進軍する一隊のように、あたりを気にしながら進んで行くのだった。

頼家がこのように更迭されるのは、頼家ののような自我の強い將軍は北条独裁のために邪魔であつたからだ。北条時政には頼朝暗殺説があるくらいである。頼家の病は北条時政にとつて良い機会であった。以前から時政は將軍頼家の権力を弱めることに熱心であつた。

頼家が即位してまだ三ヶ月しか経たない時、このままで鎌倉政権は維持できないという名目で時政と広元らは十三人の御家人（中原広元、北条時政、みよしやすのぶ帮助委義時、なかはらちかのぶ比企能員、三善康信中原親能、三浦義澄、みよしよしみ和田義盛、わだよしあり八田知家梶原景時など）で、主立つた執政をとることを決めた。

頼家將軍はこれに対抗して、比企三郎、比企余四郎ら近習五人だけに將軍に目通りできる権限と五人に刃向かつてはならないという特權を与えた。頼家が病に倒れたのは、そんな幕府内における勢力争いのさなかであった。

鎌倉幕府の手になる史書「**吾妻鏡**」^{あづまかがみ}は以下のように頼家を最悪の將軍として描写する。

一 礼儀を知らず御家人（直々の重要な家来）を何々殿と呼ばず、北条時政すら呼び捨てにした。

一 御家人の持つ領地が五百町歩（一町歩は秀吉の太閤検地まで三千六百坪なので、計算すると百八十万坪＝約六平方キロ）以上の領地を没収し、近侍達に分け与えると言うことで、全国の土地台帳の検討に入った。五百町歩は前記のように六平方キロ？である。これは一キロ四方の土地六コ分であるから縦三キロ？横一キロ？の広さの土地で大きな村ほどの広さにすぎない。小さな御家人には十分な広さかも知れないが千葉氏のような大御家人には驚くべき狭さである。この事には幕府高官、有力御家人はひどく驚いた。御家人の所領を貴族や他の者から守る事（**安堵**する事）^{あんど}が鎌倉政権の大事な任務であるのに、將軍自ら、その約束を破るとは、政権の自殺に等しい、問題外の暴挙だ。

一 御家人同士の境界争いの裁きに図面をださせ目の前でまん中に筆で黒々と線を書き込んだ「得た土地が広いか狭いかは運しだいだ、いちいち使いを出して現地を調査していくには面倒でかなわない。境界争いは今後もこのように取り扱うから、これが嫌なら訴訟を起こすな」と言つたという。

一 有力な御家人、**安達景盛**^{あだちかげもり}に命令を与えておいて、留守にさせた隙に、評判の美人である愛妾を奪つた。

これは、吾妻鏡の描き出す頼家の乱行だが、伊豆修善寺に伝わる話には頼家の違う面が見られる。

頼家は押し込められた修善寺で近所の子供達と野山を遊び歩き、子供達に非常に人気があったという。現在でもこの地には「愛童将

軍地蔵」といふものが残されている。

頼家の執政は若さから来る荒っぽさがあつたが畠妻鏡が伝えるほどには所行に問題があつたとは思えない。

十月八日 風のない穏やかな秋日和だ。

戌の刻（午前八時頃）北条名越邸で十一才の千幡（実朝）の元服の式が執り行われた。中原広元（最高文官五十五才）小山朝政（頼朝旗揚げより従軍、五十才）、安達景盛（広元に次ぐ文官、流人であつた頼朝の頃からの家来、盛長の長男、49才）、和田義盛（頼朝旗揚げから家来、猛者として知られる五十六才、和田一族の長）、中条家長（転戦し、強兵で知られる、38才）、を始めとした御家人百人あまりが座に着いている。

千幡は、まだ少年の身体つきながら、凛々しく上座に座っている。髪の事は義時、加冠の事（冠をつける係）は平賀義信（源氏の古老、平家と戦つた平治の乱の頃からの古い家来、筆頭御家人、60才）が受け持つた。

休みどころでの食事は北条泰時（義時の息子）江間親広（義時の娘婿）が担当した。

十月九日
午の刻（昼）、に千幡あらため実朝は名越邸から輿で、御所に向かつた。

鎌倉幕府の御所は鶴岡八幡宮から三浦半島の東海岸に抜ける金沢街道の道筋、十町（約1キロ？）に満たない距離に建てられている。方形の敷地の海方向が正門の南門だ。実朝の隊列は、その南門から入つて行つた。

昼過ぎより政所始めが行われる。義時と広元が政所の建物の執務室に着座して、政所執事の二階堂行光が、めでたい文書を書いた。その文書を時政が受け取り、御簾を下げた政所、将軍の座にいる実朝に手渡した。実朝将軍は、その文書に眼を通すのである。

その後、時政が執務室に戻ると、御家人等が座している料理が用

意されている別室の会場に一同は足を運ぶ。実朝将軍も入ってきたのを見届けると、広元は大きな声で告げる。

「これより、将軍、兜始めの義、取りおこないます。御家人各位、ご照覧願います。」

実朝は時政らの助けで甲冑を身につけた。少年のための甲冑とはいえ鉄板を各所に縫い込んだ甲冑はずしりと重い。実朝は力が弱い方だから辛い。

それでも甲冑を身につけた実朝は初々しい。わき起いみるよつて、元座る武将達の中から拍手と歓声が巻き起こつた。

南面の池を造作した庭に贅を尽くした金細工漆塗りの鞍を据えた白馬が引き出されてきた。庭に多い桜の木は赤々と紅葉して池にその姿を映している。椅子に座していた実朝はよろけそうになりながら立ち上がり、屋内から前庭に向けて歩いて行く。時政は粗相のないように、目立たぬよう手を添えて新将軍をかばつた。ここで転んだりしては屈強な武士である御家人の笑いものになる。その思いは二人に共通している。

時政は廊下から庭に下りる階段から庭を歩き馬に乗るまで、そつと手を添えた。・・・先日の比企能員暗殺の折、物陰から見てた時政の冷たい視線を知らぬ者には、時政は人柄の優しい好々爺としか見えなかつた。

実朝はつまく馬上の人となる。その姿は武者人形の可愛さである。ここで又、オウといづどよめきと共に御家人らしい強烈な拍手が起つた。

祝宴の後、陽もそろそろ暮れようという頃、広い馬場に御家人一同は移つた。時政の五男、北条時房ほりょうじょが奉行して（担当責任者となつて）、將軍御弓ごう始はじめが行われた。

真つ赤に染まつていた鰯雲はたちまちその色を灰色に変じた。空が一刻、一刻、濃い藍色に染まり御所はたちまち暗闇に包まれようとするその時、臨時に造られた弓場を囲む広場に置かれた数多いかがり火が惜しげもなく着火された。

実朝将軍の姿とそれを見守る御家人数百名がかがり火に照らし出されて、まるで昼間のようである。

北条時房ほりょうじょ二十八才（頼家の好きだつた蹴鞠けまつの仲間で親しかつた。頼家側近でありながら今日の晴れ舞台の大役をこなすので、北条氏の頼家にたいするスパイ説がある）は姿美しい精悍な若武者である。

その時房が美しい大声で百余名の御家人を堂々と見据えて「これより將軍家お弓始めが行われる。まずは鎌倉殿（実朝）が弓をとられる」とつげる。源氏にとって弓術は伝説的な家芸である。実朝も幼い頃から玩具のように弓を扱つてきたから、腕は確かである。

実朝は射所に立つた。実朝の姿がかがり火で照らされる。弓を引き絞り、放たれた鏑矢（音を立てる矢、戦闘の始めに射たり、神事に用いられる）は、ヒヨーと高らかに音を立てて的を目指して飛んだ。見事的に射る。一番、二番も射られるがこれもみな的にあたった。その度ごとに後家人の喚声と拍手が盛大に起こった。三本射終わつて、実朝は後ろに居並ぶ御家人達を振り返り満面の笑顔で会釈する。

続いて御家人から選ばれた射手が実朝に変わり一人ずつ射所に立つた。それぞれが普通の矢を二十五本ずつ射る。射手は和田義盛、うんのゆきうじ 海野幸氏、はんのゆきうじ 榎谷重朝、望月重隆、愛甲季澄、市河行重、工藤行光、藤澤清親、小山朝光、和田胤長である。

「 賴家が將軍家に對して書を送つてきました。」

「 深い山の中でひつそり暮らしております。」 こんな私ですから、退屈で非情に辛いのです。口頃召し使つていた者達を寄越してくださいるようお願い致します。それから安達景盛の女を私が奪つたなどといふのは濡れ衣です。女が景盛の愛妾であった事を私は全然知りませんでした。景盛に用事を言いつけたのは、愛妾を奪うためなどではありません。どうか、もう一度景盛を調べ直してください。私の不名誉を拭いたいのです」

その文書は広元の手元に届いた。広元は時政と義時にこんな文書が届いておりますと見せただけで、政子には決して見せずに、次のような文書を賴家に送つた。

「 そのような所望には答えられない。また今後、書を出すことを固く禁ずると」 書いて三浦義村に持たせた。吾妻鏡から読み取れる事は、北条時政と北条義時は賴家が女色に狂つているように告げて、政子の心を賴家から離反させたという事である。政子はかつて夫、賴朝の愛妾宅を独断で焼くほど、色狂いが嫌いな人である。正室がいながらするい策略で女を取つてしまつなどというのは、我が息子でも許せなかつたのだ。景盛の年ははつきり判明していないが、賴家とは親子ほども年が隔たつていると推測できる。景盛は、時政にしむけられて、一番若い二十代の愛妾を賴家に近づけて、いわば「はめた」わけである。景盛の母の実家は比企氏である弱みが景盛にある。それぐらいのすりよりはあり得ることである。安達景盛はそれ以降も幕府重臣として一生をまつとつしたのである。

十一月十日 伊豆に使いに出された三浦義村が帰つてきた。政子はひつそりと暮らしている賴家の事をこまかく尋ね、深い憂愁に包まれたといつ。

十一月二十二日 実朝将軍は御所の馬場で小笠懸こがさがけを試みる。

小笠賭こがさのひとは四寸よんしゆ～八寸はっしゆ（12～24?）の円形の木板を竹にはさんで的まととして疾走する馬から轟ひきめや目矢ののめや（音が鳴る矢）で至近距離（2?ほどほど）から射る競技きぎである。一町いっちょう《百九ひゃくきゅう》ほどほどの走路の最後に的まとが立てられ、走路を走り、眼下に立つ的まとを射るのである。

馬上の実朝は平服である合わせ襟ひたたれの直垂ひたたれの上に小袴こはまを着けている。

遠くから実朝は的まとに向かつて馬を疾駆させた。

古強者ふるつわものの小山朝政おやまとまさと和田義盛わだよしのぶがその動きを、走路の最後に立つてそれを見ている。疾走する馬から、ヒヨウといつけたたましい音を立てて矢が放たれ。馬の駆ける地響きがこれに加わる。

カンという音を立てて的まとがツ吹ふきつ飛とんだ時、二人の古強者は満足げに頷いた。小山朝政は頼朝旗揚しのつけののやまあげげの時に参戦した下野しもつけ小山結城朝光おやまとの兄あにである、現在四十八才よそじゅうはちで、幕府内まくふないで重用しうようされている。和田義盛はその武勇の誉よれがあつて、侍所別当さむらいべつとう（軍司令官ぐんじりかん）を務めている。故頼朝と同年齢で五十八才よそじゅうはちだ。

「わすが源氏の血筋けいけいであらせられますな。素質そしつのある弓ゆみ使いでございました。」実朝が戻もどってきた時、和田義盛は実朝にしゃがれた低い声で言いつた。実朝は義盛の飾らない豪放な性格が好きである。微笑むと「そうか」と答こたえた。日前に小山朝政が馬を走らせて来て、的まとを射る寸前すこまへである。

十一月一日 将軍実朝が特にお願ねがいして法華八講ほっけはっこうを鶴岡八幡宮つるおかはちまんぐうで行はった。法華八講は法華経八巻を一巻ずつ朝夕に僧そうが講義こうぎし、四日間かけて終了する死者ししゃを供養くうようする歳事としことだ。

22 冬の日だまりのような日々

比企一族の滅亡は、実朝に深い衝撃を与えた。実朝は思った。父の頼朝が流入の頃から頼朝の乳母の比企尼は十五年もの長い間、経済的に暖かく支えてくれたのに、北条氏はその恩ある人々を族滅してしまった。なんと無惨なことだろうと。

自分の今の将軍位は、一幡の悲惨な死がもたらしたものだ。自分はその事を忘れてはならない。せめて比企の人々の、み魂を供養せねばならない。そう思つて、この法事を思い立つたわけなのだ。政子も割り切れぬ気持ちがあるのでだろう、ひそかに回廊のすみで供養に参加した。時政と義時は、この法事の事を伝え聞いて、当然なことだが、不愉快な顔をしたといつ。

建仁四年（1204年）一月二十日改元、元久元年 実朝 十三才

一月五日 快晴、風静か

将軍実朝は鶴岡八幡宮に初めてお参りする。多数の供が付従つた。
結城朝光が実朝将軍一の付人として将軍の剣を持つた。法華経を安樂房が唱えた。

結城朝光は母が頼朝の乳母のひとりであつた。頼朝が千葉から攻め上がつて来て隅田川のあたりに来た治承四年（1180年）母の手引きで臣下となつた。この時わずか十一才。以来各地を転戦し、壇ノ浦の戦いにも参加（十九才）した。鎌倉に帰還後は戦いを終えた義経が江の島あたりの腰越に戻つていたところに、頼朝の使者として行き「鎌倉入り不可」を伝える事もした。又、横暴を極めた梶原景時に対し、三浦義村等と御家人六十人を集めて「景時糾弾訴状」が作成されたが、その作成者として名を残している。訴状の作成にあたつて、六十六人の御家人の中に、まともな文書を書ける者

がいないのである。どうやら朝光だけが文に堪能らしい。御家人衆は朝光に文書を書かせて困難を乗り切ったということなのだ。

23 夏の日だまりのよつうな日々

経を唱える安樂坊は専修念佛の浄土宗の開祖である法然の弟子で、美声美男で知られていた。一年後には京都において、念佛会に来た後鳥羽上皇の女房二人が感激のあまり出家してしまつ出来事に巻き込まれ、上皇の逆鱗に触れる。このことは浄土宗の流行について反感を高めていた旧来の宗派の僧達の反撃の好機となり、ついに京都六条河原で斬罪になつてしまつのだ。・・・高僧六人による読経は美声、美僧、豪華な衣装を伴つて、実に華麗なものであった。

唱えられる法華経は西暦40年から150年の間に徐々に増筆されたお釈迦様の日々と言動を記録したと言われるものである。お経は一般に訳のわからない呪文と思われているが、ちょっとお経の世界を覗いてみよう。

如是我聞 一時佛住 王居城（これの「」とく私は聞いた。ひとつき、お釈迦様は王の居城に住んだと）べつじゆじゆくへた耆闍崛山中 興大此丘衆 万一千人？（城はグリドラクータ山中にあり数多くの僧が一緒にいた）皆是阿羅漢 諸漏己盡 無復煩惱（皆是は修業を成し遂げたもので、ふたたび煩惱に捕らわれることはない）達得己利 盡諸有結 心得自在（己のあるべきを体得し 田的を達成し 心の制御を得ている）実朝は幼くして、その内容を理解している。まだ幼い実朝だが、唱えられる一節一節が、実朝には理解できることなのだ。仏様の心が解る実朝將軍が殺し合つ武将の世界のただ中に住むのは辛いことだつたと推測される。

一月十日 快晴 寒風が強い 曙ごろ風は和らぐ

午の刻（昼）、御弓始めが行われた。実朝將軍は座所の御簾を上

げて見物する。射手は六人で、一^二名ずつ三回、各人二十五矢を射る。

一番	和田胤長	榛田重朝
二番	諏訪盛隆	海野行氏
三番	望月重隆	吾妻助光

先日、古強者の弓さばきに驚いた実朝だが、今日は弓使いとして世間に知られた若い屈強な武士達による弓始めだから、もつと迫力がある。矢は恐るべき早さで的をめがけて飛んで行く。今日使われている矢は音の立つ^{ひきめや}臺目矢である。全150本、ひゅう、ひゅうというけたたましい音が山茶花^{さざんか}が赤や桃色で咲いている静寂な御所内に響き渡っている。

將軍実朝の座の近くに北条義時の息子泰時を呼んである。実朝の近侍として実朝も望んだが泰時の父、義時も、その交遊を喜んでいるようだ。一人は、従兄弟の関係である。泰時は温厚な気質で、理性的である。実朝より九才年長の一才だ。

「素晴らしい腕だな、泰時殿」

「さようでございましょう！先日言った通りではありますか。鎌倉は、弓と馬の技で、度重なる戦を乗り越えてまいりましたのです。鎌倉殿（実朝の事）のおじいさまにあたる為義さまの弟であつた、為朝さまは、天下無双（世に二つとない事）の弓使いとして、有名でした。源氏は保元の乱の時、上皇側と天皇側に別れて、兄弟どうしあい争いました。上皇方に為朝さまはつかれ、天皇方に鎌倉殿のおじいさま義朝さまと平家がつきました。上皇前において合議の時、夜襲を主張する為朝様に、上皇ともあろう方がそのような正しくない攻め方はすべきでないと藤原氏が主張され、それがもとで上皇方は破れる事となるわけです。しかし破れたとはいえ、為朝さまの強弓と騎馬の優れた戦いぶりは今は伝説となつております、為朝様の射る矢は敵の武将を貫いて、後の武将の鎧に刺さつたということらしいです。

為朝様は戦に負けたあと、伊豆大島に流されましたが、たちまちのうちにその武力で、伊豆諸島を支配したといつ話しても残こされています」・・・泰時は物知りである。

一月十一日 晴れ

將軍読書始めが行なわれた。孝経が担当の者によつて読上げられる。孝経は中国、孔子の日々の言動を記録した書だ。

孔子は紀元前551年、中国の春秋時代に産まれ、武人の次男

であつたといつ。幼くして両親を失い、苦学して礼學（行事にさだめられている動作や言葉、服装、道具などの知識。また上司にたいする礼義、倫理などの教え）を学び、体系化した、倫理学者である。実朝は、兄の頼家と違つて読書が好きである。今日の読書始めの固い話しひに厭きない。。

一月十八日 澄み切つた快晴

義時と鶴岡八幡宮の別当（寺務を統括する主席僧侶）尊曉が二所詣に出発した。一所詣は源頼朝が始めた祈禱行事で、源氏の守護社である伊豆山神社と箱根権現、それと後に追加された三島退社を馬で巡る旅である。

行事を始めた頃は鎌倉から相模湾沿いに熱海の伊豆山神社に進み、熱海より箱根山に向かい十国峠を経て芦ノ湖の箱根権現社、三島大社を巡った。

しかしこの順路で巡ると、熱海の伊豆山神社に行く途中、小田原の先、石橋山を通る。

石橋山は、頼朝が平家に対して反旗を翻して、土砂降りの雨の中で最初に負け戦になつた曰くの場所である。頼朝はこの後、山中を敗走し、やつとの事で真鶴半島から房総半島に向けて脱出することになる。

真つ青な青い海が広がる、白波が砕ける磯から急に立ち上がつた小山（現在はみかん山となつている）の連なりが石橋山だ。頼朝はこの山中で、佐奈田^{さなだよじち}一、武藤三郎を始めとした親しい直臣の全滅にあつた。

頼朝は石橋山を通過すると一所詣の最初から、重苦しい悲しい気持ちに包まれ、。それは、祈願にふさわしくないと順路を変えた。つまり、こうである。鎌倉—江の島—小田原—早川—強羅—芦ノ湖・箱根

—三島大社—箱根峠—十国峠—熱海・伊豆山神社—真鶴—石橋山—早川—小田原—江の島—鎌倉である。実朝將軍は辰の刻（朝六時頃）から御所南庭で七回ずつ三度、伊豆、箱根、三島に向かい拝礼する。

実朝は今回は参加しない。義時が將軍の代行をする。比企残党などで山中の治安も安定しないし、年も十三才であるから騎馬で五日間の早旅は体力が持たない心配もあるからだ。

義時は鶴岡八幡宮を早朝、お参りしたあと、一所詣に出立した。

一月二十一日 晩鐘の頃、伊豆山に泊まりもせず義時は鎌倉に帰ってきた。（通常は宿泊する。温泉が豊かに湧きだしている所なのに泊まりもせず帰つてくるのは、將軍が幼いので、將軍の事務が溜まっているのだろう）

一月十三日 風もない春めいた穏やかな日だ。御所の梅が咲き誇つて、香りがそこはかとなく漂つて。実朝は急に思い立つて、鎌倉の前浜の由比ヶ浜に出た。北条義時、北条時房（義時の弟）和田胤長、多々良四郎、榛谷四郎、海野小太郎、望月三郎、諏訪太夫、藤沢四郎、愛甲三郎、等を伴い、小笠懸、遠笠懸（いずれも走らせた馬からの意をいる競技。小笠懸は至近距離の的を射るが、遠笠懸は遠方の的を射る。矢は音を立てる轟矢だ。）を楽しんだ。実朝将軍は棧敷から競技を見ている。

改元、元久元年（1904年）

一月二十日 実朝は幕府の鞠庭（まりにわ）で近侍のものと蹴鞠（けまつ）を楽しんだ。女房達（実朝のお世話をする召使いの女達。女房の語源は女の住居。そこに住まつ者達という意味）も五人ほど廊下から、その様を見て。鞠庭は八間（15?）四方の蹴り場と、外側の一間の余地で造られている。四角には松、桜、柳、楓などが植えられるのがきまりである。

「幕下よろしいですぞ」

実朝気に入りの近侍、東重胤（実朝より十五才年上、当年二十八才）が侍らしい強くて太いが美しく響く声で褒めた。

「そうか解つたぞ」と実朝が高い声を張り上げる。重胤と実朝は相対して交互に鞠を蹴り上げている。

「そら、どうだ」と実朝は高く鞠を蹴り上げる。

「お見事、お見事」をつかまれましたな」重胤は目鼻立ちの整つた青年だ。はじけるような笑顔を実朝に向ける。

「このじろ、閑なときは一人でもやっているんだ」女達はそれを微笑んでみている。

「あ、落としてしまつた」

「そろそろ、お疲れのようですね一休み致しましよう

実朝と重胤は鞠庭に面した、広廊下に座して菓子を前に置いて茶（当時は抹茶しかない）を飲んでいる。

「これが茶という物ですか」一口飲んだ重胤は苦いという顔をする。
「はは、苦いだろ。けれど慣れると、甘い菓子とあってうまいと思
うようになるんだ。一度宋に渡られた栄西禅師が宋からもたらした
飲み物なのだよ。高僧栄西様は京から来られて、鎌倉の為に日々過
ごしておられるんだ」

東重胤は坂東八平氏（平安中期に坂東^一関東に土着して領主となつた、桓武天皇を祖とし、臣として皇族を離れて平姓を名乗つた、桓武平氏を祖とする諸氏。秩父氏、上総氏、千葉氏、中村氏、三浦氏、鎌倉氏、その流れの土肥氏、梶原氏、大庭氏、長尾氏などをいう。各氏はもとは皇族として地方赴任の重席官吏として任地に住んだ人々であるが、地元で勢力を伸ばして土着した）のひとつである千葉氏の一族だ。父の東胤頼は千葉常胤の六男で分家して下総東^二に所領を得たので東氏を名乗つた。歌の名手として名高いが、頼莊に所領を得たので東氏を名乗つた。歌の名手として名高いが、頼朝旗揚げ以前、大番役（地方有力領主に命ずる三年間の朝廷警備役）を務めたあと、同じく大番役を務めた^{みうらよしそみ}三浦義澄と共に流人であつた頼朝の下に参上し、そこで頼朝に平家追討の旗揚げをすすめ、相談した。また、石橋山で破れて安房国へ逃ってきた頼朝に加勢するよう、父の千葉常胤に勧めて、受け入れられ、後日の頼朝勝利の元となつた。

東重胤は、父の胤頼に歌を習うと共に教養も知性も優れた人であつたから、実朝の気に入る所となり実朝の近侍として頭角を現した。

「ところで重胤どの、重胤どのは、あの高名な歌人、藤原定家殿のお弟子と聞きましたが本当ですか。」

「あ、まあ本当ですが、定家殿には弟子はたくさんあります。それの一人と言うことです。幼いときは大番役を務める父と共に京におりまして、歌人として父は一応の名をなしておりましたから、邸に訪ねる歌人も多く、もちろん定家様を宴にお呼びすることもありました。それですから、いつのまにか、この私も歌を作るようになつたという事で、父のおかげで定家様の弟子を名乗る事ができたようなものです」

「定家さまが東家の京屋敷に見えられたとはすごいですね。私はこの頃和歌が好きになりましたね、歌も作って見たいと思っているのですがなかなか良い歌ができないんです。重胤どの、私に歌の作り方をおしえてください」

「私で良ければお教えいたしましょう」

話し込んでいた二人が気がついたときには、夕田は御所の白壁を赤く染めているのだった。

藤原定家はこの時43才、父、藤原俊成しゅんせいとともに歌人として名高い。この時はまだ

作成されていないが「新古今和歌集」「小倉百人一首」の編者として知られている。百人一首に収められた定家の歌は「来ぬ人を待つほの浦の夕凧に 燃くや藻塩の 身もこがれつつ」（来ない人を待つている松林の連なる浦で 藻を焼いて塩を作っている。あの煙は、恋に焼かれる私の気持ちのようだよ）だ。

また18才から74才まで56年間に渡る日記「名月記」は、鎌倉時代の歴史書としても重要な書だ。

三月一日 御所の桜が絶え間なく散っている。

朝方、和田義盛の孫の朝盛が、弓の指導に来ている。朝盛の父は常盛は弓の名手として知られ、父の指導の甲斐もあって、まだ14才ながら、すでに、鎌倉で有名になっている。実朝は若い弓使いとして御所を訪ねた朝盛とたちまち仲良くなってしまった。今朝は「あそび」をかねて、修業といって実朝が呼び寄せたのである。御所の裏側の山が大蔵山で、大倉山の麓に的が作つてある。

実朝が弓を射ている。「だめだ、当たらないな、弓の張りが強すぎる！」

「鎌倉殿、腕の力が足りないのでござりますよ！」

「いや、弓の張りが強いのだ！」

「殿、弓術は源氏のお家芸でござりますよ、頑張つてお励み下さい」「つるさいんだ、お前は！こうしてやる、弓が下手でも組み討ちなら負けんぞ」と突然、朝盛の袴の腰をつかむと押し倒そうとする。

「うむ、それならば私は平家になつてやる、源氏などには負けませんぞ」

一人は一匹の犬のように泥だらけになつて、倒れて組み討ちを楽しんでいる。組み伏せられた者が負けなのだ。一人は上になつたり下になつたりして、どどめを刺されまいとする。右のこぶしを小刀に見立てているのだ。

「や、意外に強い！若様は非力と見えましたが、あなどれませんね」「あはは、力は強いのだ、参ったか」朝盛はついに組み伏せられてしまつた。

一人の少年の上から淡雪に似た桜がハラハラと降り積んでいる。

30 日だまりの陰り、兄將軍が殺害される

三月十五日 御所内において天台小止觀てんだいしょうしがんについての講義があつた。実朝と共に母の尼御台所（政子）も傍らに座つてゐる。

天台小止觀は三代目天台大師（実名、智ち？西暦538～西暦597、中國隋代の僧）によつて書かれた。禪の作法書として初めてのもので、現代にいたるまで、これ以上に詳しい座禪についての書はない。

四月二十日 実朝は広元に言った。

「聞くところによりますと、父上の頼朝將軍の政治文書を御家人おののが随分所有しているそうですね。この際、それらの文書に目を通して父上の考えに触れたいと思うのですが、どうでしょうか。どうも私には政治の事で良く解らないところがありますから、もつと学ばないといけません」

「それは良いお考えでござりますな。早速御家人に通達して文書をもつて来させましょう。よこせと言えば御家人にとつては証文や宝物みたいな物ですから隠してしまつに違ひありませんから、借り受けることにして、なるべく多く集めてみましょう」

七月十四日 末の刻、（午後二時ごろ）急に実朝將軍が病氣になつた。御家人が群れて大蔵御所にやつて來た。相当重く、治る氣配が見えない。鶴岡八幡宮で般若心教が唱えられた。

六百巻に及ぶ大般若經の要約である般若心教は三百字たらずだが、仏教のありがたい本質が説かれて功德があるというので、読經に良く用いられる。

七月十九日 西の刻（午後五時ごろ）飛脚が幕府に着いた。十八日の昨日、前將軍源頼家が修善寺で亡くなつたという文書が届けられた。実朝の病氣は相変わらず重い。疱瘡にかかつてしまつたのだ。実朝はぼんやりした頭で兄、頼家の訃報の文書を開いて見た。

母の、政子が伝え聞いて、あわただしく文書を見に来た。政子の身体は震えていた。文に目を通す政子の顔は蒼白だ。

「頼家がこんなに突然なくなるなんて、嘘です！鎌倉を出立した時には病も癒えて、修善寺で元氣にしていると聞いていたのに・・・」

「兄上は、ご病氣が再発されたのですか」

「いいえ、殺められたと、噂が伝わっています」

「え！殺められたというのですか」

「父上が、ひよつとすると・・・」

「時政のじいが、殺めたというのですか、まさか！」

「嘘と思うでしょ？が、本当です。私の義母の牧の方は自分の血筋に將軍職を持つてきたい思つてます。それに、頼家は牧の方の悪い性格を見抜いて冷たくあしらつていましたから余計です。父はこの頃は牧の方の言いなりですから、あります」

「あ、義時！」政子の兄弟の義時がついと部屋に入つて来た。

「姉上、どうも風聞では頼家どのは殺害されたようです」

「やはりそうですか」

「姉上、お気持ちを察して言葉もありません。そこまで頼家將軍を追い詰める事はありませんのに、ひどい仕業です」

「そうです。一幡の殺害といい、頼家の暗殺といい、父と牧の方のやり方は許せません」

十五才の実朝は驚きの気持ちで、それを聞いている。

この出来事は鎌倉の庶民のあいだで、尾ひれをつけたように姿を変えた。毒殺された。湯殿に入つてゐる時、数人の武士に乱入され、裸のままフグリを取られたなどというひどい噂もあつた。

真相は闇の中であつたが、どうやら時政の手の内の者に謀殺された事は本当のようであつた。・・・

しかし、実朝は義時をも疑つてゐる。

頼家の葬儀がどこで行われたのか、記録が残されていない。それほどひつそりしたものであつたと思われる。

七月二十四日 頼家に親しかつた御家人が容赦なく討たれてゐる。それが実朝の耳に入つてくる。近頃、義時の刺客のようになつてゐる金窪行親かなくぼねきちかの仕業だといつ。義時も単なる好人物ではない。父の時政を悪者にして、この機会を利用して政敵

を倒しているのだ。

金羅行親は九年後、政所司まんじゆじゆつかさと言ひ副官に任命され、それ以降少なくとも二十五年間もの長い間、その要職を務め続けた。この事からも行親は義時にとってどう猛な手先で突撃隊みたいな男であつた事がわかる。

八月四日 実朝将軍の嫁とりの事で、以前、上総前国司、足利義兼（母は熱田大宮司藤原範忠の娘。故頼朝の母も範忠の娘である。頼朝旗揚げの時から頼朝に従つて重んじられている。頼朝四代前の源頼家の三男が下野〔栃木県に桐生市を加えた地域〕足利に所領を得て足利氏を名乗つた。足利氏は鎌倉時代を通じて北条氏の下で、その勢力を温存し後の室町幕府を興した）の息女はどうかなどという話があった。

実朝に政子から、内々の打診があつたが、実朝は柔らかく断つた。実朝は思った。母の政子の妹が嫁いでいて、源氏でもある足利氏から正室などを貰えれば、足利氏は、北条と対等な御家人になつてしまふ。あの比企氏は、その勢力の強さ故に族滅させられたのに、今度は足利氏という強い氏を作り出してしまふ。これは又新たな悲劇、の種を作り出すことであるのを母は気付かれていないのではないか。その次に京都摂関家に繋がる姫の話が出たときに、そのような力関係を持たないその話を了承したのだつた。

それで今日、嫁迎えの用意などの相談が行われた。時政は京都への出迎えの一行は鎌倉の面子もあるので容姿華麗な武将を選ぶべきだと云つた。

八月十五日 鶴岡八幡宮で放生会がある。放生会は天武天皇が676年に始められた祭事である。仏教の經典中に、釈迦の前世の流すい水長者が干上がつた大きな池の魚が死にかけているのを助けて別の池に放つたところ、魚たちは三十三度転生して恩返しをしたと云う事が書かれている。

仏教伝来の影響下にあつた天武天皇は、飢饉や天変地異に際して功德があるように鳥や魚を放つ、仏教で古来行われていた放生会を始めた。このように最初は仏教の歳事であつたが、養老四年（72

9年）には宇佐神宮において、それまでの九州平定において奪った
数多い九州兵士と王朝（大和王朝は九州にあつた天皇家を篡奪した
という説がある。それは筆者の別作、「カルカヤの歌、磐井の反乱
伝説」に詳しい）を弔うために神社でも行われるようになつた。源
氏とゆかりの深い石清水八幡宮においても天暦二年（948年）こ
の儀式が行われるようになつた。石清水八幡宮は清和源氏の祖であ
る清和天皇が開いたもので、分社としての性格が強い鎌倉鶴岡八幡
宮はその伝統を引き継いでいる。

今回のこの放生会は悲惨な最期をとげた前将軍頼家の魂を鎮魂す
るためのものなのだ。

放生会につきものの宴の為に夕暮れ時より飾りつけた船を何艘か
由比ヶ浜から出した。ある一艘の船には七人ほどの樂士が乗つた。
名月が光る海で実に寂しい妙なる管弦の樂が奏されるのを実朝は聴
いている。

「おう、千幡元氣か！ちょっと蹴鞠をやろう」快活な笑顔を実朝に
むける兄の優しい顔をふいに思い出して実朝の心はいっぱいになる。

33 実朝の嫁取り

十月十四日 坊門先の大納言信清（大納言は左大臣、右大臣に次ぐ高位、朝廷の中枢で重要政務を審議する。左大臣、右大臣各一名。大納言は四名が定員）の息女（名は不詳）が実朝將軍の御台所（正妻）として鎌倉に来るので、お迎えとして選ばれた御家人が京都に向けて出立した。

北条政範（時政と後妻、牧の方の息子）結城七郎、千葉平次、畠山六郎重保、筑後の六郎、和田三郎、土肥先次郎、河西十郎、佐原太郎、多々良四郎、長井太郎、宇佐見三郎、佐々木小三郎、南條平治、安西四郎など、北条政範、畠山重保などは例外であるが、他のものはそれぞれの家では末弟に近く、身分が低めだが、背が高く、美しい顔立ちを優先した人選だ。

実朝の御台所になる人の父、坊門信清の母は後鳥羽院の母の実妹である。したがつて信清と後鳥羽院は従兄弟の関係だ。つまり後鳥羽院の従兄弟の娘を実朝は室（妻）として迎えたのである。

上皇は「治天の公」と呼ばれ、実権を握つていて、院政下では天皇はあたかも皇太子のような存在となつた。この時からさかのぼる事百年（一一〇〇年頃）、時の白河天皇は平安初期以来問題であった後継に伴う混乱と政争を避けるために天皇の上に上皇を乗せた。

折も良く、それまでは実権を握つていた藤原摂関家の力も弱まり「上皇」は官僚達から実権を奪い取ることに成功した。上皇は身辺を警護する「北面の武士」を重用し、従来の官僚制度に捕らわれない抜擢を行つて、その鮮烈な武力を利用してさらに権力を集中させた。院政の成立は図らずも、朝廷のさぶろうもの（居続け警備し続ける者）という卑しい身分の者に照明を与えたのである。院政は平家を興し、源氏を興したのである。

上皇の権力が強いと云つても、それは平家が興る前の事だ。平家から先の上皇は次に書く事情によつて、もはや昔日の栄光はない。それは後鳥羽院も例外ではない。つまりはこの時代は奈良、平安と続いてきた天皇家の終焉の時代であることに特筆すべき特徴がある。じゅえい寿永二年（1183年）木曾義仲きそよしなかの京都進入によつて平家とともに西走した幼帝で平清盛を祖父とする安徳天皇の代わりに、新たな天皇を立てる必要があつた。義仲は北陸宮を新帝にすることを勧めたが、後白河法皇は丹後の局（清盛の為に夫を殺され、楊貴妃に例えられる妖艶な美女であつたから、たちまち白河法王の気に入る所となり、法王の裁断に影響を及ぼしたという）のすすめで尊成親王四才（後鳥羽天皇）を選んだと言う。それにより1183年から二年間、安徳天皇と後鳥羽天皇は在位が重複する。

このような事情だから、後鳥羽天皇の即位にあたつて、源頼朝の意見は入つていない。またすでに即位した後鳥羽天皇を退位させるような、何らの行動にも出ていない。この当時の頼朝の朝廷に対する姿勢は慎重なものだつた。この朝廷策にはもちろん中原広元が活躍することは言うまでもない。

貴族、寺院の荘園ごとに配置した、頼朝部下の地頭は頼朝の目届かないところで、思う存分略奪を重ねて頼朝の手にも余るようであつたといつ。頼朝は立ち上げたばかりの鎌倉幕府を安定させるため、天皇や貴族たちや社寺ともめ事を起こしたくなかったようだ。この頼朝や北条氏の朝廷への遠慮が、見た目、朝廷の権力を存続させ続けた。つまり、今まで破綻状態だつた平安朝は再び息を吹き返した。京都に、にぎわいと華麗さが戻つても来たのだつた。

実朝より九才年長の後鳥羽天皇が後鳥羽上皇となるころ（十九才の時）には、鎌倉の武力を背景に所領も守られ、かつての朝廷の豪華な生活が復活するようになつた。しかしながら、それはあくまで

も全国制覇を成し遂げた東国武士達の威光によると言つことを上皇が良く理解していなかつたから、やがて後鳥羽上皇は「承久の変」という、究極的な公家世界の滅亡を招く天下を一分する大争乱に乗り出すこととなつたのだ。

後鳥羽上皇の前代の後白河上皇は当時の流行歌である催馬樂（歌詞に雅樂に似た唐樂の伴奏をつけて歌う）狂いであり、常日頃、歌を歌い、口ずさみながら、多彩な女性関係の中、保元、平治の乱の侍達を手玉に取る黒幕として生き続けた妖怪のような人であつて、頼朝をして「日本一の大天狗」と云わしめた。年若い頼朝の弟、源義経はまんまと、懷柔され、兄の頼朝の憎しみの的となつてしまつ有様であつた。

その「妖怪・大天狗」の息子が後鳥羽上皇であり、彼もまた父に似たところがあつた。後鳥羽院の生活は藤原定家の「名月記」には、その様子が描かれている。

後鳥羽院が二十三才の頃（実朝即位の時）院の遊びは狂氣じみたものとなつた。賭け事、蹴鞠、競馬、鬪鷄、かけ弓、遊女遊び、別荘建設趣味、造園、琵琶、管弦、かくれんぼう、双六、牛車による頻繁な外出、宴会、そして歌会、遊女を多数呼びよせ半裸の格好で乱舞させ、男女が淫行に及ぶ「陽剣の舞」などといつ事に情熱をあげる爛れきつた日々に漫つてゐる。この遊び過多の人生は終世のものであつたという。

十月二十九日 実朝室のお迎えの一行の代表格である北条政範が旅の途上で病にかかりました。北条政憲は、今十五才で、義時の異母兄弟だ。義時の母はすでに亡くなつて後妻の牧の方が北条時政の後妻となつて隠然たる権力を行使している。その牧の方の子が政範だ。

北条氏の筆頭、時政の心の中に、次代政権は政範という気持ちが蠢いているのを義時は感じないではいられなかつた。今度の使者の主役に政範が抜擢されているのが義時には面白くなかった。

政範が旅行中、病を得たというが、あるいは義時が何らかの謀略の手を政範に伸ばした可能性がある。たとえば義時の突撃隊である金窪行親あたりが動いて宿の食事に毒を盛るという事は考えられる。

十一月四日 京都守護（京都の治安と朝廷を管理する鎌倉の出先機関だ）平賀朝雅の六角東洞院邸で上洛をねぎらう宴が開かれた。この席上で朝雅と畠山重保が喧嘩になつた。重保の母は北条時政の娘だ。時政に対しては外孫といつた関係である。朝雅は時政の後妻、牧の方の娘を嫁にもらつていている。母は頼朝の乳母であつた比企尼の三女だ。父は頼朝と旗揚げを俱にした源氏の一派だ。（なんとも複雑な関係だ！筆者）、ともに北条氏の近親だ。近親ながら、朝雅は時政側で、重保は義時側という微妙な立場にある。政範があぶないという報はすでに朝雅の耳に届いている。政範が亡くなつたりすれば、朝雅の北条氏内の立場は不利になる。それで朝雅は不機嫌である。

北条氏の次代の頭領が目されている若い、元気な北条政範が突然危篤になつてしまつたのは変だという気持ちが酒の力で出てしまつた。そして三十代半ばの朝雅は十才も若い重保をいくらか軽く見ていた。

「重保どの、朝範どのの突然の病は少々おかしくはありませんか？」

聴けば鎌倉出立のとき朝範どのは元気だつたそうではありませんか、それが突然体調を崩されて危篤状態とはいかにも不自然」

その言葉を聞いて、根が剛直な重保は杯を膳に置いて「不自然？何が不自然でありますよ。私ども若いながらも有能な武将面々が体調を崩されるのを見ております。何ですか、誰かが毒を盛つたとでも思つておられるのですか。毒を盛るような振る舞いを私が見逃すとでもいうのですか」

「貴殿が毒を盛つたと云つておらぬわ」

「云つたも同然ではないか！その言葉は重いぞ」

双方、刀に手を掛けようとする様子に、周囲の者があわてて押しとどめた。

36 実朝の嫁取り

十一月五日 北条政範が、この日京都で死去した。

十一月六日 北条政範を京都東山に葬つた。

十一月七日 北条政範の葬儀のため、実朝室（実朝本妻）の京都より出立が遅れていた。この日一行は鎌倉に向けて、出立する。後鳥羽院は法勝寺の小賂に様敷やじきを作らせて壯麗で若々しい鎌倉武士の一行を見送つたという。

この日、法然に對して比叡山が蜂起した。法然はそれ以前に「七箇条制誠」を書いて淨土宗徒がしてはならない事を門徒に示した。

法然は比叡山に学ぶが、承和五年（1175年）43才の時、叡山を降りて、京都東山に住み、念佛の教えを広めた。念佛宗はただひたすら念佛を唱える事によって救済されるという宗教である。この頃の庶民の日々は生き地獄のようであった。絶え間ない飢饉と戦乱と兵役と重い貢納が庶民にのしかかっていた。平家追討のため西国に戦闘をくり広げていた、さすがの猛将和田義盛も、飢饉に見舞われている村々

から食物を調達できず、撤退を言い出したほどのひどい有様であった。庶民は娘を売り、息子を兵に出し、ついには自分と妻を奴隸として身を落とさねば生きていけない状況であった。このような苦惱に満たされた人々の心に救いを与えたのが念佛宗の、ひたすら念佛を唱えれば淨土に再生できるという教えであった。人々は太鼓、鐘を打ち鳴らし、踊りながら念佛、南無阿弥陀仏を唱えた。

爆発的な信徒の増大は天台・真言宗を始めとした他宗の危機感を煽つた。先に書いた安樂坊は法然の有力な弟子であった。上皇の女房すらも出家させてしまう魅力は、庶民には絶大な威力を發揮したに違いない。

十一月十三日 京より鎌倉に飛脚が到着した。実朝の室を迎えて

出ていた北条政範が五日亡くなつたと言つことが伝えられた。父母の時政と牧の方は比べることができぬほど悲嘆にくれたという。

十一月十日 御台所（実朝室）の一行が鎌倉入りする。早馬なら昼夜休まず七日で駆け抜け京都、鎌倉間を一月余り駆けた穩やかな旅だ。道中にあたる東海道の町、村で大勢の庶民が見物に押しかけている。武者の白馬、馬具、甲冑、輿などいづれも贅をこらした物だ。螺鈿金銀細工、西陣織、象牙、鼈甲^{べっこう}が至る所に使われている。いよいよ鎌倉入りするという今日、鎌倉の庶民は異様な興奮に包まれている。庶民から御家人、郎党まで満面の笑みで、その行列を出迎えたのである。

とりわけ鎌倉の人々の喜びは特別なものだった。澄み切った青空の下、一段高くなつた段葛^{だんかずら}と呼ばれる由比ヶ浜から鶴岡八幡宮に通ずる道を、陽にキラキラ光る武具を踊らせて一隊の先駆の勇壮な騎馬が通り過ぎると、多勢の上品な顔立ちの色の白い朝廷の官人が雅^{みやび}な衣装を着て、芳香を漂わせて歩いて行く。その後が顔立ちと姿のよい鎌倉の若武者たちだ。何という凜々しさだろうか！その後は実際に様々な嫁入り道具が舎人（朝廷の下司）達に担がれて目の前を通り。何の道具だろう、みな艶やかな京の絹布に包まれてまぶしいくらいだ。化粧した女官達に囲まれて黒塗りに貝の殻を光らせた螺鈿^{らでん}文様の輿^{こし}がやってくる。どよめきが庶民の間から起^こる。「姫だ、ほれあの三つの輿のまん中の輿だよ。そうあの黄金色^{こがねいろ}のあれだよ！あれに京の姫が乗つておられるんだ」父親にいわれてまだ三歳にも満たない幼児の手を引いた少女が輝く瞳を輿に向けている。庶民達は皆、立つたままだ、後世のように土下座する撻^うはまだない。

庶民達は鶴岡八幡宮の方に小さくなつてゆく実朝室の嫁入りの隊列をいつまでも見送つていた。

大蔵山によつた幕府の寝殿には実朝と政子と時政が待ちかまえている。朝廷出身の鎌倉幕府筆頭の中原広元、北条義時、息子の泰時は後家人多数を引き連れて江の島至近の腰越^{こしのし}あたりまで出向いて、実朝室の一行の先導として加わつた。

三浦半島の東海岸に通じる金沢街道に面した御所の正門、南御門^{みなみみかど}に一行が姿を現すと

門衛が「坊門卿御姫さま御成^{おなり}」と大声を張り上げた。

やがて山側の北御門に近い、奥まつた寝殿に広元の先導で実朝の室となる姫と父の坊門信清が入ってきた。庭に面した一室には政子と実朝と時政が座っている。広元が一人を先導して、部屋に安置した。

「坊門様とその姫様がお越しになられました。坊門様、姫様、そちらにお座りに成ってくださいませ」それだけ云うと退去した。

実朝は室に成る人を目で追った。細面の顔で目鼻が精妙に整っている。可愛らしく人形のようだ。ゆっくり座して、じつにゆっくり頭を下げる、それからたゆたうように、頭をあげて、見るとでもない自分の内面を見つめるような優しい目で時政の言葉をまつている。「長い旅路、ご苦労様でございました。初めましてよろしくお願ひ致します。私は京都に鎌倉の代官としていたこともある北条時政でござりますが、姫はお若いからござ存じないでしようね。こちらに座しておられるのが今は亡き源頼朝将軍の妻室で政子様で、実朝様のお母様でいらっしゃいます。出家しましたので、皆は尼御台所と呼んでおります。そして、この私めは政子の父で北条時政と申します。かたじけなくも、今、天下の采配に参与させて頂いております。政子様の上座に座しておられる若様、この方があなた様の夫となるれる源実朝将軍でいらっしゃいます。

姫はわずかにうなずいた。

姫の父、信清がしばらくの間のあと言つた。

「坊門信清でござります。このたびは縁ありまして、鎌倉殿の妻となる娘を送つてやつて参りました。未熟なものでござりますが、よろしくお引き立て下さつますよつとお願いもつしあげます。姫、ご挨拶を申し上げなさい」

姫はまだ十一才ながら宫廷の生活に慣れているのであつつか、宫廷風の優しい口調で言つた。

「みなさま、右も左も判りませぬ、ふつつかな私をよろしくお願ひ致します」そしてゆるりと頭を下げた。

なんと典雅で可愛い人なのであるうか。まるで京都の春の風が吹いて来るような麗しさではないか。実朝はこの選択が誤りではなかつたと思った。

政子が話した。「よくぞ遠い大和からようお越し下さいました。私が亡き頼朝将軍の室の政子でござります。京の雅みやびに遠いこんな田舎の鎌倉に、嫁入りとはお姫様、さぞ心寂しいでしょうが、この政子、あなた様のお力添えをいたしますよ。」

実朝室は婚姻の話が出たときに、あの恐ろしい平家を破った源氏の若君で、上皇様に劣らぬ征夷大将軍という高位の方が自分の相手だと知らされた。あの平家よりもっとお強い源氏という武士の一族に嫁入りすると言つことに不安があつたが、信頼する父が「この若様は東国の人であるが、父上の源頼朝様を始めご先祖は長く宫廷にさぶろう者として仕えたが、元は清和天皇の皇子が臣に下られた、源氏という誉れある家筋の方だ。野蛮な方ではないから、安心して嫁に行くが良い」と云うので、受けたのである。

実朝が上座にいる。下座に尼御台所様と北条時政殿がいる。この場が、いまや日本を動かす中心であることは、まだ幼い室にもはつきり判る。でも良かつた、実朝様は優しそうな方だものと実朝室は思った。

(筆者調べるに、実朝室の名は、現在残されてない。従つて、実朝室でお話を続ける。実朝室は1193年生まれ、実朝より一才年下十一才だ)

実朝は室となる人と眼を会わせた。実朝はすぐに視線をはずすと、節目にになり、こくりと頭を下げた。実朝は何か言うべきであつたが、とつてつけたような事は恥ずかしくて言えなかつた。それは生まれながらに詩人魂を持つた人であったからである。

元久二年(1205年) 実朝14才 北条名越邸で、将軍、有力御家人を招いて正月恒例の?おひばん飯が行われた。おひばん飯は大盤ふるまいの語源で、もとは?飯ふるまいといつてていたそうである。

鎌倉幕府では、正月には有力御家人が連日、將軍や他の御家人を招いて、ごちそうするのが習いであつた。

正月に入つて有力御家人が順番に將軍、御家人を招く、順番が早いほど、御家人の地位を現すとされた。

頼朝が三十台の若さでなくなつたのは、このような連日の飲酒による、糖尿病の悪化が考えられる。

年が明けて北条義時邸から？飯が始まる。翌日には広元邸、翌日には和田義盛邸、次の日は三浦義村邸、その次には・・・という状況である。

とりわけ正月一番の？飯である北条時政邸の？飯は豪奢そのものである。アワビ、サザエ、はまぐり、エビの焼き物。鹿肉の焼き物、わかめ、鯉、雉きじ、鶏にわとり、兎鯛まぐろ、鮪鯛まぐろ、蛸たこ、イカ、野菜の煮物、漬け物、シラス、餅、金目鯛、北条の郎党が持ち込んだ、様々な食材が次から次と出てくるのである。厨（台所）はまだまだ珍奇な食材で埋まつていてる。

一月三日 千葉氏が自邸で？飯を進呈する。出身の千葉の鯛を始め、新鮮な海の物が船で送り込まれていて。冬場なのでエビ、イカ、蛸、生魚の刺身が山のようく用意される。豪華な食事の後、御弓始めがおこなわれた。各自一十五本射る。一弓ずつ三度に別れて射る。

一番 和田平太、藤澤四郎 一番 佐々木小三郎、古河五郎 三番 筑後六郎、荻野次郎である。

三月一日 実朝は寿福寺内の栄西の居住する方丈廉棟みんなんえいさうを訪ねた。桜が寺内の諸処で花開いて華やかである。寺主の明庵栄西は鎌倉幕府が成立すると京都に見切りをつけたように頼朝のもとにやつてきた禅僧だ。実朝十四才より五十一才年上の六十五才である。五年前に政子が寿福寺を創建するにあたり寺主に任せられた。一方、栄西は日本茶の元祖といつて良い人だ。平安中期にお茶が到来したと言われるが今で言うウーロン茶のようなもので、薬として少々用いられただけであつたという。茶の木の栽培を京都、宇治で最初に始めるとともに、宋から持ち帰った抹茶をの知識で茶を作りひろめた。

まだ新しい寿福寺の廊下に毛氈を敷いて、実朝と栄西は対座している。栄西が南宋から伝えた茶を立てるのだ。炭火に鉄瓶を乗せて湯を沸かした。抹茶を茶碗に小さじで数杯入れ、湯を入れ竹へらでかき回した。

「お召し上がりください」額の広い、なすび顔の栄西がいかがですかといった顔つきで実朝を見る。

「苦いですね、でも良い香りがしますね」

「むき栗をまず頂いてください、それからお茶を飲んで見てくださいませ」

栗の甘さと抹茶の苦さが実朝の口の中で溶けあって、快いおいしさが広がった。

「あ！これは美味しい。さすがに宋の人々が愛飲するだけの事はありますね。それに薬となると言つのは本当でしょうか」

「このお茶というものは宋国ではわが国の白湯さゆのように飲んであります。これよりもっと薄めではあります。確かに身体に良いとおもわれます。」

「ところで、栄西さまは宋に一度も渡られたときましたが・・・」

「さようでござります。宋で禪を学んで参りました。宋で学ぶだけではお釈迦様のお心に迫れないと思い、天竺（印度）へ行くことを宋の帝にお願いしましたが、当時中国西方は蛮族と争乱状態にあり果たせませんした。天竺（印度）に行つて学んでおれば、今のような生臭坊主でなかつたと言つことですね、はは」

「そうですか、天竺へ行こうとしたのですか…すごいですね！私も行つてみたいと思います。天竺（印度）でなくても宋で十分です！」

「今に将軍様は宋に行けるかも知れませんよ。それどころか天竺（印度）までも」

「天竺（印度）か！天竺（印度）で仏様の本当の教えを知りたいね！」

「そうそう、お釈迦様は、将軍様と同じに天竺（印度）の王家の皇子様でいらっしゃいましたが、富みに満たされて。幸せであるはずの父王や母が苦惱に包まれて生きているのを知った時に、王家を捨てて出家なされました。・・・そのような生きる苦惱からの解放こそはお釈迦様のめざしていたものだと思われます」

お釈迦様が、自分と同じ王家に生まれた人であつたと言つことは実朝には驚きであった。

栄西は永治元年（1141年）生まれである。吉備津宮の筆頭神官の子として生まれた。十四才の時比叡山延暦寺にて出家得度した。その後延暦寺、吉備安養寺、伯耆（鳥取）大山寺で天台宗の教学と密教を学んだ。仁安三年（1168年、平清盛全盛のころ）形骸化した日本天台宗に見切りをつけて、南宋に留学した。南宋では天台山万年寺などで学んだ。万年寺は山にあり、山裾が茶畠であつたから茶の知識が得られたといふ。

当時南宋では禅宗が興隆していて、仏教復興のために禅が重要であることを知る。文治三年再び入宋、皇帝に天竺（インド）渡航を願い出るが天竺に通じる二つの道が蒙古族によつて閉ざされていたので許されなかつた。建久一年（1191年）臨濟宗の嗣法（正当の伝道者）の認可をうける。この年帰国。帰国後筑前、肥後を中心 に布教活動に入る。建久五年（1194年）禅宗が広まり始め、天台宗の反発を受ける。建久六年 博多に聖福寺を建立した。これは日本最初の禅道場である。しかし一方で真言宗の印信（伝授の許可）を得て旧来の仏教との和を計つた。建久九年（1198年）座禅の指導書「興禪護國論」を書いた。京都の布教に限界を感じ、鎌倉に移る。正治二年（1200年）政子建立の寿福寺住職に招かれ る。建久二年（1202年）二代將軍頼家の補助により京都に建仁寺を建て住職となつた。

現代人の感覚では、お茶は縄文時代からあったのではないかと言つぐらい、日常生活にとけ込んでいるが、いわゆる普通の煎茶が飲まれるようになったのは比較的新しく江戸時代に入つてからだ。

それまでは栄西が日本に持ち込んだ抹茶が、和のお茶であったのだ。お茶にまつわる話は面白すぎるのとここで余談をしてみたい。栄西が南宋から持ち込んだ抹茶は、茶葉の自然発酵を蒸して止め、乾燥させ、挽き臼で粉末にしたものを湯で溶かして飲むものだが、この茶の飲み方は、中国では行われなくなつてしまつて、今に伝わらない。しかし茶葉を蒸して乾燥させ、茶葉を粉末にせずに、茶葉をそのままとし、湯を注ぎ入れ成分を抽出する（簡単に言えば日本茶の飲み方である）飲み方は中国に残つた。

抹茶でない通常家庭で飲まれている普通のお茶は、元禄十四年（1701年）ごろ修行中の高遊外（こうゆうがい）という僧が長崎で清人から学んだものだ。この人は享保十六年（1731年）57才で京都に上つて禅を広めるために鴨川のほとりに小屋を建てて、代金支払い自由で変わつた煎茶というお茶を供する「通仙亭（つうせん亭）」という店を出した。このことは当時相当な評判を呼んだという。

今では茶葉に湯を注ぎ茶葉からにじみ出させた成分を飲む、煎茶という飲み方は常識的な飲み方だが江戸時代初期の元禄のころには知られない飲み方で「だし茶」と呼ばれる飲み方であつたのだ。

さて、実朝の兄、鎌倉幕府第一代將軍源頼家が創建して栄西が初代寺主となつた京都建仁寺にはその後面白い逸話がある。

建仁寺には、やがて二十一才の道元（1200年～1253年）日本曹洞宗開祖。座禅の奥義を説いた「正法眼藏」の著作がある）がやって来る。修業していた比叡山の腐敗に辟易としたからである。

道元はこの気持ちを次のように記している。

「高僧伝、続高僧伝などを開いて、唐の高僧、修行者の有様を読むと我が師の行っている事とはまるで違う。だから何かにつけても中国、天竺の高僧と自分を見比べてしまう。そうすると日本の国の大師などは土瓦のように下らないものに思われた」

道元が建仁寺にやつて来た時には栄西はすでに没して、高弟の明全^{うぜん}が後を継いで居たが、道元は、叢山と全く異なる爽やかな学風と厳しい修行を見いだし、弟子として留まるのである。

43 平穏な空を黒雲が覆い始める

やがて道元は、本当の禅を知るために宋に渡る気持ちを強め、ついに師、明全とともに博多より渡海するのである。時に貞応二年（1223年）、道元二十三才であったという。

師、明全は修行中亡くなってしまった。遺骨を抱いて四年後道元は帰つてくる。帰国した道元には日本の仏教の歪みが良くみえたのであるう、すぐにその年、座禅の方法を細かく書いた普勸座禅儀を表した。

又、覚喜三年（1231年）には「正法眼蔵弁道話」を表し、その中で、お釈迦様が座禅によつて悟りを得たことを述べ、座禅こそ仏教の正しい方法であることを強調している。

栄西を鎌倉権力に癒着した俗物であると、京方では評判が悪かつたが、建仁寺を巡るエピソードからは栄西が仏教刷新に努力した人であることが伝わつて来るだらう。

四月八日 実朝は和田朝盛らと鎌倉中の各寺を気ままに巡回する。今曆にすれば五月半ば、まさに風薫る季節であり、若葉が爽やかに風に吹かれている。実朝は絹水干の薄着で馬を歩ませる。

四月十一日 鎌倉近隣の御家人が何の噂があつたのか、突然鎌倉に上がつてきた。数日前稻毛重成は、日頃は武藏の国、稻毛領（神奈川県川崎市北部、東京都稻毛市にまたがる地域）に閉じこもつていたのに、軍兵を連れて鎌倉に上がつて来たことで戦乱ありと噂が走つたのだ。

四月十一日 実朝は一年を十一面に描いた屏風をみて十一の和歌を作つた。

五月二日 半月前の鎌倉の騒ぎは、何事もなく収まった。群参していた騎馬も幕府の命令でそれぞれの所領に戻つていった。

六月一十日 先日の騒ぎの真相が遂に姿を現した。畠山重保（京都で、時政の後妻の義理の息子ともめ事を起こした若御家人だ）が騎馬、甲冑で武藏の北辺、秩父のあたりからやつて来た。父の重忠（ただ）の先発であるといつ。稻毛重成が重忠の従兄弟（いとこ）として、北条時政の命を受けて呼んだのである。先にも書いたが、畠山重保は畠山家の六男であるが母が北条時政の娘（政子の妹にあたる）といふことで長男の扱いを受けている。父の代理はいつでも重保である。

稻毛重成いなげしげなりは北条時政と後妻との間に生まれた娘（政子）にとって母違いの姉妹）を妻にもらっている。重成は十年ほど前に、この妻を亡くしている。重成は妻の死に際して出家した。それ以降、稻毛入道とも呼ばれた。妻の死後三年、供養の為にと相模川に橋を架ける。この時落成供養に出席した源頼朝が馬から落ち落水する事件がおきた。頼朝はこの時の傷がもとで亡くなつたとも言う。

鎌倉幕府の正史といえる「吾妻鏡」には頼朝が亡くなる三年前の建久七年～九年（1196年～98年）記事がない。この頃の鎌倉の様子は京都の「承久記」「名月記」「愚管抄」といった書によつて知るだけである。それはいずれも京都の人々の書である。とりわけ名月記は実朝の師ともいえる藤原定家の日記風文書である。

何故、この三年間が記事がないのか、理由は明らかではない。一説に、この三年は頼朝が重病にあり、

「吾妻鏡」を座右の書としていた、徳川家康が、木版刷りの書にして出版する際、それを忍びないと想い削除したといつ説もある。

清廉と言われた人柄の畠山重忠は親しい比企氏の無惨な滅亡や旗揚げ以来の老兵の死去などに氣落ちして、再度の時政の招きにも応ぜず、所領の嵐山（ひんざん埼玉県）に引きこもつていた。

稻毛重成はこのところ時政の犬と化していたから、親戚のよしみで、重忠を引きずりだせと言う時政の命に従つて「このごろ、お見かけしないがお元気ですか。日頃あなた様のご健康を心配しております。いろいろな事情はおありでしょうが、鎌倉に重大な謀反の噂がある中ではせ参じなければ、先々何かと災いが畠山に降りかかるありますから、まげて、早く鎌倉に出ておいでなされ」と、親切そうな文を書いて、先日畠山に送つた。

六月二十一日 時政の後妻の牧の方に稻毛重成が讒訴（告げ口）をした。従兄弟の島山重忠が謀反をたくらんでいると言つのである。時政は義時と時房（北条時政の三男、政子、義時の異母弟）に征伐するように命じた。一人はこの命に対してもう言つた。

「重忠殿は頼朝公旗揚げこそは敵側であつたが房総で再起した後は頼朝公の手足となり良く仕えてきた、忠孝をもっぱらとする人柄です。このところ頼家将軍の間近にいたといえ、比企能員の合戦の時には將軍実朝公の側にあつて、良く戦いました。それと言つのも父上の婿としての立場を重んじたからです。その彼が果たして謀反を企てるでしょうか。重忠どのの勳功をみずにはらぬうわさで愚かな誅殺を加えれば、きっと後悔なさることとなりましよう。眞偽を確かめた上で行動を起こしても襲いと言つことはありますまい」と言つて、時政は席を立つてしまつた。牧の方は同腹の兄、牧時親を寄りにして言わしめた。「重忠の謀反は姉がはつきり確認しているという事です。それゆえ時政どのにこの件を仔細に漏らしたと言つことです。後妻であるとの事で軽んじておられるのではないかと申しています」

義時は苦々しく思つたが、親と言つても油断がならない。牧の方は隙あらば、自分が生んだ子に権力を持つていこうとしている。こには時政と牧の方の言つとおりとした。牧の方に対する反感はいつかははらしてくれると固く心に決めた。

六月二十一日 快晴である。夜が白む頃、鎌倉に軍馬の轟きが響き渡つた。謀反の者が由比ヶ浜に居る討てと命が下つたと、御家人に伝搬された。

島山重保も郎党三人を連れて騎馬で由比ヶ浜に走つた。義時の命

を受けた三浦義村と佐久間太郎家村（義村の従兄弟（三浦氏庶流、
安房の佐久間が所領でこの名を名乗る）等の騎馬が重保と郎党の騎
馬を突然取り囲んだ。

「これは、義村殿と佐久間六郎殿、何用かな」と島山重保は言った。「謀反者とはおぬしら島山の一族のことだ、身に覚えがあるであろう」と、義村は吐き捨てるように言った。父親ほどの年の男の顔の中に眼がランランと光っているのを重保は見た。

「何を言つ。われに何の謀反があるというのだ」

「見え透いた事を、言つことは聞かぬ、皆の者、かかり取れ」

武勇で名を成す重保であるが、たちまち多数の騎馬に包み込まれ、矢を何本も射こまれ、落馬し絶命した。

重保の父である重忠の百三十四騎の軍勢は秩父から鎌倉に向けて南下中であった。重忠は自分が謀反の主役にされていることなどは知らないから、郎党の内の一派の者を引き連れた鎌倉入りなのだ。

午の刻（昼）武藏の国、^{うま}二俣川（神奈川県、横浜市）にさしかかるあたりで、何千という騎馬と歩兵に遭遇して島山重忠は驚いて眼を丸くした。（これは北条義時が大将となつてゐる、御家人という御家人が郎党を引き連れた鎌倉の中核ともいづつべき軍勢なのだ）

「これは何事」

接近して行くと楯の後ろから軍勢は矢を射てくる。かねがね噂で時政が、島山領を狙つてゐると聞いていたが、まさかと思っていた。それが真実であったのかと重忠は自覚する。こうなつては、弁明も

引く」とも無駄だ、武将らしく堂々と戦つて死のうと決意した。

安達景盛と郎党七騎が鎌倉側の先陣を切つて島山勢に突入して來た。それをきっかけに、乱戦となつた。

少数の軍勢ながら、申の刻（午後四時を中とする三時～五時）まで良く戦つたが、重忠はついに愛甲三郎の放つ矢に射られ落命した。三郎はすぐに首を取り義時の陣に参上し献じた。

この場所は現在、万騎^{まき}が原という地名がついている。万に近い鎌倉の軍勢が、畠山重忠の一^イ行を待ちかまえたからである。当時は稻田と畠がひろがる農地であつたが今は住宅地となつていて。

六月二十三日 未の刻（午後二時頃）になつて、義時以下が鎌倉に戻ってきた。名越邸で時政は戦場の様子を聞いた。義時が言つ。「重忠の弟や親類はほとんど鎌倉に向かつておりませんでした。従つて重忠について出向いた者は百騎余りです。さようですから謀反を企てたという事は嘘に違ひありません。畠山一族は讒訴さんそ（人を陥れるための嘘の訴え）によつて殺される事とはなつたのです。このことは大変不憫なことでした。打ち首を陣に持ち帰りましたが、年來、顔を合わせて親しくして来た事を思い出し涙が出て止まりませんでした」時政は、これを聞いて渋い顔をし、無言のままであつた。

西の刻（午後六時頃）^{とう}、義時は父の時政に相談せずに、父の犬である「稻毛三郎重成」を配下の大河戸行元に討たせてしまった。

義時はなかなかの謀略家である。父と義母の策略に乗せられたと見せて、膨大な領地を持つ、畠山を討つ。ついでに返す刀で稻毛三郎も討つて北条家の力を増強したところで、今度は北条氏の権力を握るために義母牧の方と義母の思いのままとなつて、父、時政を失脚させようと思っている。

稻毛重成は秩父氏の一族である。領地を稻毛（川崎市北部・東京稻毛市またがる地域）に持つたので稻毛氏を名乗った。畠山氏も秩父市的一族で埼玉深谷の畠山に領地を持つたから畠山を名乗つた。秩父氏は関東各地に、その支族を伸ばして、関東を支配し、姻戚関係のある「関東七党」と呼ばれる関東域の有力武士団のネットワークを形成していた。秩父氏は頼朝の弟の義経に連座して追討され、今やその「長」は畠山と言つてよかつた。畠山の一言で関東の武士団が動くとされ、北条には気がかりな御家人であつた。

六月二十七日 またしても殺戮と流血だと実朝は思つた。祖父にあたる北条時政が有力な御家人を計画的に一族ずつ滅ぼしているのだ。このような争いはいつまで続くのだろうか。鎌倉の平穏を祈願する寺や神社は果たして役に立つてゐるのだろうか。いまの鎌倉ほど仏様の教えと遠いものはない。もっと平和の内に物事を勧めることはできないであるか。聖徳太子の言つて「和を持って貴しなす」という教えがどこにも生きていかないのではないか。このような時に実朝に歌ができた。

塔を組み 堂をつくるも 人の嘆き 懺悔にまさる 功徳やはある

せつかく、力を合わせて、人道に劣る平家を滅ぼし鎌倉の世を作りあげたのに、今度はその信頼する仲間を仇敵であるかのように惨殺している。これが正しい道であるはずがない。北条は争乱の殺戮のごとに懺悔だと言つて寺社や塔やお堂を寄進するが、はたしてそれで良いのだろうか。その人の済まないという思いこそが、人々に功徳を与えるものなのにと言う気持ちをうたつたのである。

実朝は万葉集が好きだった。若い感受性に万葉の歌は染みこんだ。次の歌は実朝の才能を示す歌だ。実朝が愛する物は、権力でなく、移り変わる自然の美しさであった。

春はまず 若菜つまむと 標めおきし 野辺とも見えず 雪の降
れれば

（春にはまず若菜を摘もうと決めておいた野辺にはどいつも見えない 雪がこんなに降り積もつているから）

若菜つむ 衣手ぬれて かたおかの あしたの原に 淡雪そふる

（朝方ならかな丘の原で袖をぬらして、た縁の若菜を摘んでいふと、淡雪が優しく降り続いている事だった）

春来ては 花とか見えむ おのづから 朽ち木のそまに 降れる
白雪

（春が来ては 桜の花びらに見えてしまつ 枯れ木のそばに 自然に積もつた雪であるのに）

ちなみに万葉集に載る、山部赤人（未詳 710年）の歌に、この様な歌がある。

明日よりは 春菜つまむと 標し野に 昨日今日も 雪は降りつ

（明日からは春の菜を摘もうと定めておいた野に昨日も今日も雪は

降り続いている)

実朝はこの歌に影響をうけながら、そこから、新しい歌を作り出していくように思つ。このような精緻な美しい感性の人が殺風景な殺人者に混じつて生きて行くことは、何という皮肉であろうか。

少し本筋から脱線しているがもう少し歌の話をさせていただきたい。

実朝の唄の新しさは、自分の気持ち自分の考えを歌にうたう所にあると筆者は思う。政治を歌う。不満を歌う。貧しさを歌う。後世の江戸時代の俳句にすらなかなか歌いがたい世のしがらみを実朝は堂々と歌い出した。良く読めば北条批判である歌をさらりと歌ってしまう。これが京の新古今の歌人にはない姿勢だ。

京の歌人達は自分の日々を歌おうとしない。歌会で歌を作るのが主流だ。歌会で「雪」というお題を与えられれば、その言葉をいじくり回して「歌の「ごときもの」」を、作りあげる才にたけていた。それが歌道というものであった。

歌会で「雪」という題をを与えると、いつも歌人の頭の中には、雪に關したかつての名歌が想起される。その歌（本歌とよばれる）に手を加えて、心がにじみ出るよつたものを作り上げる（これを、本歌どり、と言ひ）。

本歌どりなくして歌は生まれない。これが平安朝の歌人の姿勢である。歌作りは唐の詩や万葉集、古今集などの古歌への十分な知識なしには始まらないのだ。歌がほどほどのものであつてもうまい本歌取りは、その歌い手の知性を偲ばせて貴族達を驚かすのだ。

こうした状況だから、必然、自分の心を読むと言つことから関心がそれで「歌らしいかたち」にこだわるようになってしまった。新古今和歌集は実朝十五才であるこの年には出来上がっていないが、この傾向にあふれた歌集であると言える。

実朝の歌は最初、本歌取りで始まつたが、やがて自分の気持ち、考えを表現する歌とかわつていった。この傾向は、一番古い歌集である「万葉集」の古歌に似たものであるから、後世、万葉調と呼ばれるようになつた。万葉集の歌は七五調でなく、和歌にない長歌も

多く、しいて言えば現代詩に似たものだ。

しかし、もつと言えば、実朝の歌は批評性に溢れ、俗語という言葉もつかって和歌を新しい叙情の世界に導きいた画期的なものであつた。

六月二十九日 北条義時が鶴岡八幡宮から自邸に僧を招き（当時は、神仏に隔てはなかつた、神宮を僧が守るのは普通のこと）であった。厳しく分けられたのは明治以降の事である）一日中、般若教を唱え続けた。宿願があつて、特に真心をこめた転読（おなじ経文をなんども繰り返し読経すること。供養があると言われている）がなされた。

隠された宿願は、行を終えて尼御台所（政子）を訪ねた時に明かされた。夏の日射しはようやく和らぎ始め、御所内政子邸に日暮しの物悲しい鳴き声が響いている。

「父は老いられた」ぼそっと、夕刻の庭の方を見ながら義時は言った。

「そうですね、私もそのように思います」政子の声には感情が表れていない。

「畠山には何の罪もない、牧の方の言葉に父上は踊らされているのだ」

「畠山の子息殿はたつた数騎で由比ヶ浜を走つていたそうですね」「畠山の謀反などは全く嘘でした」

「父上は、あの牧の方の妖艶な女色に誑たぶらかされているのですよ」

「腹立たしいことに、牧の方は、姉上の母親づらをしています。ああだこうだと口をだして、鎌倉を我が物にしようとさえしている有様……」

「実朝の室の事でも、せつかくあなたに縁の深い足利から頂く事に決まりかけていましたのに、あの牧の方が口を出し、牧の方の一言で朝廷の方に持つていかれてしました。私は朝廷と鎌倉が深い仲になることには反対なのです。それでは平家と同じではありませんか。武士の統領たるもの、貴族になつてはなりません。武士は貴族とは別のものなのです。故頼朝殿は最期には平家衰亡の教訓も忘

れて大姫（頼朝、長女、病没）婚姻の事で天皇様に接近いたしましたが、それは随分御家人の反感を買いましたね。私は大姫が不憫と殿に「忠告申し上げたのですが、お聞き入れになりませんでした」
「もう決まつてしまつたからには仕方がありませんが、やはり北条の血が濃い足利から姫を頂くべきでしたな。にがにがしく感じている御家人も多いと思いますな。大姫が天皇との婚姻のことで体調を崩し、病にかかり亡くなれた時には、姉上は随分に心を痛めておられましたね。日頃、関東武士の代理人を認じていた右幕下（頼朝）ですら、愛姫を朝廷の泥沼に投げ込むような間違いをおかしました。滅び行く力のない朝廷の朝廷の位階を得て何になります。右幕下はそれが判つておりながら、天皇という光輝に負けてしまったのです。父にもそれが見えてないようです」

「父は頼家と一幡の命を奪いました。それにあなたをのけ者にして牧の方の血筋の子供達に北条の本流を移そうとしています。私には父が許せなくなりました」

しばらく、義時は庭に落ちる夕陽を眺めて無言で考えている風であつた。そうして低いが強い声でこう言い放つた。

「もはや、その時だ。父上に引退して頂く。今の時まで決心がつきませんでしたが、姉上の言葉で決心がつきました」

政子はじつと義時の顔を見ていたが

「そうですね・・・その時がきましたね」と静かに言つた。

閏七月十九日 政子は義時とともに三浦義村と相談して元服後名越邸に住んでいる実朝を取り戻す方策を立てた。

午の刻前、（辰前）義村は鶴岡八幡宮前の義時邸からと言うことで時政邸に使者をだした。名越邸に着いた使者は守備の郎党に、理由は言えぬが、とにかく早く義時邸に来てくれと告げた。

普段でも百騎を越える郎党に守られた時政邸だが、騎馬が激しく出て行つてたちまちがらんとして無防備になつてしまつた。

その後、長沼宗政（この年44才、小山政光次男、小山朝政、結城朝光の兄弟。頼朝の奥州征伐に随行、比企能員、畠山重忠の追討に従う。五年前、美濃国大樽莊の地頭職を得る）、結城朝光、三浦義村、三浦胤義（義村の九郎）天野政景（比企能員暗殺の遠景の息子）ら五十騎を出して実朝を迎えに行かせた。

無防備の時政邸を郎党が取り巻く中、三浦義村が邸内に入つて行つた。時政は邸内の大庭に面した座敷に、慄然とした顔をした顔をして座つて言つた。牧の方も少し離れて座している。

「何用だ」義村は睨め付けるような時政の鋭い視線に臆せず朗々とした声で言い放つ。すでに、時政は義村の上司ではない、実に横柄な声音だ。

「牧の方様に良からぬ風聞があります故、鎌倉殿をお引きとりにまいりました。御台所の仰せ付けでござります」

「無礼な」

「ご異存はありますか」義村は、にやりと笑つた。「屈強の郎党も来てありますぞ」

「うーむ・・・」悔しげに時政は義村をにらんだ。やはりこやつは力ある者に靡く汚らしい犬だと思つた。

見れば、大庭の影に弓を手にした郎党までいる。

「義時が裏で指図してこるな」

「さよひでござります」

「ふむ、義時はなかなかの、策略家だな」と苦笑いする。

時政は牧の方を振り返つて言つ。『もはや、これまで、鎌倉殿をお連れしり』時政は、やはり歴史を変えるほどい、いやわざよい男である。

「あなた政子のいいなりに成るのですか」

『良いからすぐにお連れするんだ』義時との不仲を生んだ牧の方に時政の視線はきびしい。

実朝は、不審そうな顔で、牧の方、乳母に囲まれて出てきた。肌も髪も艶々しい美少年である。今でいう中学三年生という年頃だ。絹織りの白い色もまぶしい水干を着た実朝はまさに美しい貴公子だ。時政は実朝に声をかける。

「鎌倉殿ジジめとしばらくお別れでござります。今日から義時の館にお住まいしていただきます」

「何があつたのだジジ」

「いいえ、大したことではありますまい、あちらには母上も義時もいます、それからホレ、お気に入りの泰時もいます、楽しいでござるぞ」

輿に乗つた実朝と乳母に女房達、取り囲むように甲冑の武者達がワサワサ動き去つてゆくと、がつくりと肩を落とした老人が一人座つているだけとなつた。

静まりかえつた邸内に、場違いのよう広元がおずおずと入ってきて、腰を落として丁重に時政に書状を手渡した。

時政は老眼のため、手を伸ばして書を遠ざけ眼を細めて書状を読んだ。

お父上には、長年まことにまことに苦労様でござります。おかげさまで鎌倉もようやく軌道に乗り始めました。いつまでも、いつまでも、お仕事にお励み頂きたいのは山々なれど、積年の労、山よりも重くお肩に力かるを見るにつけても、一族一同、お父上の労苦減じたくそろひ。この上は、良いきりとして古郷にもどり静養、悠久の日々を気兼ねなくお過ごしなされますよつ、お願ひ申し上げます。遣わした郎党等は父上をつつがなく古郷にお送りするであります。

ましょ。 尼御台所 政子

閏七月一十日 晴れ 辰の刻（午前八時ごろ）北条時政は牧の方、近侍、女中ともども伊豆の北条郡に向けて送られて行つた。

鶴岡八幡宮前の北条義時邸に義時と広元と安達盛長が一同に集まり協議した。

その結果、京都の牧の方の義理の息子、平賀朝雅を討つべし、と京都にいる御家人に向け使者を出すことを決定した。

閏七月二十五日 鎌倉を二十日に出発した早馬が夜になって京都に到着した。すぐに命令を京都に駐留する御家人に伝えた。

閏七月二十六日 晴れ 平賀朝雅は後鳥羽上皇の御所に参上してまだ退出せずに囲碁の会に参加していた。御所の小舎人童（下働きの童子）があわただしく走つて来て朝雅を招き呼び、鎌倉から朝雅追討の令が出ている事を告げた。

朝雅は全く驚くこともなく、元の席に戻ると、勝負を終えるために碁の石を数えた後、席に居合わせる後鳥羽院に「関東から私を追討せよとの令が届いたとの事です。逃れる術はありませんので朝廷のお仕えも解任させてくださいませ（朝雅は京都守護であるが、北面の武士として朝廷の高位も受け殿上を許されていた）」と言つた。平賀朝雅は比企の乱（1213年）で動搖する鎌倉に乘じて伊賀、伊勢という平家の本拠地で起きた平家残党の大反乱を総大将として見事鎮圧した清和源氏一派の豪の者だ。

朝雅が自邸に戻った後、京都に駐在する御家人、藤原有範、後藤基清、安達親長、佐々木広綱、佐々木高重が襲いかかってきた。しばらく戦闘の後、朝雅は騎馬で逃亡したが追いかける者の一人であつた山内持寿丸の追撃よつて射殺された。

九月一日 内藤朝親（ともちか）が京都より鎌倉に到着し「新古今和歌集」を持参した。

これは源通具・六条有家・藤原定家・藤原家隆・飛鳥井雅経らが後鳥羽院の命で和歌所（和歌集作成の為に設けられた機関）で去る三月十六日編集を終え、院の眼を通して、三月二十六日に祝宴を終えたばかりのものだ。

かねがね、完成の噂とともに父の頼朝将軍の歌も入っていると聞いて実朝は、見てみたいという気持ちがあつたが、京都に尋ねることはしなかった。

しかし詠み人知らずとして歌が採用されるほどの内藤朝親が実朝の家来であるので、新古今集の完成を早めるよう画策せよと書いてあつた。

けれども、今度の朝雅追討の京都の騒乱で今日まで、帰着すら遅れてしまつたのである。

54 内藤朝親、新古今和歌集を持つて鎌倉に戻る

内藤朝親は鎌倉に到着すると、わが邸にもよらず旅装束のまま御所に駆けつけた。随分、荒々しい様に

実朝は驚いたが、直接来たと言つことが解り、実朝には嬉しかつた。

「朝雅殿討伐で京都は大変な騒ぎでした。静かな京に騎馬が音高く駆け抜け武者達の大声が到るところですぐものですから貴族を始め庶民達も固く戸を閉めて縮こまつておりました。何しろ六波羅ろくぱら探題

（鎌倉幕府の朝廷監視役・警察の役）の屈強な武士が左右に分かれて戦うものですから、凄まじいの一言でした。この私も追討の一員としてかけずりまわっていたのです。ちょうど鎌倉殿に出来上がった新古今和歌集をお届けしようと旅支度していたところに追討の令が届いたので、出立が遅れてしまい、到着が今となつてしまひます」

「藤原定家殿や後鳥羽院殿は無事だつたのですか」

「京都は不思議な所で、我々鎌倉の武士が駆けずりまわっているのに歌会なども開かれていて、われ闇せぜずといった雰囲気なのです」

「なんだか、関東の武士達が滑稽ですね」

「京都の人々から見れば、我々は人殺し集団に見えるでしょうな」「もう聞いているでしうが、あなたが留守していた短い間にも、畠山一族が討たれ、叔父の時政が更迭される騒動がありました。私はいつになつたら鎌倉は平安になるのだろうかと危惧しているのですよ。」

朝親はもつともだという風に相づちを打つた。

「そうそう話が長くなつてしまひましたが、これができあがつた、新古今和歌集でござります」

朝親は手元に置いた華麗な文様の布をほどいた。中から桐の木箱が表れた。木箱のまま朝親は実朝にさしだした。実朝はドキドキするような気持ちで桐箱の蓋を開けてみた。純白の真新しい紙に新

古今和歌集 と墨痕も鮮やかに筆書きされている書が眼に入った。

「ああ、これが噂の新古今和歌集ですか、美しい筆使いですね、ああなんとうれしいのでしょうか、本当にありがとうございます」

実朝は朝親が退出した後、すぐに新古今和歌集を開いた。夕の食事もあわただしく口に入れ一睡もせずに読みふけった。

十一月三日 小沢信重のぶしげ（滅ぼされた稻毛重成の息子、小沢重政の兄弟か）が綾小賂師季あやのじゅしの息女一才いっしを伴い、鎌倉に帰ってきた。政所執事一階堂行光ゆきみつはそのことを尼御台所（政子）に伝えた。

この幼女の母が、八月に誅された稻毛重成の娘なので、幼女は世間の眼をさけて、乳母（夫は小沢信重）の家で密かに育てられたのだという。

稻毛重成の妻は政子の異母妹である。いわば孫のような血筋の幼女がそのような有様であるのを政子は不憫に思い鎌倉に連れてこさせたのだ。

十一月四日 綾小賂の姫君一才が政子の御所に連れてこられた。やつと言葉を話し始めた幼女を感慨深く見つめた政子は涙をこぼしながら連れてきた行光に言った。

「まあ、なんと可愛いのでしょうか。この子はさぞ寂しい思いをしたのでしょうか。・・・この子は私がかばつてあげるべきです。・・・稻毛一族のものとの領の一部、小澤領（東京都稻毛市）を、この子に与えましょう」

この幼姫の母の兄が小澤領主小澤重政であつたという因縁からである。地誌などをしらべると連れ帰った信重が領地を貰つたようである。

十一月十五日 千葉氏から出家して僧侶となつた相馬次郎師常が六十七才で亡くなつた。この人は千葉氏から分家した相馬家当主を早々息子に譲り、法然の弟子となつていた。合掌、読経の内に徐々に衰え成仏する高雅な姿を見て功德を得ようという庶民が非常に多数集まつたという。

十一月一日 故頼家將軍の若君 善哉ぜんざい（五才の時、父、頼家は暗殺された）六才を政子の考へで鶴岡八幡宮の別當（社の筆頭）尊曉そんきょうの弟子とした。夕暮れ時侍、五人を連れての社殿入りだ。

十一月十八日 実朝室が鶴岡八幡宮にお参りする。網代（編んだ竹）を萌黄色に塗り、大円の周りに八個の小円を配した八葉という文様を描いた天皇が乗るような牛車ぎつしゃで参宮した。女房の牛車が二台ついて行く。

元久三年（1206年） 実朝十五才

一月十一日 晴れ、寒風止む 御所で読書始め 中原「仲業ながなりが孝教を講読した。

一月二十七日 新しい定めが決まった。頼朝、頼家の両將軍からの拝領の土地はよほどの大罪を犯さなければ取り上げる様な事はないという事だ。これは北条義時が父の時政を更迭したのとともにない御家人のあいだに前途への不安が高まっていることへの対策である。

二月四日 大雪 実朝は鶴岡八幡の祭礼の後、夕方になつて雪見の為に、名越山のあたりに出た。主の時政のいなくなつて、寂しくなつた名越邸で歌会が開かれた。北条泰時、東重胤、内藤朝親ら歌に巧みで若い者達が同席した。

三月一日 実朝は書が好きだ。この頃は孝教（孔子の日々の言動を記した書）天台小止觀（天台宗の開祖、中国の僧、天台が禪の方法を書いたもの）二經義書（聖徳太子が書いた。法華経などの注釈書）万葉集、古今集、源氏物語などを読んだ。

とりわけ万葉集の自由な古典的な作風の歌は若い実朝の御所生活に彩りを加えた。歌という短い言葉の連なりが美しいものを作り上げる、そうした事への驚きが実朝を歌作へと誘う。

この頃は和歌の黄金期といえる時代だつた。平安中期の西暦で言えば880年、歌人、遊び人として名をはせた有原業平が亡くなつた頃、業平の弟、行平が自邸で「歌合」なるものを開いた。歌合は次のように行われた。

歌人を左右二組に分け左右一人ずつが歌題「鹿」などというのに応じて提出した歌を講師と言う者が詠み上げる。左右それぞれに念人といつもののが居て自分の側の歌人の歌を弁護して申し述べる。その言い分を聞いて最終の評価を判者と言つ者が下す。これを合わせた得点の多さを左右陣営が競うのである。

実朝が生まれた頃に九条義経による六百番歌合させが行われ実朝がまだ十才であつた建仁元年（1201年）後鳥羽院の主催で史上有名な千五百番歌合させが行われた。（この時後鳥羽院は二十一才であった）

このように歌合が隆盛のなか、北面の武士（朝廷の警護の武士）であつた高名な歌人の西行が出家して旅に出、頼朝に面会するような事もあつた。

今日、寝殿の中庭の一本の桜の木が静かに一枚、また一枚と花び

らを散らしている。実朝は朝から室とともに同室して色紙に、桜を題に歌を作っている。室も同じ年、歌が好きであるから、二人は口コロ笑いながら歌作に時を過ごした。（まったく良い人を妻に貰つたものだ、優しくて可愛くて、趣味の良い人だ）といつも思う。

「少し、歌作りに飽きました。ちょっと、蹴鞠けまつなどをしませんか」

「あら、殿ですか？はしたなくはありませんか」

「いやいや、東国では女も馬を走らせますし、走る馬から犬を追いかけて矢を射たりさえするのですよ」

「ウフフ、関東では、本当に驚きばかりですね。男達が裸で組み合つたり、鳥どうしを鬪わせたり、犬を馬で追いかけて矢で射たり、鷹に小鳥を襲わせたり荒々しさにびっくりするのですよ」

「さあ、だから蹴鞠ぐらいはなんでもありませんから、やりましょう」

実朝と室は散っている桜の下で蹴鞠をはじめた。

三月一日 桜が満開を過ぎて微風にすら一斉に花びらを散らしている。御所の蹴鞠場に多くの若君らが集まっている。

実朝15才・和田朝盛15才・東胤行13才とその父、東重胤3才・一世を風靡する朝廷歌人藤原定家の弟子の内藤知親28才・北条泰時25才である。

今日は蹴鞠の会^えが開かれているのだ。

実朝も近頃は上達して、見ている女房達五人と御簾の向こうの政子と実朝室の拍手を浴びている。和田朝盛などは、大柄なことに加えて、流麗な身体運びが、人々を感心させている。

三月三日 朝方起き出して実朝と実朝室は降りしきる雪のようになれる桜の中にいる。

「鎌倉殿は私に关心がおありですか」と室は実朝にふいに聞く。

「なぜにそのような事を聞くのだ?」

「・・・闇^{ねや}をともにしながらお抱きにならないからです・・・」

「そのことはいつか話そうと思つていました・・・けれども」「けれども?」

「兄、頼家だけでなく、それ以前も叔父の義経様、その長男の子と次々と亡くなり、源氏の子は死ぬ定めのように思えます。私はあなたを愛おしいと思っておりますが、あなたに添い寝しようとする、その事が想いおこされて怖いのです。私の子供が亡くなることに私は耐える事ができないと思うのです」

「・・・お気の毒な鎌倉殿・・・」

「將軍、將軍と祭り上げられていますが、いつ暗殺の手が伸びてくれるか判らないのです。兄が邪魔だから

それを取り除き幼い私を將軍としたのです。私が魔手にかかるのは忍べますが、わが子に魔手がかかるのはどうしても嫌です。それで

あるなら子などない方が良いかと思つのです

「お子を作りたくないと言つてお気持ちはわかりました。それならばそれで良いです。子は作らないよつて致しましよう、けれどもお抱きになつて下せこましね」

実朝は室の顔をまじまじと見てつづなづいた。

三月十一日 桜井五郎は腕のある鷹使いであるといつ。五郎は実朝の前で鷹使いの口伝、故実などを語つた。我が腕を自慢しながら、鷹を鷹のように使えると言つた。それを見たいと実朝が言つと、すぐにはできませんが後日といつて帰つて行つた。

三月十三日 実朝は義時と何時間か雑談する。実朝が言つ。

「昨日来た者に桜井五郎という者がおりました。鷹で小鳥を捕ることができると言うのです。それを見たいと思うのですが、ちょっと子供じみていますかね」

「五郎が鷹で鳥を捕らえるという技は、かつては有りましたが、今では見られない事です。それが嘘であればこの先彼のためにもよろしくありません。もう一度尋ねてみるべきです」と、言い終わらないうちに五郎がやって来た。紺の直垂（ひたなれ）（筒首の水干に対しても前あきの和服、当初は庶民の服であったが、庶民出である侍の地位向上により武士の服装となつた。下半身は袴を着用する）を着て餌袋を右腰につけ、鷹一羽を左手に止ませてている。

義時は御簾の中からその姿を見て、「面白いじゃないか」と言つた。そして御簾を上げて「さあ、早くやらせて見ましょう」さらに言つ。この時になつて広元、執事の三善康信を始めとした文官や近侍の武者たち、女房達がどつと出でてきた。

桜井五郎は庭に立つた。小雀が草の中もあり、鷹を放つて捕られた。見ていた人々が、それを見て歓声を上げた。五郎は言つた。「小鳥を捕ることは普通のことです。雉きじであつても変わることはあります」五郎は御簾の前に招かれた。五郎は義時から剣を賜つた。

四月一十七日 改元 建永元年

六月十六日 故頼家將軍の若君、善哉が尼御台所（政子）の邸に来る。着袴の儀を行つた。実朝將軍も来ている。

七才になつたばかりの愛くるしい小さな善哉が実朝、実朝室、政子、義時が座る前で袴を着ける。碁盤が部屋の真ん中に置かれている。碁盤の上に乗つた善哉に飛び降りるよつ、政子が言つ。エイと元気な声をあげて善哉が飛び降りる。

皆の拍手が巻き起こつた。その後、泰時（義時の息子）が食事の手配をした。祝宴が始まる。実朝はそれとなく善哉を観る。小さいながらきびきびした動作や言葉が前將軍を想わせる。頼家を殺した義時も笑顔であることに実朝は違和感を感じる。

六月二十一日 大蔵御所南庭で相撲会^{すもうのえ}が行われる。義時、広元も来ている。実朝將軍も御簾を上げている。参加の者が庭の中央に進み出た。結城朝光（小山朝光の事。結城を所領としたのでこの名を名乗つた。結城氏祖。梶原景時訴状を作成したり、腰越で義経に鎌倉入り不可を伝えたり、幕府で中心的存在として87才まで生きた。文才に優れ、美男子であったといつ。この時40才ぐらい）が行司を担当した。一番は三浦高井の太郎と三毛大蔵の三郎（鎮西の住人）、二番は波多野五郎義景と大野藤八、三番は広瀬助弘（義時の郎党）と石井の次郎（和田義盛の近親、郎党）であった。

羽毛、着色皮、砂金などが賞品として積み上げてあつた。事が終わつて勝敗にこだわらず配るうとしたが、負けて恥ずかしくて逃げてしまつた者もいる。探し出して賞を与えたが、その照れようがほえましかつた。

十月一十日 善哉が実朝将軍の猶子（養子のよだなものが。同居したりしないことが多く、いわゆる公式な身分としての趣がある）として初めて御所にやって来た。乳母が三浦義村の妻なので義村が品物を献上した。

善哉は固くなつて実朝の前に平服する。

「そんなに固くならなくとも良いのですよ。・・・なにか不自由な事はありませんか？辛い思いなどをしてはいませんか？あなたの事は田頃気にかけて居ました。これからは一層の身内としてあなたをお守りいたしますよ」

善哉は顔をあげてしばらく実朝を澄んだ眼を実朝に向けると「ありがとうございます。御所さまに暖かいお言葉を頂けて嬉しうござります」覚えた言葉を復唱しているように言つて、お辞儀をした。

十一月十八日 教師であり、和歌に蹴鞠に遊行に遊び仲間でもある東重胤とうのしげたね（十五才も離れている！言い方は悪いがお守役とも言える）が、国くにの下総（千葉）に戻ったまま数ヶ月となつた。それで歌を作つて重胤に送つた。

来むとしも 頼めぬうわの そらにだに 秋風ふけば 雁はきにけり

（来ると言つことも頼めない上の空のあなた。しかし、その空にだつて秋風が吹けば雁は帰つてくるというのに）

今来むと 頼めし人は 見えなくに 秋風寒み 雁は来にけり
(今日は来るだらうと頼んだ人は来ないのに 秋は深まつて 雁だけが やつて来ました)

それでも、重胤は出てこなかつたので、いよいよ実朝は怒つて、重胤に謹慎を言い渡した。

十一月二十三日 晴れ 重胤が義時邸にやつて來た。そして「実朝將軍の怒りを誘つた事に私は嘆き悲しんでいます」と重胤は言った。義時は言つ。「お怒りはずつと続く事ではあります」と重胤は言つた。いこのような災難に遭うのは仕えている者の常ですよ。しかし御所の場合には和歌を献上すれば、きっと機嫌も良くなりましょう」そこで重胤はその場で筆を取り一首詠んだ。義時はその技に感心し、重胤を伴つて御所に参上する。重胤は、その間御所の門外をうろついていた。

御所内に義時が入つて行くと、実朝はちょうど南庭にいた。先ほど歌を出して、「重胤がこのよつな歌を詠みました。ところで重胤は謹慎で随分苦惱しているようですよ」とつた。

実朝はその歌を三度も読み返した。そして「とにかく重胤は今どこにいるのですか」と聞いた。

「重胤ですか、重胤は御所の外でうるさいしております」と、義時はにやりと笑つた。

「なんだ、そうならば、すぐにここに呼んでください」

重胤は実朝の前に呼び出された。重胤はただ頭を下げて寡黙である。

「重胤、やつと戻つてきたな。待つていましたよ」

「かたじけないことで」「ぞいます」優しい言葉に重胤の眼が潤んだ。

「古郷かとの冬景色はどうですか」

「雪も消えず、凍つております」

「寒いでしょうかけど、良い風情でしうね。枯れ野や鷹狩りや雪が降つた後の朝など、歌題に事欠かないな」

「そのとおりでござります。それでついつい長話してしまいました。お許し下さい」

建永二年（1207年） 十月二十五日改元 承元元年 実朝
十六才

一月五日 実朝は従四位の位を朝廷から授けられた。一位から従一位、二位、従二位と下つて十位までの位階である。役職でいえば政府省の長官の位だ。しかし、実朝の位は、肩書きのみである。当然の事であるが、鎌倉幕府の成立以来、国政の実権は鎌倉幕府がにぎっているから、朝廷は存続しているとはいえ、朝廷の位階は、もはや権力とは無縁のものとなつてゐる。

一月 実朝室が牛車（ぎゅうしゃ）と女房の牛車、二両（二台）で警護の者に守られて鶴岡八幡宮に参拝する。法華經供養が行われた。主宰する師は定暁（ていぎょう）であった。鶴岡八幡宮のすべての僧（当時は神仏は同様に考えられていたから、八幡宮を僧が采配していくも不自然な事ではなかつた。厳しく仏教と神道が分けられたのは明治政府になつてからである）が集まつてきた。

室が夕方、鶴岡八幡宮から御所に戻つて見ると、寝所になつてゐる裏殿に実朝がぽつんと座つて、梅に見入つてゐる。

「鎌倉殿お寂しそうですね」

「おや、帰つてきたのだね。・・・寂しくなんかはないです。この素晴らしい梅の香りにうつとりしていました」

「そうですか、良かつた」

「心配してくれてありがとう。実は私はあなたこそお父様や家族とはなれて、こんな東国の片田舎に住んで寂しい思いをしているのではと心配しているんですよ」

「まあ本当に鎌倉殿はお優しい」室はにっこりと微笑む。そして、

この方の優しさは育ちの良さから来ているのだと思った。

「・・・梅を・・・梅を歌にするのは難しいね、あまりに良い歌がおおすぎる」二人は夕陽を受けた中庭の梅の花を見上げる。

一月十八日 早朝 実朝は二所詣の為、由比ヶ浜に出て、冬の冷たいが清澄な海水で身を清める。習わしの精進の儀である。ようやく十六才になつて、体力もついた実朝将軍が、初めて二所詣を行うのだ。二所詣とは、父の頼朝将軍が始めた祈願行事で、源氏の守護社である伊豆山？社と箱根権現社、それと後から追加された三島大社を巡る旅である。

はじめの頃は鎌倉から相模湾沿いに騎馬で、熱海の伊豆山神社、十国峠を経て芦ノ湖の箱根権現、三島の三島大社と行く行程であつたが、のちに変更された。

この順路で巡ると、熱海の伊豆山神社に行く途中、小田原の先、真鶴半島にほど近い石橋山を通る。

石橋山は、故頼朝が平家に対し反旗を翻して、初めて敗走した場所だ。ここで激しい雨中、深夜、直臣の佐奈田^{さなだよこち}と一武藤三郎など、多くの部下を失つた末、山中を苦汁の敗走をせねばならなかつた。

頼朝は昔日を思い出して落涙したといつ。一族繁栄を願う行事に最初から涙は不吉だ。頼朝は次回から、伊豆山神社に向かわず、石橋山の手前的小田原で右に、早川沿いを上流に向かい湯本を経て箱根権現に向かう行路を取るようとした。

頼朝は、この敗走の後、真鶴半島の付け根部から漁民の協力を得て房総半に脱出する。石橋山は磯を洗う白い波と青い海の海岸線から急に立ち上がった山だ、いくらか上がったところがややなだらかになつていて畠などもある。現在は一部がミカン山になつてている。

一月二十一日 卯の刻（朝六時^う）実朝将軍^は初めての二所詣に出立する。北条義時、北条時房、中原広元、安達景盛^{あだちかげもり}以下が付従つた。（前述したが、景盛は愛妾を前将軍頼家に奪われた男である。修善寺に幽閉された頼家は景盛を調べてくれ、私は無実だと言うよう文書を寄こしている。景盛の父、安達盛長^{もりなが}は、頼朝が伊豆に流されてきた時からの忠臣で、頼朝に十分な経済的援助を与えていた比企尼の娘を妻としていた。比企尼の娘は宮中で女房を務めていたこともあり

京の情勢を良くとらえ、頼朝に伝えていたといふ。安達盛長で特筆すべきは頼朝と政子の出会いを取り持つたという事である。景盛はその息子である。安達氏はかように源家と密接な一家であった。景盛は、この日50才位である（）

甲冑をつけた武者百騎と水干を着た供の者二十騎が鎌倉から腰越を抜け海岸沿いを進んだ。小田原までの梅が咲き始めた街道までは、村の人々が將軍見たさに集まって来ている。

「あれが鎌倉殿だ、なんと初々しい武者姿だ」口々に実朝を褒め称えている。

小田原から早川沿いに上つて行く。今日の宿は湯元だ。実朝は大地から湧き出す温泉というものが不思議である。湯を沸かさなくて、大地から滾^{こんこん}と湧き出す湯は神仏のもたらすものに違いないと思う。今日一日の道中、雪を被つて純白の富士が見られた。歌を夜

半作つてみた。

富士の峰の 煙も空に たつものを などか思いの 下に燃ゆらむ
(富士の峰の噴煙も空に立つものなのに わが思いはなぜ心の中で
燃えているだけなのだろか)

万葉の恋歌になぞらえて作ったのである。

一月二十三日 晚の下、下、小涌谷を経て午後、箱根権現に到着する。夕暮れ時権現の歳事を終えて、芦ノ湖を見渡す庭に義時とともに降り立つた。湖には青い霧が湧き出している。

「純白の富士が大層見事ですな」

「湖に映つていますね。なんと美しい眺めでしようか」

「さすが、吾妻の国の誇りとする山ですな。鎌倉で見る富士と違つて、大きく神々しい姿ですな」

「私は思うのですよ。鎌倉もこのよつて氣高くありたこと」

「つむ、それはなかなか難しいことだ」¹ さこますな。まだ各地に謀反の煙は絶えませんからな」

見入るうちに富士は真つ赤に染まつてくる。実朝にはそれが血の色に見える。

一月二十四日 夜明けとともに箱根権現を出立して、西に下つて行く、やがて三島大社の莊厳な屋根が眼に入ってきた。

三島大社は頼朝の父の義朝が相模一帯と関東南部に開拓領地（自ら切り開いた農地は所有地とすることができた）であつた頃、帰依していた神社だ。壮大な社は見る者を驚かせた。大きな古木の多い宏大な森に社が点在している。

三島は伊豆国（平安朝の地方支所）の国府（平安朝の地方支所）が置かれていた由緒ある場所である。前記したが、三島大社は当初、一所詣に含まれていなかつたが、日程に余裕がある事（三力所を巡つても六日間しかかからない）や、箱根まで来て、源氏と深い因縁のある三島大社が近いなどの事で、一所詣でに加える事を思いついたのだ。頼朝が平家の威を借る、山木一族を打つたのも、三島大社の祭りの夜の事だったのも、頼朝の脳裏にはあつて、その縁起によるかもしれない。

朝方、三島大社の高殿に上ると純白の富士は裾野の方から立ち上がるのが見えた。裾は満開を迎えた社の梅林の花に包まれていて、その景は桃源郷を思わせた。実朝は万葉集に載せられた山部赤人の歌を思い出した。この歌はこの先の海辺で歌われたのだ。

田子の浦ゆ 打ち出て見れば ま白にぞ 富士の高嶺に 雪ぞ降りける

祈祷のお払いが済んだ暁下がり、実朝は安達景盛らとあたりを少し散策してみる。景盛は言つ

「鎌倉殿、見なされあちらにまつすぐ伸びて行く道が京に繋がる東海道でござります」

「景盛殿も、この道を京まで攻め上つたのですか」

「最初の時は富士川まででした。富士川の向こうまで平家の軍勢はやつて来ておりました。総数は一万騎ほどでしたな。しかし源氏は軽く十万騎はおりました。富士川をはさんで双方、陣を構えて明日は一戦というその夜、平家はただの水鳥の騒ぎにあわてて逃走し始めたのです。この平家の弱腰を我々は笑つたものでした。・・・その後、逃げて行く平家を追討しながら、この道、東海道を京までまいりました」

「そうか、この道がその道なのか」

「介殿（頼朝）も、あの時は元氣でいらした。夢のようではございません。あの当時から見れば天下も大分、安泰と成りました。しかしまだまだ氣を緩める訳にはいきませんな。聞くところによれば後鳥羽上皇は身辺に武士を集め始めているとか。衰えたとはいえ、朝廷は力を結集して鎌倉追討に打つて出るかも知れぬと私はおもつております」

「そうか、まだまだ戦いは続くのか」と言つて、実朝はその道を見つめる。

一月二十五日 三島からは、しばし来た道を再び上がり、芦ノ湖で右におれて南へと進路を変える。春霞の中、山の梅の木が諸所に花開いている。芦ノ湖からは下りの道である。

やがて十国崎に出る。十国が眺められるところの名がついた、この眺望の良い場所からは、駿河湾の清涼な青いならかな海岸線の奥にそそり立つ富士や青磁のような色をした相模湾の沖合い遙かに停泊するような伊豆大島と、それに付き従う利島や神津島や式根島が眺められた。

「すばらしく美しい眺めだね！」実朝は轡を並べている北条義時、北条時房、中原広元、安達景盛に、その光景に打たれて、少年のような高い声をかけた。

「ここは鎌倉殿にお見せしたかつた所ですよー右幕下（頼朝）も、いたくここがお気に入りでした」これは義時の声。

「もう、あれから十五年近く経ちますね。あの頃も、この面々でこうして、この光景に見入っていたのですな。あの頃の事を思うと感無量です・・・（あの時は比企能員よしかずと若かりし北条時政も参加していたつけ）」これは広元の声。

馬を下りて皆はしばし休憩する。実朝には磯に寄せる白波がまるで止まつていて見える。海は光り輝いて千の反射を送つて寄こしている。この時浮かび上がつて出来た歌がある。

箱根路を 吾が越え来れば 伊豆の海や 沖の小島に 波の寄る
見ゆ

山を下つて行くと、やがて前の海が近くなつた。もう熱海の伊豆山神社が近いことが、初めての実朝にも知れた。しかし、この水色

と緑色の混ざつた海の色と磯に砕けている純白の色の取り合せの美しさは何度見ても飽きないと実朝は思いつつ馬上の人である。

この時の印象もやがて歌となつた。

大海の 磯もどろに 寄する波 割れて砕けて 裂けて散るかも
蜃下がり、一行は温泉がほとばしる磯（当時は、海に向かって一日二万トン近くの熱湯が吹き出でていただろう）から三百段も石段を上がつた高台にある伊豆山權現？社に到着した。

その後、長い石段を海岸まで下つた実朝は「走り湯」と呼ばれる海岸の岩の間からほとばしる多量の湯の有様を眼を丸くして見入つた。その印象も歌に作つた。

伊豆の国 山の南に 出する湯の 早きは神の しるしなりけり

実朝はそこで温泉に浸かつた。湯殿から赤く染まつた雲と藍色に暮れて行く海が見える。この旅はいつも海が見えるな。それにしても大地から、こんこんと湯がほとばしるのはどういう事なのだろう。これは、神の仕業だと本当に思う。神や仏は、どこかにいて、争いばかりする人間を見ているのだろうな。それなのに神の恩寵がないのは、私達の仏法がまだまだ至らないからなのではあるまいか。鎌倉を平和にするためには栄西様がおっしゃつていたように天竺の仏法を学ばねばねばならないかも知れない。

そんな事を考えていると、すでに陽はすっかり落ちて、漆黒の空に鎌の様な月と数千の星が輝き始めた。

一月二十六日 伊豆山権現からは、海沿いの道を鎌倉に向けて進む。頼朝が房総に向けて脱出したという真鶴半島が水色の海上に浮かんでいる。やがて頼朝が深夜に豪雨の中、敗退したという石橋山が、実朝に示された。事情を知っている実朝は「あれが石橋山ですか」と、その方を馬上から見つめる。岡ほどの山並みが青い海から立ち上がっている。

実朝一行は石橋山の中に進み入った。林の中に頼朝臣下の佐奈田与一の石碑が立っている。「ここで三浦勢の支援を待っていた頼朝公や我々は、その到来の遅れに孤立して平家方の軍勢に蹂躪されたのです」これはこの戦場にいた北条義時の説明である。

吾妻鏡では頼朝は箱根権現に逃れたとあるが、筆者が2008年、佐奈田与一を祀る、当地の佐奈田

靈社を訪ねて、山主、原義昭氏から聞いた話がある。頼朝一行は芦ノ湖の箱根権現に逃れたのではなく、当時あつた箱根権現の分社（石橋山の山奥にあつたといふ）の修行者に食糧を提供され、獸道の様な山道を案内されて真鶴に逃れたのだと云つ。そして真鶴によつて逃れて、漁師網元に酒と食事でもてなされたたそうである。頼朝はそのもてなしを喜んで「褒美をとらせよう」というと漁師は「それならば名前を下さい」と言った。「その方は酒が強い、一斗（十升）も飲んでおるから一斗といふ名はどうだ」と頼朝が言った。一斗といふ名前は、今も真鶴に残つているといつ。

一月二十七日 夕刻、実朝の一所詣一行は鎌倉に到着した。

実朝の一所詣はこの後しばらく途絶え実朝二十一才の時再開される。二十四才の時一度休むが一十七才まで続けられた。

二月二十八日 法然が土佐の国に配流となつた。念佛さえ唱えていれば、救われると言つゝことで、その門弟、信者が爆発的に増えて、他宗の脅威となつていた。又、風聞では念佛会に出席した女と密通し、乱れているというので後鳥羽上皇は、期を捕らえて実行したのだ。

三月三日 女房などが寝起きする御殿に近い北の庭で鶏闘会みなもとともひが開かれた。北条時房、源親広（広元息子）結城朝光、和田義盛、足達遠元、安達景盛の顔が見える。

一月二十日 武藏守の前任の平賀義信が謀反で滅ぼされたので北条時房が、その役に任せられた。（朝廷の役である国司を守りといった。朝廷の制度が、この時まだ生きていたのだ）

三月一日 桜や梅など木々が沢山、実朝の住居である御所北側の邸宅の庭に植えられた。永福寺（よつふくじ奥州藤原氏征伐の時、美觀で頼朝を驚かせた、平泉、中尊寺に負けまいと、御所の山側に建立した、美觀を目的とした山に囲まれて大池を造作した静謐な寺である。作庭には頼朝みずから汗を流して作業した。現在は宏大な空き地となっている）から移されたものだ。

三月一十日 平地が多い武藏の国にすら未開発の森林や沼地が膨大に残っている。実朝は新任の北条時房に傘下の守護に、荒野を開拓するよう命じよと云えた。

八月十五日 小雨が降っている。鶴岡八幡宮で放生会が行われたが、実朝将軍が出かける時になつても隨兵が都合があるといつて集まりが非常に悪かった。仕方なく、他の者を緊急に呼び出したから実朝の出発は大分遅くなつてしまつた。結局出かけたのは申の刻（午後四時頃）になつた。それで舞楽、儀式は日が落ちてからとなり松明たいまつを燃やしての事となつた。

実朝将軍は、興ざめしたのだろうか早々と帰つた。

八月十七日 先日の不参の者について審議が開かれた。義時、時房、広元、三善康信、二階堂行光らが集まつた。それぞれ当日に不参の理由を伝えてきていて、ある者は正しい装束が無かつた、あるものは病氣であつたと言つことだつた。しかし吾妻助光は理由もなく不参した。それで二階堂幸光を助光の元に使わした。行光は言う

「おぬしは大御家人ではないが、戦のたびに武功を上げる名譽ある家柄だから、おそばの者として引き立てられているのだ、それを誇りと思つてはいないのか、無断で不参するとはどういう訳か聞かせて貰おう」助光はわびながら言つた。「晴れの儀式があるというので、用意した鎧よろいが、鼠の為に壊されてしまいきが動転して、理由も届けず不参してしまいました」行光はそれを聞いて更に言つた。「晴れの儀式の為に用意したと言つことは、新調した鎧であろうか。なにもそのような新しい鎧でなくとも、立派な鎧は持つてゐるだろう。随兵の役割はぴかぴかに飾り立てる事ではなく将軍を警護することではあるまい。世の狼藉は思いがけずに起つてゐる物だから、そんな事で休んでて役が務まるわけがない」こうして助光は出仕さしとめとなつた。

十月十七日 伊勢の国おはた小幡村は伊勢平氏の富田基度もとのだが旧来の領家（所有家）からだまし取つたような状態になつていて、基度が源氏に滅ぼされたあと、その小幡村も基度の所有地と判断され没収地となり地頭が置かれた。それで本来の所有者である領家の妻が鎌倉御所に嘆き訴えてきた。鎌倉御所は三善康信に担当させて、小幡村を、その領家の所有に戻して、地頭を廃止した。

鎌倉幕府成立以前は武力の弱い領主はきわめて不安定な立場に置かれていた事を、この出来事はしめしている。根拠のある土地所有を鎌倉幕府は保護した。これを【安堵】あんどと言つた。鎌倉幕府の公平なやり方は多くの領主によつて支持され、鎌倉幕府のよつて立つ所となつた。

これは平安朝の無策や平家の横暴に悩まされた人々にはまさに新しい時代がやつて来たことを感じさせるに十分であつた。

十一月三日 朝方、曇り空で寒かつた。いつしか雪が降り出した。
御所で酒宴があり、義時、広元も参上している。

青鷺あおさぎが寝殿の上に止まつた。寒朝は広元に言つた。

「さつき進物所（配膳所）の中に入つてきた青鷺が今度は寝殿の上に止まりましたね。なんだか不吉だから射止めてはどうですか」

「今、良い射手がおりませんな。・・・そうそう、先日おしきりを受けた吾妻助光がお怒りを解こうと御所の周りをウロウロしておりました。あやつは弓の名手ですから来るよう手配いたしました」
助光はあわてて参上し、物陰から青鷺に向けて矢を放つた。矢は当たらなかつたように見えたが、鷺は庭に騒ぎながら落ちた。

助光は青鷺を捕まえて実朝将軍にお見せした。鷺の左目から血がでているが死んでしまうような状態ではない。

助光はあらかじめ矢の羽で鳥の目をひつかけるように狙つたのだ
という。実朝はそれを聞いてひどく感心してもとのように身近に控
えよと命じただけでなく剣もあたえた。

承元二年（1208年） 実朝17才

一月十六日 晷時、文官三善康信の名越にある邸宅が焼けた。三善康信は読書、文章をことのほか好む人である。屋敷と裏山の間に広い文庫が建ててあり、各種の書籍、將軍の記録、雑事の記録、日誌など累代の文書など膨大な文書が全て燃え尽きてしまった。

康信は幸いに焼死せずに済んだが、大事な書物がことごとく焼けたと知つて、あまりの事に呆然として落ち込んでしまつた。しかし温厚な人柄であつたので慰めに訪れる人が多かつた。三善康信は吾妻鏡の前半の主筆者と推定されている。

二月三日 実朝が疱瘡（天然痘）にかかつた。天然痘は天然痘ウイルスを病原体とする病気である。かつてはコレラとともに死に至る病として恐れられた伝染病で、当時は神の怒りによつておこされる病と考えられていた。

実朝は最初高熱に襲われた。頭痛、腰痛がひどかつた。四日目にようやく熱が收ると、顔に小豆大の発疹ができた。その発疹は全身に広がつた。これは、兄、頼家がかかつた病とおなじだと実朝は思つた。

鎌倉の市中の庶民は、頼家様の呪いだ、比企さまの祟りだと噂になつてゐた。鎌倉時代は天変地異も飢饉も恐ろしい伝染病も、みな神、仏、怨靈が原因と考えていた。しかしながら稻と肥料の関係などから合理精心のめばえはあつて、特に武士は怨靈の存在を疑い始めていた。あれほど戦乱で人を殺しても、堂々と平然と生きている者が多かつた。

実朝室は、伝染の病であることを恐れず、実朝の病床に長い間いてうつらうつら寝込んでいる実朝を見舞つた。実朝はそれを有り難

いと思つた。「そんな所にいると、あなたも疱瘡にかかってしまいますよ、私は男だからあばた顔になつても威儀がつくだけだからよいですけど、あなたにはよろしくないですな、ははは」弱い声ながら実朝は冗談をいつ。「ほほ、私、結構強いのですよ、大丈夫です。でも、かかつてしまつてあばた顔になつたらでは、殿に嫌われますね」などとのんきな事を話している。

室の優しい気持ちが通じたのか、相当ひどかつた病はどうやら小安状態となつた。

「どうだ、ひどい顔だろう」

「かえつて、勇ましい感じがしますよ。余り気になさらなくとも良いのではありませんか」

「そうかな、鏡を見ると、ぞつとするんだけどな」

「命を落とす人も多いのですよ、感謝しなくては。それに、その傷跡も徐々に消えて行くそうではありませんか」

天然痘にかかつた歴史上の人物は数多い。戦国時代の伊達正宗は片目を失明しているし、平安初期に藤原氏は相次いで四兄弟を亡くしているし、江戸期の文学者、上田秋声うえだしうんせいは一部の指が小指より短かつたという。天然痘は内臓にも甚大な影響を起こす事で知られている。実朝と室の間に子が出来なかつたのは、実朝が精囊を病氣で損なつたとも考えられる。

三月二日 快晴 桜が鎌倉の方々で咲いている。鶴岡八幡宮で一切経会が行われる。南無妙法蓮華經など本来はお経の題目（書名）を、くりかえし唱えることでゴリヤクが得られるという事で行われる法事である。

実朝はいまだ病氣から立ち直らないので、義時が代理で主催する。実朝と政子も牛車で参宮した。

閏四月十一日 実朝将軍は再び悪くなつた。

閏四月二十四日 実朝の病氣がやつと良くなつた。やつと湯を浴びる事が出来るようになつた。

五月二十九日 実朝室のおつきの侍、藤原清綱が昨日、京都から着いて、今日、御所にやつてきた。清綱は大変学識のある者であるということだ。清綱は実朝の前で平伏一礼した後で面をあげて言う。

「お世通り頂きましてありがとうございます」

「清綱殿は京都で活躍との事伺つておりますよ」

「私などに、そのような御言葉、まことにかたじけないことでござります。…早速ではありますが、当家に累代伝わる藤原基俊の書写による古今和歌集を持参致しました。なにとぞお受取になて下さい」
「ああ、これは美しい筆蹟ですね。基俊といえば書で世間に聞こえた方、その手になる古今和歌集は宝物ではありませんか。頂けるのですか、本当に嬉しい」実朝は満面笑顔である。実朝は最近の京都の有様、伝え聞く京都の猛火の事などを清綱に尋ねるのだった。

十月十日 尼御台所（政子）が今朝、鎌倉を出発した。武藏守村一行がつき従つ。すべて騎馬だ。

「若殿がいつまでも、治癒しないので、靈験があるといふ熊野詣でを思いたつたのですよ。運の良い事にだいぶ治癒なされたようですが、まだ公務にはお出になれないようなのですよ」と馬上から、これも馬上の守村にこやかに語りかける。

実朝の疱瘡がどうやら峠を越したようである。政子にはそれが嬉しい。とにかくこれで鎌倉も安泰だ。義時も手堅く鎌倉の手綱を握っている。実朝のさうなる治癒を理由に、遊行に出かけたつたつたつた。

「將軍がいつまでも、健康が優れないようなので、靈験があるといふ熊野詣を思つ立つたのですよ」

政子は浮いた気持ちに饒舌である。この半年余り、実朝の健康を気遣つて、室とともに心痛の重苦しい日を過ごしていたから、治癒は嬉しかつた。思えば今日まで心置けない日々が少なくは無かつた。夫の頼朝が房総にのがれて不在の日々、海に面した伊豆山の僧坊で今日か明日かと平家方についた侍の襲来を恐れた日々もあつた。あの心細い日々から見ると、今は天国のようだと思った。

政子は、熊野から京にも足を伸ばした、初めて見る京都の美しさに政子は驚いた。もちろん北条時房が統率する尼御台所政子一行の随兵の逞しさ、力強さは京都の庶民を驚かすのに十分であった。京都御所にて後鳥羽院と面会の時を持った。政子の凜とした姿勢と誇りは、後鳥羽院に負ける者ではなかつた。

十月二十一日 東重胤が京都から戻つてきた。それを聞いて実朝は御所に招いた。將軍の前で重胤が言う。「くまがやのなあさねにゅうとう熊谷直実入道が九月十四日、午後、六十八才で亡くなられました。入道が終焉の時だと知ると、縁の深い僧や信者達が東山の草庵を取り巻きました。入道は終焉の時と予告した時刻に袈裟を着て、高座に座り、正座して合掌なされました。まるで病氣で無いかのように声も高らかに念佛を唱えながら姿勢も崩さず亡くなられたと言つことです」

「熊谷直実と云うと、あの有名な蓮生殿の事か?」

「さようでござります。かの一の谷の戦いで、義経殿の奇襲部隊の一人として鶴越の急斜面を馬で落ちるように駆け下り一番乗りを果たしたお方です。驚いた平家の武者は陣から逃走いたしましたが、直実殿は波打ち際を走る華麗な武具の貴公子に眼を止め、追走し、むんづと掴んで馬から引きずりおろし、取つ組み合いの末、組伏せました。短刀で首を落とそうと云つ時、その貴公子は、可愛らしい少年で、わが子の小次郎のように見えたので不憫に思い逃がそうと

「私は熊谷直実という者ですが、あなた様はどなたかな？」と問うと、「名乗る必要はない。首実検をすれば判るであろう」と答えたそうです。死ぬというその時に、この若さでいたきよし言葉に、直実の眼には涙が浮いて手を緩めようとすると、源氏の軍勢は直実の背後にせまっていました。「……お逃げ頂いても、もはや名もない雑兵の手に落ちるだけ、同じ事なら直実の手におかけ申して、後生供養いたしましょう。」と言つて泣く泣く首を切つたと云つことです。後で調べますと、この貴公子は平敦盛たいらのあつもりと申す、平清盛の甥おいつ子十七才（数え年）がありました。直実殿はそれを悔いて武家をやめ出家したい思いひとしおだつたそうです。

「辛いことだね。十七才と言えば、今の私のような年頃ですね。直美殿は優しい心もちの方だったのですね。出来れば往年は鎌倉に戻つて頂いて、仮の道を説いてい頂きたかったですね。それであれば鎌倉はもう少し流血も少なく、ましなのでしうね」

71 和田義盛の願い

承元二年（1209年） 実朝十八才

五月十一日 実朝が尼御台所（政子）を呼んでこう言った。「和田義盛殿が旧来からの功績を認めて国司に任命して頂きたいと申していますが、どうでしょうか」

「国司の事に関しては、侍の着任は、故頼朝将軍の時以来停止するよう決められているのですよ。国司といつものは、朝廷の地方主席官です。そのような旧制度の役職に鎌倉の侍が着任して何の意味がありましょう。故将軍はそのようなお考えだったのです。義盛殿のそのような願いに乗ることは、女の浅知恵と御家人の人々のそしりとなりますよ」

五月一十三日 義盛は以前から、内々の望みであった上総の国司、着任の要望を嘆願書として幕府文書係筆頭の中原広元に提出した。文書には、頼朝旗揚げの始承以降からの度重なる武勲を書いた後、国司任官は義盛の残された人生のたつた一つの執着と書かれていた。

七月五日 実朝は夢に見たと言つて、二十首の歌を住吉大社（大阪）に奉納した。歌に巧みな内藤朝親ともちかがお使いとなつた。朝親は前記したが高名な藤原定家の門弟である。住吉社は和歌の神様であり、京の歌人の良く参拝するところである。また、それにあわせて十四才の初作以来の和歌の作品から三十首を選び、合点がってん（評価）のため京都の定家のもとに届けさせた。

八月十三日 内藤朝親が京都から帰つてきて朝方に早々やつて来た。吉報を早く届けたいのである。実朝の歌に良い合点をくれたという。合点という言葉は、後世の江戸っ子の「ガツテンだ」の語源

で、和歌から出た言葉である。現在の私達は文書にしばしば「レ」を入れ「エック」と呼んでいるが、これを以前の人は「ガッテン」と呼んでいた。和歌集に秀作などがある時、「レ」をしるし、「良い!」という印とするのだ。このことをガッテンを頂くという。定家のように高名で、歌の評価に厳しい歌人が合点をくれたと言つ時、実朝の唄を非常に高く評価したという事を意味しているのだ。

「そうか、定家殿が合点をくれたのか! 嬉しいね! 本当に嬉しいね! こんなに嬉しいことは初めてだよ!」

「定家殿は殿のお歌にひどく関心なさつておいででした」

「自分が作った歌が良いものかどうかは余りよく判断できないものだよ。こうして定家殿ほどのお方に合点を頂くとやつと自信がつきますね」

そういうて庭に眼を移すと夜来の雨が上がり、まだ朝露を置いた置いた朝顔が幾つも朝の陽を浴びてするのが眼に入った。実朝はじんとするような喜びに身体が包まれているのを感じる。

定家は、自著の歌論書「詠歌口伝」（「近代秀歌」と通常言われている）一巻を、この時持たせた。これも悦びをさらなるものにした。

十一月四日 実朝がこのところ毎日、歌に夢中なのを見かねて、義時は弓馬の事を軽んじてはいけませんと諫めた。それで幕府内の政治審議をする小御所の東面の小庭で弓の勝負が行われた。和田常盛らの猛者が参加した。実朝はおとなしく従つたが内心は面白くなかった。

十一月十四日 義時が長年、自分で使つてゐる家臣を御家人として取り上げるように將軍に内々お願いしていただが、許可が得られなかつた。実朝はこう言つた。

「相州殿（義時の事）そのような者達は、自分の由緒もわきまえず、今度は幕府内の昇進を考えるのでは。これは後難を招く原因となるでしょうから、それは許せません。それに御家人は將軍直接の家来です。北条の家来を御家人にしてしまつたら、おかしな事になるのではないか」

義時は、まさか將軍がそのような言葉で意見をいつとは考へてもみなかつた。あの可愛かつた実朝が、今、上司として姿を現し始めたと思った。それに、この頃は和田に優しく、北条に冷たいと思つた。

十一月二十七日 実朝は和田義盛が希望していた上総の国司着任の件について本人に近々、沙汰があるであらうと伝えた。義盛はそれを聞いてひどく喜んだと言つ。

十一月一日 実朝室のお世話役、近侍の者も將軍のお供、公事をするよう、実朝將軍が決めた。もともと夫婦が別の家臣を持つてゐるのは不自然な事であった。婚姻の前までは実朝の周りは御家人だけであった。ところが室が京から連れてきた家来は、御家人ではな

い。この二者の存在が水と油の存在だった。

実朝は、自分の独断で、先日、家来のことで義時に禁止したことを、自分にかかわりのある家来に関しては許したも同然となつた。この突然の決定が、義時を非常に不愉快にした。

承元四年（1210年） 実朝19才

五月六日 実朝将軍は広元邸に行つた。義時、泰時なども来る。和歌会の後、宴席があつた。

広元は実朝に三代集（古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集の三和歌集。これらは初期の勅撰「天皇の命で選定した」和歌集である）を贈り物とした。

五月十一日 実朝は船に乗り由比ヶ浜から三浦三崎に渡る。船中で琴、琵琶、笛を用いた管弦を奏させた。室も女房達も同乗して賑やかである。

八月十六日 曇つているので多少涼しい。実朝は馬場の儀を見るために鶴岡八幡宮に出かけようと思う。昨日は暑さで体調が優れず、放生会を欠席してしまって、義時に代理で出席してもらつた。今日の事も義時に任せてあつたので、ちょっと出席しにくる。それで、こそこそと女房の乗る、女めいた色合いの輿で桟敷さじきに入つた。政子と室も、桟敷にやつってきた。流鏑馬・競馬やぶさまが終わつた後、祖先を祀る分社前に場所を移して相撲会が行われた。

泰時の家来の岡部平六と犬武五郎（相撲名手）を連れてきて対決させると、岡部が負けた。次には広瀬四郎と半島西浜の鬼童丸（相撲名手）を一度対決させた。二人の勝負はなかなかのもので、勝負がつかず、見入る人々は良い勝負だと強い拍手で褒めたたえたとう。

九月十三日 御所で和歌の会が開かれた。源親広ちかひろと源光行と内藤うちとう知親が座を作つた。

源親広は朝廷の権力を握る公家、源道親みちぢかの猶子となつたのでこの名となつたが実は中原広元の長男である。後の朝廷と鎌倉幕府の大決戦、承久の乱で朝廷側で闘うこととなる。源光行みつゆき（1163年生）はこの年48才。頼朝に対抗し平家側で闘つた父の助命を請う為に鎌倉にやつて來たが、才覚と人物を認められ、初代政所別当となる。朝廷と幕府の関係を良好に運ぶために鎌倉と京都間を往復することが多かつた。歌人としても名高く、建久二年（1191）に、頼朝の声かけで上方で行われた大規模な若宮歌合の主宰者を受け持つた。後の承久の乱で朝廷側についたが、それでもその才を惜しまれ助命される。そのあと執権北条泰時の下で、和歌所、学問所を設置する。源氏物語の注釈書として名高い「水原抄」『すいげんしょ

う』を藤原俊成、定家らと協力して書き上げ、さらに源氏物語の本として非常に重要な河内本をまとめた。また一説に平家物語の作者とも言われている。内藤知親はすでに前記したが藤原定家の弟子である。

「」で、特筆すべき事は、実朝側近に、源光行のような源氏物語の研究者で、和歌に堪能な者がいたと言うことだ。今で言えば、大學文学部の大研究者兼創作者というような光行の高雅な存在は実朝の若き日の強烈な刺激であり先生であったに違いない。光行はこの時は大和国司を降りて、大和前司と呼ばれているが、近畿の情勢に詳しい光行は広元の重要な左腕であつた事は間違はない。光行の源氏物語への深い知識は、当然の事ながら実朝をして、源氏物語を愛読させた動機になったに違いない。

九月三十日 戌の刻（午後八時頃）西方の夜空に妖しい星があらわれた。光は西から東を目指しており、中心部分は三尺（90?）尾の長さは一丈（2?）もある巨大なものである。

世情が騒然とし、鎌倉でも京都でも厄落としの祈祷が盛大に行われた。

十月十五日 聖徳太子の十七条の憲法と太子が物部守屋（用命天皇の大連。蘇我馬子に攻められ敗死した）から取り上げた領地の場所と広さ・法隆寺などに納められている宝物などの記録が見たいとかねがね広元に仰せつけていたが、この日手渡された。

十一月二十一日 雪が降っている。幕府南面の池がしつらえてある大庭の前の館で和歌の会が開かれた。多数の者の中に東重胤、和田知盛の顔もある。

承元五年（1211年） 実朝二十才

元日 北条義時邸で？飯おうばんがあった。時房が將軍の刀持ちとなり、源親広（すでに書いたが広元の子）が調度役をうけもつた。結城朝光が行騰あひだ（毛皮などで出来た、狩りの時着用する足覆い。所領の結城は現在茨城県結城郡、草深い所で有るから、狐、狸などの毛皮は豊富だつたのだろう）をみやげとして持つてきた（誰にかは不詳）。

一日 中原広元邸で？飯が行われた。將軍の刀持ちは源親広である。

三日 小山朝政邸で？飯が行われた。結城朝光が將軍の刀持ちを担当した。その後、夕刻になり御所で酒宴が行われた。趣向として延年の舞（東大寺などでの大法会の時、余興として行われる、僧侶、稚児などによる様々の舞）が行われた。義時、時房等が引出物をたまわった。

一月十六日 晴れ。京都の使者が鎌倉に到着した。去る五日に將軍家実朝が正三位に任じられたと伝御書が渡された。

閏一月九日 晴れ 永福寺は宏大な山林の丘の寺域に囲まれた頼朝が美觀を求めて創建した寺である。良い梅の木があつたので一本、実朝の居所のある御所の北面に移植した。この木の種は北野天満宮

（京都市、上京区在。菅原道真を祀る）の梅の木のものである。芳
香が素晴らしいばかりでなく、鶯の巣があつて風雅である。

一月四日 実朝と室の為に祈祷が行われた。一向に子が授からな
い。そのための祈祷なのである。

一月二十一日 実朝が鶴岡八幡宮にお参りした。結城朝光が刀持
ちを勤めた。去る承元二年（1208年）以来疱瘡の跡をはばかっ
て、参宮しなかつたが、三年ぶりのお参りである。

三月九日 改元 延暦元年。

四月一日 先日、陸奥国長岡（現、宮城県大崎市）の新熊野神社の住職隆慶が鎌倉にやつて来て訴えた。馬場資幹が地頭と言つことで自由勝手に神田（神社の所領）を横領していると言つことだった。

問注所（裁を司る所）で資幹は言う「この地は元は畠山重忠氏が知行していました。その知行の先例を守つて処置しておりますので神社の訴えは正当ではありません。しかしながら神を敬うと言つことで、もとの三十町に加え十町を神田と致します」

問注所のこの調べについて今日御前（実朝）の前で審議がひらかれた。

「神社は、本来荒野であるところに社を建て、かつてに社領と称している。特に鎌倉の許可もないものだからおそらく訴える余地はないが、資幹があわせて四十町を租税免除の地と認めるることは適当な事だ。従つて、これによつて住職隆慶は告訴を取り下げなさい」と、実朝は直接告げた。

鎌倉幕府のこののような公平で欲張らない姿勢は、鎌倉安定の根拠なのである。また、将軍直々の判決は人々には、得難い感動的なものであつたと思う。この判決は文書をもつて権利書としての正統な価値をもたらした。言い分を将軍が聞いて、権利を書いた書状に將軍の花押（特殊意匠した印）を押す、この文書は將軍が変わつても権利書として通用し、幕府はその権利を保護する。これが、鎌倉幕府の「安堵」あんどという根幹の制度である。

四月二十九日 曇り

実朝は父の頼朝が作った、山も含めると十万坪もある大池を前に

して一階建ての壮麗な本殿から両翼に釣殿などの分殿を広げた風雅な庭園寺院永福寺に夜明け前に、徒步で出かけた。北条泰時、藤原範高（熱田大宮司・後に幕府学問所奉行、和歌に堪能であったのだろつ）、内藤知親、二階堂行村、東重胤、町野康俊（この時34才、三善康信の息子）一行である。永福寺まで十町ほど（1?ほど）で近いのである。

ここで昨日の朝、ホトトギスの初鳴を聞いたという言つ者がいて、今日の朝に出かけてきたのである。

山の麓で数刻（一時間以上）待つたが、その鳴き声を聞く事はできないで、がつかりしながら帰ってきた。永福寺は僧が少ないので、寺が荒れていたのか、吾妻鏡には実朝が近所に住む二階堂行村に奉行（管理担当）をするように命じたと書かれている。

吾妻鏡には書かれていないが、正統な史学によれば、この頃、実朝は自分の和歌集「金塊和歌集」全663首の編纂に取り組んでいたはずであるが、吾妻鏡にはその影すらも見えない。もう数年後に「金塊和歌集」が出来上がったと伝えられているからである。これほど制作年月がはつきりしているのは以下の事情による。

昭和四年五月に金沢の松岡家で発見された「金塊和歌集」があった。これはもと藩主の前田家所有の書であつたという。発見者は著名な歌人で国文学者の佐々木信綱である。巻頭には定家が書を書きこの書の巻末に定家に似た書体で「建暦三年十一月十八日」と日付が記されている。しかしながら建暦三年（1213年）の十一月六日には改元があつて健保元年となつていてから正しくは建保元年十二月十八日と書かれるはずであるが、そうでないのは、鎌倉でこの日付が書かれたから、この日までに改元の知らせが京都より届かなかつた為と考えられる。定家の書をかかげておきながら、どうも、鎌倉で作成されたようなこの「写本（建暦三年本と呼ばれている）」には怪しいところがある。

この「写本」が発見されるまでは、建暦三年十一月「十三日、実朝二十一才の時「万葉集」を贈られて、初めて、この本の全歌にふれて実朝の歌の進展があつたといわれてきたのである。つまり実朝の、魅力的な万葉調の歌の全ては、二十一才以降に創られたと考えられていたわけなのだ。当然の事ながら、その集大成である「金塊和歌集」は、もつと後年に作成されたと言うのが、それまでの定説であったのである。それが建暦三年本の発見で、その説はひっくりかえってしまった。

しかし、そう言つことになると、おかしな事が起ころ。まるで二十一才から先、実朝にめぼしい歌がなくなつてしまつて、実朝が歌

をやめてしまつたように見える」ことがそれである。

だから筆者は、建暦二年本は偽書であると断定したい。それでこそ、実朝らしい日々があると思つからである。

次に実朝の創作の秘密を探ろう。実朝の和歌についての研究は吉本隆明の「源実朝」が優れたものだ。以下の記述は、その受け売りといつてよいものである。

箱根路をわが越え来れば伊豆の海や沖の小島に波のよるみゆ 金塊和歌集 卷の下 雜部

この歌は一所詣の体験に次の万葉の歌との融合で出来上がつたと考えられる。

浪の間ゆ見ゆる小島の浜久木久しくなりぬ君に逢わづして 万葉集 卷11・2753

相坂をつちいでて見れば淡海の海 白木綿花に浪立ち渡る

万葉集 卷13・3238

又、もう一つの名歌

大海の磯もとどろによする波割れて碎けて裂けて散るかも 金塊和歌集 卷の下 雜部

この歌も、実朝の体験と次の歌が融合して出来上がつたように考えられる。

伊勢の海の磯もとどろに寄する波 恐き人に恋ひ渡るかも 万葉

集 卷4・600

大海の磯もとゆすり立つ波の 寄らむ思へる浜の清けく

万葉

聞きしより物を念へばわが胸は 破れて摧けて利心もなし

万葉

集 卷12・2894

七月一日 実朝のただ一つの歌集である「金塊和歌集」に、次のように記載されている。

建暦元年七月、洪水天にはびこり、土民愁嘆せむ事を思ひて、ひとり向かいたてまつり、いわさか祈念して田べ。

時により 過ぐれば民の嘆きなり ハ大龍王 雨やめたまえ

七月四日 実朝は貞觀政要を学ぶ。この書は唐の賢帝と言われる二代皇帝太宗（在位627年～649年）と重臣の間で行われた政治問答を主な内容としている。唐の先代の王朝、隋の失政と破綻を良く分析した太宗の考えが明瞭に記載されている。

貞觀は太宗が天子であった時の年号で政要は政治の要諦、重要な所という意味だ。この書は中国の周辺諸国で帝王学として学ばれた。日本には平安期に到来し、鎌倉時代になつて尼御台所（政子）が漢文を和訳させたといつ。この書は難しい理論書ではなく、事実に即した明快で具体的な内容に満たされた名著で知られている。徳川家康は「吾妻鏡」とともに、この書も愛読書であったといつ。その内容の大略は次のようである。

一、創業と維持は、どちらが難しか？それは維持である。
 一、敵の忠臣であった者は能力のある者であるから重用すべきである。
 一、諫めごとをいう家臣を大事にせよ。良く臣の言葉を聞くべきである。

一、媚びくつらひ者を遠ざけよ。
 一、権限を能力ある者に委譲すべし。
 一、敵がいなくて安逸に流れると国が滅ぶ

一、人間関係の和ばかりを大事にすると良い仕事は行えない。

一、自分を全能だと思うな。

一、実需と虚需がある。生活が虚需に流されるといぐらでも贅沢になってしまつ。これは国が滅ぶもとだ

一、論談はすべきである。

一、縁故採用はするな。能力ある者を引き立てよ。

一、財務を大事にして税金を安くせねばならない。

一、むやみな大がかりな土木工事、建設工事、戦争をするべきではない

など、現在にも通用する内容を持つてゐる。実際に太宗は、下臣の失礼な言葉に怒らず、その言葉を良く聞いたといつ。

七月十五日 実朝は夏の日射しが強くならないうちに寿福寺にお参りする。仏事のあと、栄西は將軍に法華經の事を始め、各教典の事をわかりやすく語つてくれた。それが一段落した後に、実朝は聞いた。

「栄西法師殿、鎌倉に騒乱と流血が止まないのは、いかなる理由なのでしょうか?」

「さようで」^{ござります}な、平安の世には、人を殺すと、その人の怨靈が、必ず祟ると思われておりました。それで平安期には政争に人を殺すと言ふことは慎まれたのでござります。藤原氏は朝廷内で最期の対抗勢力となつた菅原道真の力を削ぐ為に、太宰府の長官として九州に赴任させました。その後、朝議の時落雷を受けるやら、藤原氏に良からぬ事があつきました。殺しもせず左遷したという、比較的穩便な処置であるのに道真の怨靈の祟りだと考えられたのです。祟りへの恐れは三百年前のそのころは大変強かつたのです。それで地位争いに人を殺^{あや}めるなどは控えられたのでござります

「殺害多い鎌倉は祟りを恐れていないと言うことかな?」

「そうですね、武士も祟りを恐れていないわけではありませんが、武士は殺戮を仕事とするものなのです。朝廷貴族は祟りがあると思い、自らの手で貴人を殺めると言つことを避けました。しかしながら政敵は倒さねばならない、そこで、その役を、賤しい身分の衛士である武士にさせたわけでござります。武士は祟りを恐れては生きていけない身分のものであったのです。祟りすら恐れない。それが武士という者なのです」

「殺す事が仕事なのか?」

「そうです。恐れずに殺す。それが武士という者なのです」「殺す」と慣れてしまつた武士の創つた世が鎌倉というわけなのだね」

「中國では武士といふ者はおつまません。中國では才のあるものを試験で選んでだ官吏が世を動かすのだけれども。軍務をするものも、官吏から選ばれるのだけれどもすよ。軍機はその功績において重用されるのです」

「やうか。それならばあこ闘ひと並びとせらなくななるな」

「やうひです。鎌倉はやうを整へねばなりませんね」

「」

八月二十七日 実朝は疱瘡にかかつて以来、始めて鶴岡八幡宮に詣である。

九月十五日 頼家前將軍の若君、善哉公が出家した。法名は公暁こうぎといつ。

九月二十一日 公暁は登壇受戒（正式に僧となる為に儀を受ける事）の為に京都に出発した。実朝の猶子（養子とほとんど同義）となつたので、実朝は五騎の侍を供につけた。公暁は、この時十一才だ。

十月十三日 京都で歌人として名高い、鴨長明が飛鳥井雅経かものひょうあい あすかいまさつねの供として鎌倉に下ってきた。この日は亡き頼朝の命日という事なので、頼朝の墓である御所裏の法華堂にお参りする。読経の間、長明は京に上ってきた時の頼朝の雄姿を思い出して、懐旧の思いに包まれたという。読経が終わつた後、長明は次の和歌を堂の柱に筆で書きつける。

草も木もなびきし霜消えて むなしき苔を払う山風

（すべての人々がなびいた氏（頼朝）も消えて いまはただわびしい苔の苔を山風が撫でてゆくだけだ）

（）で、登場した、飛鳥井雅経あすかいまさつね（1170 1221）について、しばらく時を費やしたい。この人は、とおり一遍ではすまれない人であると思うからである。雅経は応徳二年（1086年）摂政となつた高名な歌人である藤原師実の玄孫ふじわらのもとね げんそん（やしゃご。孫の孫）で、子孫は歌道家として繁栄した。幼少期蹴鞠けまりの才を祖父に見いだされ特訓を受けて、蹴鞠飛鳥井流の祖となる。父・経は源義経との親交

があつたために安房に流されたが、十代だつた雅経は許された。そのあと鎌倉に下向し、広元の娘を妻とし、蹴鞠を好んだ將軍頼家に厚遇されるのだ。1197年後鳥羽院から声がかかり（後鳥羽院は蹴鞠と和歌と女遊びが、めっぽう好きな人なのである。それは定家の日記、名月記に詳しい）京都にもどつた。朝廷において和歌と蹴鞠の達人として名を成し、高い官職を得た。しばしば京都と鎌倉を往復し、実朝とも和歌を通じて親しくなつた。この人は、この時43才である。

長明が鎌倉に来て、しきりに將軍様に会いたいと言つてゐる事を伝え聞いた実朝は長明を御所に呼んだ。長明は長旅でやせ細つてゐる。五十七才と聞いていたが、ひどく古老に見える。実朝は贅沢な酒肴を用意させて、上座を降りて、わざわざ対座する。長明は失礼ではないかと思われるほど將軍を見つめた後、深々とお辞儀をし面をあげた。それからおもむろに声を絞り出した。

「鴨長明でござります。わざわざお招き頂き誠に恐縮致しております。当方はただの修業僧であります故、將軍様にお目通りできるとは思ひませんでした」

「まあ、そう固くならず、歌の師としてお酒など召し上がつておくつろぎ下さい。・・・あなた様のお噂はかねがね聞いておりますよ。和歌ばかりでなく管弦にも堪能だとも聞いています。それから組み立てになつてゐる方丈（一坪）の草庵の事も・・・」と言つて実朝は微笑んだ。長明は、鎌倉の將軍は、関東の武士の親王であるから、荒々しい容貌を想像していたのだが、気品のあるふくよかな顔つきは、京の殿上人をもしのいでいると思つた。

「左様でござりますか。私は、若い頃その管弦で大失敗をしてしまいましたのです。いきおい余つて皇室」の禁止の曲を浮かれて演奏してしまつたのです。それが為に上鴨神社の富司になり損ない、このような落剥の身とはなつたのでござります」

「その噂の管弦を、この場で聞かせて頂きたいくらいですね。」

「管弦は、私の足をひっぱるだけでござります。・・・といひで鎌倉殿、あなた様のお歌は京で大変な評判でござりますよ」

「私の歌ですか？」

「將軍様ご本人を眼のまえにして、大変失礼ではあります、將軍様のお歌は伸びやかで、なんと言いますか万葉人の歌つた原初の心がおありだと、私は思つております。私のように朝廷で歌会どころの召し人を長らく拝命いたしておりますと、近頃の貴族の歌には、肝心の伝えたい気持ちがありませんのに、歌を作つている様子が見えて来るのでござります。そんな私の歌もいつしか、それに染まつてしまつていてると思つてもあります。そのような技巧だけの歌を京の歌人達は良いとはやすから、そのようになつてしまつのです」

「そのように私のお褒めいただけて嬉しい気持ちがします。召し人とは朝廷の編纂する和歌集の和歌を選ぶ方の事ですね」

「さようでござります。朝廷には十人ほど、このお役を頂いてるものがおります」

「どうですか、鎌倉で和歌のお仕事をなさるつもりはありませんか」「私は、召し人という役を有り難いと思つております。私のような者が宮廷に出入りできるのも、この役あつての事なのでござります。有り難いお申し出ですが、私は老い先が短うござります。やはり、京で後生を過ごしたいと思うのです」

「実は、鎌倉でも和歌集を計画しているんですよ。私は長明殿に、その選者はいかがだらうと思つたのです」

「そうですか、本当に残念ですね。もう少し若かつたら、この話しほお受けできるのですが」

「つして鴨長明は鎌倉を去つて行つた。一年後長明は「方丈記」を書き上げた。この、長明の文章は我々の現代文の始まりとも言われる。漢字とかなが交ざつた文章で優れた隨想が書かれている。以下の文章が800年前の人の手になると思えるだらうか。

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にはあらず。よどみに浮かぶたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しうどどまりたるためしなし。世の中にある、人と栖すみかと、又かくの如し。

あしたに死し、ゆうべに生まるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。知らず、生まれ死ぬる人、いづかたより来たりて、いづかたへか去る。又知らず。かりのやどり、誰が為に心を悩まし、何によりてか眼をよろこばしむる。そのあるじとすみかと、無常をあらそひ去るさま、いはば朝顔の露にことならず。あるいは露おちて花のこれり。のこるといえども朝日に枯れぬ。或は花はしほみて、露なほ消えず。消えずといへども、ゆうべ待つことなし。

「方丈

記より

鳴長明の歌は新古今和歌集に十首採択されている。この歌集は、内藤朝親が元久二年（1205年）九月に出来上がったばかりの歌集を実朝のもとにもたらした事はすでに書いた。つまりそれは実朝十五才の時だつた。この和歌集の編纂の命は後鳥羽院が下し、藤原定家はじめ源通具、みなもとみちとも藤原有家らが、関わつた。次に記載の長明の歌のいくつかを記そう。

ながむれば 千々《ちぢぢ》 もの思つ 月にまた 我が身ひとつ
峰の松風

松島や 塩汲む海人の 秋の袖 月はもの思つ ならひのみかわ

枕とて いづれの草に 契るらん ゆくを限りの 野辺の夕暮れ

石川や 瀬見の小川の 清ければ 月も流れを 訪ねてぞすむ

ちなみに、頼朝と一晩、酒席を供にしたといつ西行の歌を併記してみる。（筆者はこの歌の方が好きである）、西行の歌は新古今和歌集に九十四首取り上げられている。

心なき 身にも哀れは 知られけり 鳴立沢の 秋の夕暮れ
しきたつさわ

おぼつかな 秋はいかなる ゆえのあれば すずろにもののか
なしかるらん

横雲の 風にわかれる しのめに 山飛び越ゆる 初雁の声

小倉山 麓の里に 木葉散れば 梢に晴るる 月を見るかな
風になびく 富士の煙の 空に消えて 行方も知らぬ 我が思ひ
かな

以上は新古今和歌集記載の歌であるが、その他の歌集の歌には次
のようないい歌もある。

春風の 花を散らすと 見る夢は ためても胸の もわぐなりける
春ふかみ 枝もうじかで ちる花は 風のとがには あらぬなる
しがほにも 鳴く蛙かな

ま薔おふる（薔の草が生える） 山の田に 水をまかすれば 嬉
しがほにも 鳴く蛙かな
山おろじて 乱れて花の 散りけるを 芦はなれたる 瀧とみた
れば

わづかなる 庭の小草の 白露を 求めて宿る 秋の夜の月

きづきつす 夜寒に秋の なるままで 弱るか声の 遠ざかり行く

ねがはくは 花の下にて 春死なん そのきさひざの 望月のこゝ
ひ

さて長明の歌と西行の歌に、あなたはどういひて金点を上げるだ
うか？

十一月二十日 七月三日に始めた、貞觀政要の講義はこの日終わった。実朝は四ヶ月に渡つてそれを精読したわけである。

十一月二十日 和田義盛はかねてから上総国同を望んでいたが、執念を絶つてしまつた。一年半前に出していた嘆願書を返して貰おうと子の四郎を出して広元の邸に向かわせた。

建暦二年（1212年） 実朝 二十一才

一月一十六日 実朝は第一回目の「所詣のために精進始めをおこなつた。

一月一日 夜が白む頃、実朝は和田朝盛に香り高く咲いた梅の一枝を塙谷朝業に向けて、次の自作の歌を添えて持たせた。

我が宿の 梅の初花 咲きにけり 待つ鶯は などか来鳴かぬ

「送り手を名乗らず、さあとかとぼけて置いてきてくれるかな」と、実朝は微笑みながら送つた。朝盛は言葉に従つて朝業邸に走り手渡すと戻つてきた。朝業は追つかけて次の和歌を持たせて寄こした。

うれしさも にほひもすでに あまりけり わかためにおれる

梅の初花

「朝業はつまいまいな」実朝は感心する。朝盛はまだそこにいて、その歌を口に出して詠んで

「左様ですね、歌の内容と言い、調べと言い、良いですね」と言つ

た。

一月三日 晴 朝、実朝一回目の一所詣でに実朝、政子、義時、時房、泰時が出かける。鎌倉の留守は広元が守る。これだけの主要な人々が鎌倉を出るのだから、その随兵は二百騎を越えた。このごろ、街道の宿も整つて来たために大勢の旅が可能となつたのだ。尼御台所の参加は女性では初めての事で、御家人を驚かせた。ゆつくり進む騎馬であるが政子はすでに五十六才。「お達者でおられる」御家人は口々に話題とした。

このように政子を一所詣に駆り立ててているものは実朝と室の間に子供が出来ないという気持ちである。

実朝はどうも、他の女房に興味がないようだ。何とかうまく行く方法はないものだらうかと思つている

まさか実朝室の頭越しに妾を持てとは言えない。かつて政子は夫の頼朝の妾の家を焼いてしまつた事が
あるくらいだから、その倫理は実朝にも伝わっていた。室との間に子供が何故できぬいか、それはたぶんひどかった疱瘡と関係があると実朝は思つてゐる。

一月八日 一所詣より鎌倉に帰着した。

三月九日 皆で揃つて三浦三崎の御所に行く。実朝、実朝室、政子、義時、解き房、広元、源親広（広元の子）が一緒である。うらかな春の、波も静かな陽気である。半島を船で南下し半島の先端の三崎にある別荘まで数刻かかる。鶴岡八幡の別当（長官）が芸をする稚児などを連れてきている。

船上で舞楽にあわせた舞があつた。実朝と室は寄り添つて座つている。昼前の青い海上で舞う稚児達は風情のあるものであった。「衣装といい、舞といい華やかで、可愛いですね」室は思わず実朝に語りかけた。実朝はそうだねと微笑みながらうなずく。

五月七日 義時が突然、御所に呼ばれた。実朝は強い口調で言った。「朝時殿（義時正妻の長男、20才。比企氏出身の正妻宮の前は、比企氏が滅ぼされた後、義時と離婚する。朝時を残して京都に行き再婚するが三年後死去したという。宮の前は大変美しい人で義時が追いかけたが、それを受け入れなかつたが頼朝が中に入つて、義時に大事にするという約束をさせ結婚して正妻となつた）が去年京都からやつて来た佐渡の守親康の娘で、私の室の官女である者に何度も艶文を送つた末、強引に連れ出してしまつたという事です。官女といえども、將軍である私の家の奥の女です。その者が私の妻でないにしても、私は妻を奪られた男のようなものではありませんか。私は鎌倉中の笑いものになるではありませんか。朝時どにそれ相応の処分をお願いします」

義時は、朝時を気に入つて、次代の北条を引き継ぐ者と考えていたが、その気持ちを実朝に阻まれてしまつた。朝時はこの日以来、北条氏筆頭（後に執権と呼ばれるようになる）となるべき立場を失う事となつた。実朝が、このように怒つた裏には、その官女に対す

るひそかな想いが実朝にあつたからである。実朝といえども石部金吉ではない、若い男とはそのような者なのだ。少し大きな領主でも妻を何人も抱えていた時代にあつては実朝の気持ちは非倫理的なものではなかつた。

実朝の命に義時は従わざるを得なかつた。義時の気持ちは怒りで溢れた。実朝が、青年となつて、このような事を言い出す前には、物事は義時の思うがままであつたのに、この頃は実朝が邪魔であると思う事が多くなつた。

六月二十日 実朝は寿福寺に行つた。栄西と談話のあと、栄西から実朝に宝物の仏舍利（釈迦の遺骨）三粒が贈られた。

六月二十四日 実朝は和田義盛の邸に行く。丁重なもてなしがあった。義盛は今、64才である。

「御所様、戦乱のない世は良い世でございますな。おのれは数々の戦場をぐぐり抜けて生きてまいりましたが、それを誇る気持ちはありません。多くの武将や百姓の最期を見てまいりました。ご存じの通り我らは三浦から安房の和田に別れた家であります。旗揚げ以前は、和田はのどかな村でしたが、旗揚げの頃より近在で亡くなつた者が多くなりました。それを見ると何とも言えない気持ちになります」

「そうだね。まだまだ戦は続いているが、だいぶ穏やかにはなつたようだ。もつ、これ以上血を見るのはたくさんと、私も思つているのですよ」

「そうでござりますな。・・・とこりで先日、上総国司となりたいという件、広元殿にお願いしておりましたが、一向に御所に届かないようなので、引っ込めてまいりました」

「あれは、義時殿と広元殿が強硬に反対しているのです朝廷の司である国司をいまさらと言つております。それで私もこれ以上動けないのですよ。和田殿であるなら国司でも良いかと私は思つてゐるのですがね。近頃は義時殿と何かと意見が異なるのですよ」

七月一日 先月御所の政所に宿直の侍同士が乱闘をおこした。死亡が二名、負傷が二名だった。実朝はこの事で不吉であると、血で汚れた政所を建て直すべきだと言つた。義時と広元が、主要な者達に意見を聞いて將軍に次のように奏上した。「武士たる者が血で汚れたからと言って大げさに言つべきではありません。血を流すのは

武士の本分でありますから、立て直しなどといふのは無駄な事です
という意見でございました

しかし実朝はその上申を無視して、千葉成胤に建て替えをすすめ
させた。それを聞いて「つまらぬ費用だ」と義時は吐き捨てるよ
うに言った。

八月十八日 伊賀朝光（いがともみつ）（下級官人の出身。藤原秀郷の流れを汲む
関東の豪族。1190年頼朝の上洛に供なう。娘が義時の妻、伊賀
の方。推定60才）と義盛を御所の北面の猛者が控えている場所に
居るようにと時房を通じて伝えられた。この一人はすでに猛者では
ないが將軍が昔の話しを聞きたいと特に選ばれたのだ。

八月十九日 鷹狩りを禁止するよう、將軍は各地の守護、地頭に伝えた。ただし信濃の國の諏訪大明神の鷹は許された。小鳥たちが遊びの具にされるのを哀れんで実朝が決めた事だが、義時をはじめ、北条家の人々は顔をしかめて「小鳥など保護して何になる」、「軟弱な、それで戦が戦えるのか」と悪口を言つた。

九月一日 源頼^{みなもとよりとき}時は京都で能士として評判が高かつた。実朝は、將軍の前駆を務める者が少ないと、頼時は鎌倉に呼び寄せた。頼時は藤原定家と親しい者で、定家の最近の活動を伝えるとともに、多くの和歌の書を持ってきた。義時はこの話を聞いて、この頃の実朝のやり方が面白くない。いざれどうにかせねばなるまいと思つ。深く考えると実朝は、どうも実朝の勢力を作つてているように見えてならない。そもそも前駆など足りぬわけではないのに、あらたに京から人を連れてくる必要などないのである。

十一月八日 御所で絵合わせの事があつた。絵合わせとは絵比べの事である。男女を老組と若組に分け、勝負が行われる。八月の頃に、開催の声がかかつたので、それぞれ十分な用意をした。ある者は京都から持つてこさせ、ある者は絵師に絵巻を描かせたりした。広元の持参した絵巻は小野小町の一生の盛衰を描いたものである。結城朝光が持つて来たものは和朝の四大師の伝記を描いたものであつた。実朝は何巻もある中で、この二巻が気に入った。それで今日は老組の勝ちと決定した。

十一月十四日 八日の絵合わせで負けた若組が賞品を持つてきた。連れてきた遊女に子供の格好をさせている。豪華に多色に染めた水干に紅葉、菊の花などを飾り立て華やかである。それが流行の

踊りである延年舞えんねんまいなどを披露した。

建暦二年（1213年）実朝二十一才

一月一日 幕府で和歌会がある。題は梅、花、すべて春に限る。義時、泰時、伊賀光宗（義時後妻の伊賀の方の兄）和田朝盛等が集まる。実朝の筆頭女房である大式局だいじゆくのつぽねも参加している。

一月十五日 晴れ。頼朝旗揚げに功績のあつた千葉氏の当主、千葉成胤ちばなりたねが法師一人を生け捕り、義時に渡した。法師は謀反むほんを企てている者の使いだという。謀反に協力するとの承諾を得るために若宮大路の成胤の鎌倉屋敷にやつて来たのだ。法師は信濃の國の者で、成胤はこれは容易ならざる事だと法師を捕らえたのである。法師の身柄は一階堂行村に預けられ、真偽を聴聞するように命じられた。

一月十六日 捕らえられた法師、安念の白状で以下の謀反の者が各地で捕らえられた。

信濃の國の住人市村小次郎近村、籠山次郎、宿屋重氏、上田原平三の父子三人、園田成朝、狩野小太郎、和田四郎義直、和田六郎義重、渋河兼守、和田平太胤長、磯野小三郎だ。さらに、その以下の者も捕らえられた。信濃の國の保科次郎、栗沢太郎父子、青葉四郎、越後の國の木曾滝口父子、下総の國の八田知基、和田奥田太と四郎、伊勢国いせの金太郎、平広常（旗揚げの時からの従者、梶原景時の讒訴により滅ぼされる）の甥である白井十郎、狩野又太郎らである。その他の首謀者も合わせると130人、仲間を合わせると200人になつた。幕府はそれらの者の身柄を鎌倉に届けるよう命じた。

調べによると故頼家將軍の若君、栄実（1201～1214）を將軍にしようとした信濃國の泉小次郎親平が一昨年から上記の者に密かに謀反を呼びかけていたことが判明した。

一月十八日 園田成朝が預けられていた家から逃亡してしまつた。三月一日 反逆の首謀者である泉親平が鎌倉の雪の下の違橋たがえばしのあたりに隠れているとの風聞があつた。そこで工藤十郎を遣わした

ところ、親平はすぐに兵を出して合戦となつた。それで工藤十郎と郎党数人が殺害されてしまった。そのあと、逃亡を防ごうと御家人が辻々を固めたが、行方は不明となつた。

三月八日 鎌倉に謀反ありという話しが伝わると、諸国の御家人が続々と郎党を引き連れて甲冑姿で鎌倉にやつて來た。和田義盛は謀反の者に子息と孫などが含まれていることに驚いて、領地の上総「伊北庄（勝浦あたり）から急いで上がって來た。そしてすぐに実朝将軍と対面した。義盛は和田氏の長年の功労を訴え、子息の処分を取りやめるよう訴えた。実朝は、義盛の切々とした訴えを聞いて、心うたれ独断で罪を許そつと言つた。義盛はひどく喜んで笑顔で退出したといつ。

三月九日 晴 突然、黄土色の水干に麻に似た葛袴を着けた堂々の姿で和田義盛が一族九十八人を引き連れて、御所にやつて來た。大蔵御所で一番広い、池を造作した南庭に、上等の着衣をつけた九十八人の猛者が美麗な刀を横に置いて座する眺めは壯觀なものであつた。義時はこの席には顔を出さなかつたが、その様子は御簾の影で良く見て取れた。実朝は義時の差配であらかじめ出席を止められた。義時にはある考えがあつたのである。今日までは、義盛の振るまいに眼をつぶつていたが、今日の異常な和田氏の示威を見て、これ以上はのさばらせてはおけないと強く決意させるものがあつた。それは考えと言つより激しく鬪つてきた者だけにわき起つてくる感というものであつた。こやつは放つておけば、必ず北条の強烈な敵となる!といつた恐れにも似た感情である。今日は義盛の鼻をへし折つてやるつもりだ。そうして謀反をおこさせ族滅させてやるのだ。近頃義盛は將軍に持ち上げられて、いい氣になつてゐる。今日は義盛にたつぱり赤恥をかかせてやるのだ。

和田一族の前に幕府代表として出てきたのは中原広元であつた。

和田義盛は立ち上がり、野太いしわがれ声で言つ。

「今度の、謀反という疑いは根拠のないものでござります。自白する者が和田の者の名をあげておりますが、本人達に確かめましたが、そのような企てがあることを耳にすることも初めてという事であります。眞偽を確かめるため本人の郎党などにも尋ねて見ましたが、まさに演技ではなく、謀反を起こすなどと言つことは聞いたことがないと首を傾げておりました。又、一族の者で、今度嫌疑がかかっております者から、そのような謀反の企てに声がかかつた者は一人もおりません。されば、どうか、一人許されず嫌疑がかかつたた和田胤長たねながを無罪としてお許し下さりたいと、御所にやつてまいりました」この言葉を広廊下に座して聞いていた広元は言つ。「御所の調

べでは、和田胤長謀反共謀の事は、嫌疑が確定している者達が日々に申している事だ。火のないところ煙はたつまい。まして胤長は共犯どころか首謀者であるとの事も調べで上がって来ている。よって和田胤長は無罪とすることは出来ない。これは幕府一同の固い申し合わせだ」

「中原氏、野党の様な者の証言をもつてして和田胤長を罪に落とし入れようとなされるのか、それは非道というものではありませぬか」「今度謀反の首謀者としばしば会合を持ったと言うことも伝わっておつては和田胤長を無罪とする事はできませんのだ」広元はそう言つて、控えていた侍に目で合図を送つた。

和田胤長の身を預かっていた、金窪行親かなくぼゆきちかと安東忠家が後ろ手に縛られた胤長を引き連れて木戸から現れた。オウという怒りのこもつたどよめきが一同の者からおこつた。武士という者にたいしてあまりに失礼な仕打ちではないか。これ見よがしに、金窪らは胤長を、廊下の下に立つ広元の横に立つてゐる一階堂村と下司一人に手渡した。（行村は監獄の長であるのだ）

この、恥を与えようという義時の意図が見え透いた、あまりにも演劇めいたやり口に和田義盛は猛烈に怒つた。「おのれ、我らにこのような恥をあたえおつて、義時、この近くにあるであらう、許しては置かぬぞ！者どもかえるぞ！」と吠えるように大声を上げてぞやどやと帰つて行つた。

義時は御簾の影で表情を変えない。

三月十日 すっかり暗くなつてから頼朝公の墓である法華堂の後ろの山に光る物があつた。それが遠近を照らして消えずにいたといふ。

三月十七日 和田胤長は陸奥の国、岩瀬郡（現、福島県）に流された。

三月十九日 御所で歌会が開かれた。暗くなつて、御所に近い義時邸の周りに、和田氏の姻戚である横山時兼の甲冑の兵が五十人も集まつてゐるというので、歌会は途中で中止となつた。義時の後妻の父、伊賀朝光が「もはや、騒乱寸前でござります。このような時、歌会はさしさわりがります。散会といたすべきです」と実朝に言つたのだ。

三月二十一日 胤長の女子六才が、父の不在の為泣きやまず病氣になつてしまつた。和田朝盛が胤長に良く似てゐるので、お父様が戻られましたよといつて、女子の前に導かれた。女子は少し頭をもたげ一瞬朝盛を見つめたあと、目を閉じた。この日女子は火葬された。その母は自害し果てた。母は一十七才であつた言ひ。

四月一日 一族の資産はよほどの事がなければ取り上げない慣例にしたがつて、義盛の管理下に入つていて大蔵御所の東となりの胤長邸を、留守居を追い出した上、義時が取り上げてしまつた。

和田一族は御所への出仕を止めていたが、胤長邸の所有をそのまとされたので、いくらか慰めとしていた。この度重なる侮辱は和田一族の怒りを煽つた。

四月十五日 和田朝盛は実朝と懇親を重ねていたが異変が起きた。祖父の義盛や父の常盛を始め、その他の和田勢が参上を止めてしまったので、朝盛も朝から晩までの実朝の近侍を投げ打つて、引きこもってしまった。朝盛は、その閑の間、法然の弟子と称する淨遍僧^{じょうへんそう}都^{うづ}のもとに行き、生死の事を学び読経念佛のつとめを怠らなかつたといつ。

朝盛は御所に出てきた。実朝が言つ。「朝盛元氣でいたか？顔を出さないので心配していたのだ。何をしていたのだ？」

「こ^の頃のこと^で、なにか侍^というものが嫌になりまして、仏の道の事など修業^{しゆぎょう}しておりました。それで、いよいよ出家^{しゆげ}することにしました。こ^の恩になつた御所にこ^の挨拶^{あいさつ}がしたくてやつてまいりました」「和田にはひどいことが起きてるね。義時は和田一族を敵のようと思つてゐるようだ。私は和田を助けてやりたいが私の力では何ともできないのだよ・・・。そうだ、今、歌会をやつてゐるところなので、一緒に楽しもう」

別れの時、実朝は日頃の疑いの気持ちにけりがついたので喜び、何力所かの地頭職を与えると、その場で紙に書いて朝盛に渡した。朝盛は今や明日を知れぬ身である。それが本当に受け取れるとは思わなかつたが、実朝の優しい気持ちが嬉しくて目に涙が溢れた。

四月十六日 朝盛が出家京都に向けて出発した事を朝盛の郎党が、本邸に走り帰り、朝盛の父や祖父に告げた。驚いて朝盛の寝室を探すと一通の書状が置かれてあつた。それには「反逆があると言う事での今度の出来事はきっとこのままではすみません。しかしながら私には一族に従つて主君に向かつて弓を引くことはできません。また主君の下に参じて、父祖に敵対することもできません。この苦しみから逃れるためにはただ出家しかありません」と書いてあつた。祖父の義盛は大変怒り「すでに髪を切り僧の身なりであつたとしても、追いかけて捕らえ連れて帰るよつに」と和田四郎義直に指示した。従つて四郎義直と郎党の一団は街道に蹄を轟かせ、京に向走り去つた。

四月十七日 戦乱ありとの不穏な空気を感じて、平安を祈つて、実朝は御所において八万四千基の卒塔婆を供養する。卒塔婆は釈迦の墓である五重塔（仏舎利）を模したものである。卒塔婆は祈願に御利益があるといつ。单なる木片とはいえ、それが八万四千本である。実朝の平穏への願いは切実な事であることを示している。

実朝は朝盛が出家して京都に向かつた事をすでに知つた。それをひどく哀れんだ。朝盛の父の常盛や祖父の義盛に見舞いの使者を出した。

四月十八日 和田四郎義直が朝盛を伴つて駿河の国から帰つてきた。義盛は朝盛に対面し憤怒を忘れた。朝盛は将軍からお召しがあつて僧装束の黒衣のまま、御所に向かつた。

四月二十四日 義盛が長年帰依していた僧を追放した。世間の噂では、それは表向きて、実は伊勢神宮に戦勝の祈願をさせたのだと

いう事である。それで明日にも、北条と和田の戦いがあるのではと騒然としている。

四月二十七日 実朝の近侍の一人、宮内公氏が実朝将軍の使者として義盛邸に向かつた。和田氏に謀反の動きがあると伝わっているのを確かめて来てほしいということである。

公氏は邸の控えの間に入り義盛を待つた。義盛は寝殿からやつて來た。公氏が訪問の趣旨を述べると、義盛は言つた。「頼朝公の時は随分と奉公に励みました。そのため多くの者から抜擢されて賞されたことは身にすぎるほどありました。しかしながら、頼朝公が亡くなられて一十年も経ずに、まつたく没落の憂き目にあつております。かつての功績に報いて頂こうと望みを幕府にあげております。だが、その願いは叶えられず、今に至つております。謀反などは考えもせず、ただ耐えているばかりなのです」

そのような話しの最中にも、古郡保忠、朝夷名義秀らの猛将が甲冑などを整えている様子が見えた。公氏は御所にもどつて、「謀反の気持ちはないと申しておりましたが、すでに、兵具の用意までしておりました」と、実朝に伝えた。

四月二十九日 北条義時は息子の北条朝時を急遽、鎌倉に呼んだ。朝時は実朝室の女官を誘拐したと、古里に蟄居を命じられていたのである。

五月一日 筑後左衛門の朝重は和田義盛の近隣である。邸から義盛の館に軍兵が集まつていて、身繕いし、物音を立てているのを見聞きできた。用心のため甲冑をつけさせた郎党を広元のところへ使者として出して、事情を伝えさせた。その折り、広元邸には客が来ていて酒も入つていたが、広元は一人席を立つて急いで御所に参上した。広元は実朝に言った。

「義盛が軍兵をそろえて謀反に立ち上がる気配です。御所も騒乱の覚悟をなさつてください」

「やはり、争乱になつてしまふのか・・・残念なことだ」

和田氏の本家の三浦義村、胤義は当初、義盛の謀反に荷担すると言つていたが、次のようなことでそれを反故にしてしまつた。

兄弟が議論して言つには「三浦一族は祖の三浦為継が源義朝（頼朝、義経の父）に付いて奥州を征伐して以来、篤く恩恵を賜るものである。今、親戚の薦めによつて、累代の主君の源氏を射るならば、どんなに天罰が下るであろうか。はやく、行いの間違ひを正して密約を伝えるべきであります」と言つことだつた。

それで筆頭の三浦義村は義時邸に行つて事情を暴露した。囲碁会をしていた義時は驚いた風もなく「ついに立つか」そうぼつつりと言つと、囲碁の勝負を見極めるため、静かに囲碁の目を数え始めた。そしてゆるりと席を立つた。

義時は別室で折鳥帽子を正式の立鳥帽子（垂直に立つた鳥帽子）に改め水干に着替えたうえ御所に向かつた。

御所への攻撃は今朝の事ではあるまいと思っていたので、御所の警備は緩かった。しかし広元と義時によつてもたらされた報によつて、尼御台所（政子）と御台所（実朝室）は北御門から御所を出て鶴岡八幡別当の定暁の坊（居宅）に移つた

申の刻（午後四時を中心とした三時～五時頃）和田義盛が郎党を率いて御所を襲つてきた。和田勢の武力は、義盛長男の和田常盛、その子朝盛（出家したので短髪である）、義盛三男義秀、義盛四男義直、義盛五男義重、義盛六男義信、義盛七男。この他に、土屋義清、古郷保忠、渋谷高重、中山重政と、その長男の行重、土肥先次郎、岡崎実忠（石橋山の戦いで戦死した佐奈田与一の子である）梶原朝景（滅ぼされた景時の弟？）、その次男景衝、三男景盛、七男景氏、大庭金景、深沢景家、大方正政直とその長男の遠政、塩谷惟守などなどと、その郎党を合わせ百五十人である。

義盛は百五十の軍勢を三つに分けた。幕府の正門である南御門に五十、小町上の義時の邸宅の西門と北門に各五十である。

義時は御所に行つてゐたが、留守を守つてゐる武兵たちは門の板を切つて、その隙間から矢を射かけて交戦した。しかしほとんどが討ち取られてしまった。

中原広元邸には、まだ酒宴の客が残つてゐた。その客が帰りきらないときに軍勢が押し寄せてきた。どこのものだか解らないが、矢を射て抗戦した。義盛邸を滅ぼした100名の軍勢の主力は御所に向かつた。その軍勢は御所南御門に近い南西の角に現れ御家人と対峙し、もつれあうような戦闘をくり返した。

その末に日が沈む頃、和田軍はついに御所の四面を囲つてしまつた。北条泰時、朝時、上総義氏が防戦に活躍するが、強兵で聞こえた、和田三郎義秀が南御門から南庭に軍馬の音もけたたましく乱入し、立てこもる後家人を襲撃した。和田勢は火の付いた矢を御所の屋根にさかんに飛ばしたから、御所内の館は「ゴウゴウ」と音を立てて燃え上がつた。すでに南庭あたりが修羅場となつたので、実朝將軍を始め義時、広元は御所の北側の頼朝公の墓所である法華堂に避難した。

和田勢は義秀を先頭に猛攻撃を繰り返し、御所側の五十嵐小豊次、葛貫盛重、新野景直、礼羽蓮乗が次々に殺害された。高井重盛は義盛の弟の和田義茂の子であるが、和田義秀と鬪つた。

互いに弓を捨て、馬を並べて、つかみ合いとなり供に落馬して組み討ちとなつた。もみ合つてゐる内に遂に重盛は討ち取られてしまつた。しかし重盛は屈強な義秀を落馬させる事ができただけでなく、和田の一族でありながら、一人御所側として戦い落命したから御家人は立派なものだと感嘆した。

義秀が重盛を討ち取つて、馬に戾らぬ前に北条朝時が大刀をもつ

て挑んだ。双方互角の腕ながら、朝時は傷つけられてしまった。朝時が守られながら去つたあと、馬に戻つた義秀はやはり馬に乗つた足利義氏（この時二十代始め。室町幕府初代將軍足利尊氏の祖、母は北条時政の娘、時子。役職には就かなかつたが姻戚として北条義時、泰時を良く補佐した。終世幕府で重きをなした）と橋の上で出合つた。

和田義秀は追いかけて足利義氏の鎧の袖を取つた。義氏は袖を取られたまま、馬に鞭を打つて走らせた。袖は切れてしまつたが、馬も倒れず、乗り手も落とされなかつた。さすがの義秀も、息が切れたようで、そこに留まつた。気を取り直して、再び義氏を追いかけようとしたとき、藤原朝季（義氏の姻戚、従者）がその間に入り行く手を阻んだが、たちまち義秀の手にかかつて殺害されてしまつた。しかし、これによつて義氏は逃れる事ができた。

また武田信光（のぶみつ武田信玄の祖）は若宮大路で義秀に出くわした。たがいに目をあわせていざ鬪わんと言つときに、信光の息子の信忠が割つて入つた。これを期に義秀はそこを通りすぎた。

やがて日暮れとなつたが、戦いはまだ続いていた。明け方となつて和田義盛はようやく力つき屋もなくなつて、若宮大路を直に抜けた所に広がる由比ヶ浜に馬を走らせた。

五月三日 小雨 戦闘に疲れた和田勢であつたが、しばらくの由比ヶ浜での休息は志氣を盛り返すのには十分だつた。勢力は、いまだ三千名を数えた。

武士という者は、このような勝敗が不明な天下分け目の時は、良い意味での「風見鳥」であつた。頼朝旗揚げの時もそうであつたし、ずっと後世の「関ヶ原の戦い」の時もそうであつた。どちら側につくかで一族の運命がわかれる。当然、情勢を見ることはきわめて敏であつた。この和田の乱の時も、「風見鶲」の見物御家人は少なくなかつた。辰の刻（午前八時頃）には京に繋がる稻村ヶ崎のあたりと関東に繋がる北方の武藏大路あたりには事の成り行きを見守つている曾我、中村、二宮、河村の兵達が非常に多数群がついていた。

そのような情勢だったので、義時と広元が連署（共同署名）した上に、実朝将軍の花押（美麗な印）が押されている次の書を御家人

各位に下した。それはいかのよつなひらがな書きの文書であった。

きんへのものに、このよしをふれて、よびあつめなさい。わだの
さえもん、つちやのひょうえ、よこやまのものどもは、むほんをお
こして、きみをなきものにしようといつても、きみにとくべつなこ
とはなかつた。てきのちりぢりになつてゐるのを、いそいでうちと
つて、やつてきなさい 五月三日 巳の刻（午前十時頃）

大膳太

夫（広元） 相模守（義時）

何々（御家人の名前） 殿

実朝將軍花押印

幕府は、この文書を発送するとともに、大軍を由比ヶ浜に向けて
発進し、鬪つた。

和田軍は再び御所を襲おうとするが、若宮大路は北条の主力が占
拠し、他の道は御家人の主力が陣を張つて守つていた。それで戦鬪
は若宮大路の由比ヶ浜よりで繰り広げられた。

西の刻（午後六時ごろ）ついに義盛が頼りとする息子の和田四郎
義直（三十七才）が討ち取られてしまった。和田義盛、時に六十七
才は「長年慈しみ義直の出世を願つてきた。もはや、合戦はむなし
い」と声を上げて泣き悲しみ、敵陣に捨て身で襲いかかって迷走し、
広元の郎党に討ち取られてしまつた。

北条義時は金窪行親と安東忠家に死骸を検めさせた。仮屋を由比ヶ浜の波打ち際に作り、義盛以下の首を納めた。

義盛を誅殺したと言つても謀反の党はちりぢりになり、未だにその様子が分からぬ。畿内、京には義盛の親戚も多い、すみやかに捜査を行わなければ、後の乱れを絶つのは難しい。次の書は、各御家人に出した書の一例である。

和田義盛、土屋義清、横山らは全て相模のもの、謀反を起こすと言つても、御所（実朝）には格別な事はなかつた。しかしながら、謀反の者には親類が多い上、戦いのあと、ちりぢりになつて消えた。海から西海へも落ちていつたであらう。藤原有範と佐々木広嗣はおのの、そなた様の御家人などに、この文の内容を周知させて、用意を調べ討ち取つて、参上せよ。

五月三日 酉の刻（午後六時頃）
とり

大膳太夫（広元）

相模の守（義時）

佐々木広嗣 殿

実朝將軍 花押（印）

五月四日 小雨が降つてゐる。古郡兄弟（保忠・経忠）は甲斐の国で自殺し、和田常盛（四十二才）と横山時兼（六十一才）は甲斐の国で自殺した。その両人の首が今日、鎌倉に届いた。

江の島に對岸の片瀬川の川辺に晒された首は一百三十四と言ひ。辰の刻（午前八時頃）実朝將軍は法華堂から尼御台所（政子）の邸

に移つた。

そのあと、戦で荒れた御所の西御門にしみかどのあたりに幕を引いて、一日間の戦で負傷した兵士を集めて検分が行われた。二階堂行村が奉行して（取り仕切り）金窪行親と安東忠家が補佐した。負傷した者は百八十八人だという。北条朝時は庭を通つて参上したが、歩けないので北条泰時タケトシが助けた。朝時の傷は一日に和田義秀と闘つて負つた傷である。

今度の事で誰が功労者であるか、先陣を誰が切つたか、波多野忠綱と三浦義村が、激しく言い合つた。

実朝は義時の差配するこの席の横にいて、武士の世界のあさましさを身にしみて感じたが無言であつた。

五月五日 晴れ 和田義盛、横山時兼など、謀反の者達の守護職と所領が没収された。それらは勳功のあつた者に与えられた。北条義時と中原広元が事にあつた。和田義盛が務めていた侍所別当は義時が引き継ぐことになった。

五月六日 晴れ 岡崎実忠父子三人が誅殺された。申の刻（午後四時頃）実朝將軍は中原広元の邸に入る。御所^{（いのき）}が争乱で焼失したためである。実朝室も輿^{（いし）}で避難していた勝長寿院（頼朝が父、義朝を弔うために建てた豪壮な寺、今は住宅地となつて現存していない）から、広元邸に入った。政子は輿で御所内で焼け残つて現存している政子邸に戻つた。

義時は義時の手足となつて動いている金窪行親を侍所の所司（責任者）に任命した。

五月十七日 関東争乱の噂が飛ぶだけで、鎌倉から正式の文書が伝わらなかつた。今日、文書が京都に届いた。次のような内容である。

在京の御家人は下向してはならない。上皇の御所を守ることに専心すべきである。謀反の者達が西海に回つたという風聞があるので、追討の準備をせよ。

中原広元 北条義

時 実朝花押（印）

六月一日 晴れて暑い 寿福寺の長老、栄西が京都から帰つてきた。栄西は日頃、大師の尊号を欲しがつて後鳥羽院に働きかけをしていたが、生存中に大師と呼ばれた前例はないので許されなかつた。それで先月四日、権の律師を権の僧正に格上げすることが許され

た。

六月二十六日 義時、時房、広元が集まる。御所再建の事で協議がおこなわれた。

六月二十九日 晴 戌の刻（午後九時頃）光る物体がある。しばらくの間、北の空を照らして徐々に南方に移つた。丘が照らされて見えるほどである。

八月三日 晴 昨日の強風弱まる 申の刻（午後四時頃）御所の上棟むねあげが行われる。義時以下人々が多く集まる。鎌倉市中が理由もなく騒然として、御家人が馬で駆け回つている。義時は金窪行親に命じて鎮めさせる。

八月十七日 藤原定家は、先日、実朝が尋ねていた書（不詳）を京より送つて寄こした。

八月十八日 晴 子の刻（午後十一時頃）実朝は広元邸の池のある満月に照らされた庭を眺めている。人々は寝入り、灯火も消えて月の光のみが風情ある庭を照らしている。虫がこの頃なきだした。弱い虫の音が秋をおもわせる。

自作の歌を数首かきとめるほど月の光は明るい。書き留めた歌を声を立てずに独吟してみる。丑の刻に入る頃（午前十一時頃）若い女がひとり現れ、庭を駆け抜けた。実朝は静かに「どなたかな」と声をかけるが、透けた青い影に見えるその女は、その声がきこえなかつたように去つていった。

八月二十日 快晴 風静まる 新御所が完成して、実朝は広元邸から新御所に戻つた。京都に頼んであつた御所車がまだ届いていなかつたので、酉の刻（午後八時頃）輿を使って御所に入つた。

総勢百人を越す、御家人、従者達の松明をともした一隊を鎌倉の庶民は道端に出てきて眺めている。争乱以来久々の平穏な華麗な出来事である。

新御所の寝殿から眺める月に照らされた庭を見ながら、実朝は瞑想に入っている。和田義盛の事を想っていた。義盛が息子の討ち死にを知つて狂乱した泣いてから、敵のただ中に襲いかかり、首を取られたという話しを思い出して悲痛な感情に包まれた。和田一族の滅亡は全て義時の計つた事だ、実朝の心を怒りが支配する。このような気持ちを実朝は歌にした。

まな板といふもの上に雁をあらぬ様にして置きたるを見て

あわれなり 雲井のよそに行く雁も かかる姿になりぬと思えば

(哀れなことではないか 雲高く飛ぶ雄々しい雁も 今はまな板に横たわって 料理されるのをまづばかりの惨めな存在となつている)

また、実朝の心のあつよしが表出されるよつな次の歌も作つた。

うば玉のやみのくらきに 雨雲の八重ぐも隠れ 雁ぞ鳴くなる

義時が祟りを恐れて寺社に財を注ぐのを見て、つぎのよつな皮肉な歌も作つた。

神といふ仏と言つも 世の中の人の心の ほかのものかは

（神様仏様と言つても 人の優しい心に宿るものにほかならないの
だよ。恐ろしい心には神、仏は住むまい）

北条義時、この人殺しは実朝と話すとき顔だけ笑つて目が睨み付
けている。この有り様を実朝は嫌う。

九月十日 実朝が新造された御所に戻つてから、ひと月経つた。早朝実朝は寢殿の廊下から、しつとり露を帯びた庭の草々を眺めている。コオロギがか細い声で鳴いている。

「和田朝盛は和田合戦のあと行方が知れない。死んだようではないと言う。どこで何をしているのだろう。達者だと良いのだが・・・」と、呟く。

九月十九日 日光山の別当（主）が未の刻（午後二時頃）、使者を寄こして伝えて来た。故畠山重忠の末子、僧の重慶が日光山の麓に隠れ住んで、浪人を集めて、祈祷三昧である。これは謀反の意図があつての事だ。という内容だ。

伝え聞いた実朝は、その時身辺にいた長沼宗政（頼朝旗揚げの時から参加している、小山氏五男、実朝と同じような年だ）に、重慶を捕らえて、連れてくるように命じた。そこで宗政は家に帰ることもなく、家の子（親族の者）と雑色（身分の低い侍）八人を連れて、御所から直接、下野の国（ほぼ現、栃木県）に向かった。これを伝え聞いた郎党なども後を追つて、馬を駆けさせたので、鎌倉中がどよめいた。

九月二十二日 実朝は秋色を求めて、火取沢（現、横浜市磯子区の緑の多い地域）を、散策する。時房、泰時、藤原長定（父が義経の忠臣として罰せられましたが、富人ながら鎌倉に味方して九州を制圧した功績は大きかつたので息子である彼は実朝の家来として重用されている）、三浦義村、結城朝光、内藤知親らが同行した。これらの人々はみな歌道に堪能な者だ。火取沢は横浜を流れる大岡川の上流で、幾筋もの沢水が、草木の中を流れ、風光明媚な所である。

九月一十六日 晴 夕暮れ時、長沼宗政が下野国から鎌倉に帰ってきた。こともあらうに 重慶の首を持参したと言つのだ。

「彼の父、畠山重忠はもともと罪がないのに誅殺されてしまった。その事を考えに入れるならば、重慶の取り扱いは慎重にすべきを、審議もせずに、いきなり首を取る等については軽はずみな事ではないか」と実朝は源仲兼に伝えさせた。

宗政は、怒りながら口をむいて、仲兼に言つた。「その法師の反逆は疑いのないものでございました。生け捕つて、参上するのは容易でしたが、そのようにしたならば御所の身の回りの女達が騒いで、許されてしまつるので、このように誅殺してしまつたのです。このようなことにはいちいち御所が怒られるようでは、忠節を取くす者がいなくなりましよう。私は頼朝將軍の時、恩賞を手厚くしようとお言葉を頂きましたが、それを受けませんでした。ただ墓田矢ひきめや（射放つとピーと高い音を立てて飛ぶ矢。戦い始めに敵陣に射かける風習がある）を賜つて、將軍の為に闘いたいと申し上げますと、一番上等の矢を頂けたのでした。以来、その矢を、我があばら家の家宝としております。

実朝將軍は歌や蹴鞠を日々の行いとして、武芸を軽んじておられます。没収の地も功労の者にあてがわす、女房達が頂いている有様です」

閏（陰暦で暦と太陽の動きを調整するために設けられる余分の月）九月十六日 怒った実朝を、義時はさかんになだめて、宗政の許しを請うた。実朝はしぶしぶ、宗政に許しを貰えて、出仕させた。

十月二日 朝廷から関東連絡役の西園寺公経に書が届いた。西国の將軍御領に臨時の公事を申しつけるとの内容であった。これを伝え聞いて、広元は「一切、受けて実行することは必要ありません」と言ったが、実朝は実行を命じた。実朝は言つ。「全く公事申しつけを受け入れない事は良くない。突然には雜掌せっしょう（出納の者）らが負担できないので、前もつておおよそを示して命じられるよ、書いて送るべきだ」と。そこで広元は書を書き整えた。

十月十四日 晴 昨晩雷鳴があつた後、御所の南庭で狐の鳴き声が何度も聞こえた。実朝は昨晩の怪異の事で広元に手配するよう命じた。鶴岡八幡宮、勝長寿院、永福寺の僧ならびに陰陽道の者は祈禱を命じられた。

十一月十日 快晴 夜に入り、先代の將軍源頼家の若君せんざい善哉ぜんざいが出家し僧となつた。尼御台所（政子）が若君の将来に良かれと思つて勧めた事なのだ。

十一月二十三日 晴 藤原定家が家に伝わる万葉集を実朝に献じる。在京している一條雅経に実朝が入手するよう命を出していたのが実現したのである。

今日、その万葉集が鎌倉に到着したので、広元から実朝に手渡された。実朝は全巻四千五百首に目を通していなかつたので、これにすぐる宝はないとつて、和田の乱以来、久々の笑顔を見せた。

十一月六日 改元、建保元年となる。

十一月十八日 京都において藤原定家のまとめにより、定家自筆

の巻頭文と弟子の書写による、実朝隨一の和歌集「金塊和歌集」が完成したことだが、定家による日付がこの日であることが、ただひとつのが根拠である。当初は「鎌倉右大臣和歌集」と呼ばれていたことや、この日完成というと、この後の歌がなくなり、あたかも、実朝がこの日に歌をやめてしまったよう思えてしまったことから、この日の完成はあやしい。吾妻鏡には完成の記事は見られない。

十一月十九日 雪降る 実朝は雪山の趣を見るために二階堂行光の邸宅に行つた。ついでと言つことで行光は酒肴を用意する。二階堂行村など多数がついて来る。歌会、管弦などもある遊宴となつた。

建保二年（1214年）実朝 二十三才

一月一日 御所に有力御家人が参上する。三浦義村は当然ながら一番目の列で実朝、政子、義時に対座している。かなり満座になつた所に千葉胤綱（指折りの御家人、千葉氏の嫡男。四年後に千葉氏当主となる。この年十七才）がやつて来て、義村のさらに上席に座つたとした。義村は怒つて「下総犬は伏すところも知らぬな」と言った。胤綱は色をなして「三浦犬は友を食うというぞ」と、言葉を返したという。和田合戦では本家の三浦義村は土壇場で分家和田氏との約束を裏切つて北条側に走つた。（これは、鎌倉幕府の正史と言える、吾妻鏡に書かれていることである。この痛快な話を、正史に載せているといつのは、随分ユーモラスだと筆者は思うのだが、どうだらう）

胤綱は後年、承久の乱で北条泰時とともに鎌倉の先陣として朝廷との戦いに重要な役割をはたすことになる。この逸話には、彼の肝の据わつた性格がじみ出していると思つ。

一月四日 実朝は酒の飲み過ぎで体調が優れない。一所詣でから帰つた昨日、夜宴席があつた。その時したたか酒を飲んでしまつた。今日、栄西和尚が加持祈祷にきたが茫然としている実朝を見て、自分の寺である寿福寺から抹茶と白蓍でお茶の功德を説いた「喫茶養生記」を持つてこさせた。

「御所様には、大分飲み過ぎされたご様子でございますね。飲み過ぎで体調が優れない時にはお茶が一番でござりますよ。お茶は中国の皇帝様なども、日常、用いている大変身体によい飲み物でございます。それと、この書は、拙僧が書いたお茶の効用を説いた本でございます。お読みになつていただければ嬉しうござります」と言つて、法事の後、実朝に手渡された。「ああ、お茶ね、以前も栄西殿に勧められた事があつたね・・・あれから、お茶の事は忘れていました、早速飲んでみますよ。ところで栄西殿、和田の乱はすつしりと私の心の重しとなつてゐるのですよ。鎌倉では以前の争乱を忘れた頃に、新たな争乱が起きるようです。いつまでも鎌倉に平穏が訪れて来ることがありません。私がこのように体調を崩しているのは、酒ばかりによるばかりではなく、そのような暗い気持ちがあるからなのだと私は思うのです」

「・・・愚僧が考えますに、武士のこの時代は、中国の律令制度と違う時代の夜明けだと思います。たしかに多くの歪みがあるでしょうが、新しい世を、鎌倉は作つていかねばならないのでしょうか。この手本は、世界のどこにもございません。吾を律する、これは私が座禅で行つてていることですが、これがなんらかのこれから世の救済の基となるよつて思つのです」

一月十日 晴 実朝室の兄、坊門忠信（実朝より五才上、二十八才）が京都から使者を寄こして蹴鞠の書の他に和歌集などももたら

（ほつもんただのぶ）

した。室にも、身につける雅な装身具が贈られてきて、室はわざわざ実朝にそれを、嬉しそうに示した。

「漆細工の螺鈿の櫛と文箱ですか、大変美しいですね、良く似合いますよ」実朝は、品物を見せる室にそう言いながらにっこり微笑んだ。庭には、桜が花をつけ始めている。あたたかな風がその花を揺らしている。桜の木の横には天まで高まつて行くように塔状に山茶花の赤い花が幾百も花をついている。

「今度の争乱には本当に驚きました。平家の悲劇は伝え聞いていましたが、それが目の前でおこるのですもの」「そうなのだ、これが鎌倉なのですよ。平穏な京都に育つたあなたには恐ろしい事だったでしょうね。血なまぐさい戦いは武士の常なのですよ」

一月十四日 実朝は良い景色が見たいと杜戸浦もりととい（三浦半島、森戸海岸）に出かけた。近在の郷土、長江明義が食事を用意した。日が落ちるまで浜で小笠懸こがさがけ（平服で馬を走らせ、近めの小的を射る競技）に興じた。馬が一町（109?）先から疾駆されて、將軍達の前でヒヨウという音とともに矢は放たれた。いずれも見事な腕である。日が暮れて、十四日の満月（旧暦は便利である。日付で月の形がわかる。筆者）であるから春の海は、清らかで明るい。月が海にきらきらと映っている。浦から船を出し、海を渡つて鎌倉に戻つた。このような遊行のさなかにも、悲しみは実朝の心を通奏低音のよう支配している。

三月九日 晴 桜が満開である。実朝は夜になつてから急に永福寺よつぶつに出かけた。泰時、二階堂行村、東重胤、宮内公氏らが供をした。大蔵山の麓の御所から永福寺は十町（1.1?）に満たないので歩いて行く。永福寺に植えられている桜は樹齡二十年、見事であると評判なのだ。月は半月だが、僧などにかがり火を焚かせ、夜桜を楽しもうというのである。戌の刻（午後七時から午後九時）まで永福寺にいて牛車ぎゅうしゃを門に着けさせた。

四月十八日 実朝が父、頼朝の徳を讃えるために大蔵御所近くに創建した大慈寺ができあがつた。建立の供養について御所で評議が行われた。義時、広元、二階堂行光、三善康信、二階堂行村らが参上した。

「供養の導師には京都から高僧を招きたい」と実朝は言った。それに対して義時も広元も口を揃えてこう言つた。「頼朝公が勝長寿院を開いた時、京から高僧が招かれました。その時、往復の雑事が多くの庶民の煩いとなつたということです。これは決して仏の意にかなつた事ではございません。今回は関東に住む僧侶を用いられるの

が徳政となりましょ「

六月三日 晴 諸国干ばつである。実朝の願いで栄西が降雨祈願のため法華経を何度も唱えた。

七月一日 栄西に大慈寺の供養の導師をするよう命じた。

八月二十九日 去る十六日に京都の後鳥羽院御所で行われた秋十首歌合わせの歌が実朝に献上された。実朝はたいそう喜んだ。

建保三年（1215年） 実朝二十四才

一月八日 伊豆から鎌倉に早馬があがつて來た。北条家の創立者とも言える、北条時政が六日、戌の刻（午後八時頃）七十八才で亡くなつたと伝えられた。日頃できもので煩つていたと言う。

娘、政子を源頼朝に嫁がせて、平家打倒に立ち上がり、鎌倉幕府を作り上げる数奇な人生を歩んだ人も近頃は忘れられた存在となつていたが、さすがに亡くなつたとの報が伝わると、御家人をはじめ、鎌倉の庶民も驚いた。人々の多くが在りし日を思い出して感傷に包まれるのだった。

六月五日 寿福寺長老の栄西が京都で亡くなつた。所用で先日京都に上つて行つたが、旅の途上で体調を崩したのだ。享年七十五才。結縁（来世は天国に生まれ変われるという御利益）があるというので、実に多くの人が葬儀にやつて來た。在京している源親広（広元の息子）が実朝の使者として、臨終と葬儀につきあつた。実朝が栄西の死を残念に思うことひとしおであった。

十一月二十五日 昨夜、実朝は和田義盛以下の和田一族が甲冑姿で枕許に群参する夢を見た。その姿は戦いに疲れた落ち武者のようだつた。女、子供、赤子も混ざっている。夢のただならぬ様にうなされ、深夜目覚めたといつ。実朝の驚きは格別のものであった。朝になつて僧の退耕行勇たいこうぎょうゆう（栄西の弟子、寿福寺一代目当主、五十三才）にその旨を伝えさせ、仏事をするようお願ひさせた。

建保四年（1216年） 実朝一十五才

一月十五日 昨日まで、江の島は海中のただ中にあつたが、昨日の強い地震の後、江の島と片瀬の浜との間の海砂が隆起して道のようになつた。それで、江の島の神社に参拝する人々に船の煩いがなくなつた。その奇跡をみようと、各地から人々が押し寄せた。

幕府は三浦義村を出させて調べさせる。帰ってきた義村は「海のただ中の島と本土が廊下のように一本で繋がつておりました。これにはなにかの予兆かも知れませんので供養すべきです」と報告した。

三月二十四日 京都の飛脚が到来する。十四日の夜、実朝室の父、坊門信清が京都の西の郊外、嵯峨で亡くなつた事が伝えられた。享年五十七才である。実朝室はそれを聞いて悲しんだ。実朝はそれを聞いて室をお茶に誘い、庭にまだ散り残る桜を見て「人もいつかは、あの桜の花びらのように散るのが定めですよ。亡くなられたのは残念ですが、戦に倒れるのではなく、花が散る美しい季節に洛西で平穏に亡くなられたのは、幸せな事だつたと、私は思いますよ。西行法師は、死ぬならば桜の咲き誇る季節に死にたいという歌を残していますね、その時節に亡くなれたというのはお父様には何よりの事だつたではありませんか」と、室をなぐさめた。室は実朝の優しい

気持ちに、沢山の涙を流した。

三月二十五日 実朝室は喪に服するために牛車で一階堂行光の山荘に入った。鎌倉に於ける葬儀も、そこで行われた。

五月十三日 これまで政所別当は北条時房、源親広（広元長男）、北条義時、清原清定（京より下つた有能な文筆官僚）の四人であったが、次の九人となつた。清原清定、広元、仲章、義時、？重、大内惟信（京方の武士）、親広、時房、中原師俊、行光である。この改変の後ろには義時の力を減じたいという実朝の意志が見える。

六月八日 晴 陳和卿ちんわけい と言う宋人が鎌倉かまくらにやつて來た。和卿は平家によつて燒失された東大寺を新造する重源ちようげん（1121年生。法然に学び、四国、熊野各地で修業の後、宋を三度訪れた。燒失に際して後白河法皇に再建を進言した事もあつて、東大寺勸進職に任命された）に従い、大仏の铸造と大仏殿の再建に携わつた人である。勸進職とは早い話が総合プロデューサーのような仕事と言つて良いだろう。事業推進取締役、今日の言葉に移し替えればそんな感じである。

東大寺再建には、新興の鎌倉幕府の援助はもとより、あらゆる御家人、庶民、歌人の西行までが助力した。西行は砂金の提供を願うため、奥州藤原氏を訪ねる。その旅の途上、鎌倉に立ち寄り、源頼朝と一晩、面談する機会ができたわけなのである。ちなみに栄西は、重源のあと勸進職だ。東大寺建立の時頼朝は和卿を宿所に招いたが和卿は参上しなかつた。

「この方は多くの人命を奪われたので罪が重い。私が面識を得ることは差し障りのあることです」と言つたといつ。和卿は僧であつたから、そのような失礼は見過ごされたが、もし御家人であつたなら、頼朝は許さなかつたのではないかという行為であつた。一説には頼朝は和卿の振る舞いに感動して、甲冑、鞍、馬、金銀などを贈つたともいふ。また、東大寺再建の功績で五力所の莊園を賜つたとも言う。和卿の実像は本当はどうであつたのかは判然としない。

その陳和卿が広元を訪ねて來た。広元は古くから頼朝の文官であつたから、和卿と言う僧が訪ねて來たと告げられると「ああ、東大寺を建造したあの陳和卿ちんわけいだな」と思いあつた。面会すると和卿は、「頼朝將軍は多くの人の命を奪い、罪深い方でありましたが、現將軍は、数々の争乱はあるとは言え、自ら意図してそのように

さつていなない仏の心にかなつてゐる方でござります。そうであるのは実朝様は尊い方の再来だからです。それで將軍にお目にかかりたいとやつてまいりました。」と、言つた。

六月十五日 晴 実朝は陳和卿を御所に招いて対面する。和卿は三度深々と床に頭をつけて礼をしたあと、号涙した。実朝はその有様の異常さにたじたじとした。しばらく後、やつと泣きやんで、和卿はこう言つた。「あなた様は、昔、宋朝医王山の長老でらおられました。その時に私は門弟として列していました」実朝は、その言葉の意外さに驚いた。かつて見た夢にそつくりだからだ。「自分が僧である夢を見たことがあるようになります」と、呟くように言つた。実朝はふくよかな顔にかすかに笑みを浮かべて和卿を見つめた。和卿は思う。なんと深い目をなさつてゐるのだろう。清らかな泉のような目だ。それに上品な物腰といつたら・・・。この方は歌の道の達人でいらっしゃると言つ。何か普通の人と違うようなところがある。和卿は言つ。「そのお言葉を有り難く思います。私は工人であります。宋では造船の仕事もしております。船の材を用意して頂ければ渡海の船を造る事ができます。作り上げた船で、前生の古里にお連れしたく、やつてまいりました」

実朝は、このごろすっかり血なまぐさい鎌倉にも義時にもほとほと嫌気がさしていたから、この話を興味深く思つた。栄西殿が言うように鎌倉を救うものは、仏の道かも知れない。師は言つていた本当の仏教が伝わつていないと。宋に行つて眞実の仏法を学ぼうかど、とんでもない考えが浮かぶ。

閏六月十四日 中原広元は改名を願い出た。中原姓を改め大江姓にしたいと言つことだ。近頃は中原姓は優秀な者が多く、隆盛だが、大江姓が衰運である。大江氏は広元の出身の家で中原氏に養子に出たのである。広元は出身の大江氏の名を残したいと大江氏への改名を願い出たのだ。この願いは速やかに叶えられた。

九月十八日 義時は広元を呼んで言つ。「実朝將軍は、内々に朝廷より大将の任を頂こうと思っている。故頼朝將軍は官位任命のたびに、それを断られた。それは官位を受けて貴族になつてしまつて軟弱となつた平家の轍を踏まないためなのだ。武士は貴族と違う何かだから、子孫のために良かれと思つてしたことだ。しかしに、実朝將軍はまだ若いのに、本来壯年になつてから頂くような官位を進んで所望している。朝廷の時代はもう終わりだから朝廷の位など何の価値もあればしないのに、あえて朝廷の傘下に入ろうとなさつている。これは武士の世を滅ぼすものだ。京都におられる天皇家は過去の権力者だ、これからは鎌倉が王となるのだ。かつて武士は平将門殿を押し立てて関東の国を作つた。將門どのは、新皇を名乗つたという。その王国は惜しくも朝廷に打ち負かせられてしまったが、その再来が鎌倉なのだ。実朝將軍にはそれが見えていない。この事を私などが言え巴、ただ単に將軍の怒りを買つだけだ。貴殿などが側近にいながら、なんでそのような事を言つてくれないので」

「頼朝將軍の御時は何事につけて、ご相談がありましたが、御所には、そのような事がなく、言い出すこともできず苦惱しております。今こうして義時殿に相談されるのは、大変良いことです。早速、御所にお伝えしましょう」

九月二十日 晴 広元が御所にやつて來た。義時の使いという事

で昇進の事について話し合つたために実朝将軍に会つた「義時殿が申すには、このように官位をお受けになるのは、鎌倉のためになりません。子孫の繁栄を考えるならば、今の官位を辞し、ただ征夷大将军だけを位として残すべきです。との事です」これを聞いて実朝は常には強い語調でこう言つた。とと

「諫め」との趣旨もつともだと思ひますが、源氏の統治は私をもつて終わるのです。子孫がいたとしても、もはや統治する立場に立たないことは、明白な事ではありませんか。それで源氏の名を残したいと官位を頂いているのですよ。」広元は、実朝の言葉に、義時への痛烈な批判を感じ取つて、何もそれ以上言えず御所から退いた。そして、その言葉を義時に伝えた。

十一月十一日 鶴岡八幡宮に於いて、源実朝、中納言昇進拝賀の式典がおこなわれた。北条義時、北条泰時以下、多数の御家人が参加して行われる。

十一月二十四日 実朝は前世を過ぐした宋の医王山を訪ねると書いて、宋に渡る船を建造せよと陳和卿に命じた。そして、宋に同道する者六十名を決めた。これを聞いて、義時と広元は非常に驚いた。将軍が逃亡するような事をする。義時と広元はあわてて、これを止めようとするが、実朝の意志は固かつた。相当考えた末の結論なのだ。

101 出来上がりつつある渡宋船

義時が氣をもむうちに、船は由比ヶ浜に峨峨とした姿を現してきた。まさに巨大な龍の背骨のような骨組みである龍骨が鎌倉の人々を驚かせた。平穩な内海を航行する船は堅牢な骨組みが必要ないが、中国に渡るような外海を渡る船は骨組みで中から支えて、波浪に耐えねばならない。動物における背骨のように、骨の柱として、船を貫くのが龍骨である。

船長150尺（45?）船高20尺（6?）船幅30尺（9?）といふ大型船になると、その足場の為にも巨大な木組みを作らねばならない。この木組みは鎌倉のどんな建物よりも大きく、鎌倉の町中からも見ることができた。したがつて人々はどぎれることなく、建造中の船を見に来た。

実朝もおりにふれ、和卿に会いに来たから、それも庶民の人気を煽つた。由比ヶ浜にしつらえた小屋の中で、実朝は和卿の語る、宋の人々の暮らし、喧噪を極めるみやこの話、宋の仏教の話、宋の皇帝の話を聞いた。そうした話しう聞く毎日を送つていて、前途が暗然としていた実朝の心にやつと一筋の光が射し込んで来るようと思われた。

やがて贅を尽くした巨大な船は、ついにその姿を現して、由比ヶ浜にそり立つようであった。各所に紅殻色べんがら、蒼あおや緑の色がほどこされ、新しい木肌と織りなして宋朝風の典雅な雰囲気を漂わせ始めた。

建保五年（1217年）三月十日 晴 夕刻、実朝は桜の花を見るために永福寺に出かける。実朝室も同じ車で同道する。夕陽の中で、数多い桜の木が一層赤みを帯びて輝いている。小山を背にして一階建ての堂から左右に回廊が平屋の阿弥陀堂、釣殿に繋がっている。その前面に清涼な山水が流れ込んでくる透明な大池が広がつ

ている。この大池では時には船を浮かべ管弦が奏される事もあるのだ。

実朝と室は仏を参拝して、桜林を逍遙した。先ほどまで明るかつた空と雲は鍛冶屋の鉄のように赤く染まり、桜をなお一層染め、池にも映つてゐる。二人は大池の上に架けられた木橋の上から黄昏に沈んで行く永福寺の天国のような風光をうつとり眺めている。先ほどまで、ついて歩いていた、近侍、女房達を橋の外れに待たせて二人だけとなつた。

「なんと美しい眺めではありますんか」と室は言った。

「ああそうだね。華やかであるけれど、静かにはらはらと散り続ける様子は、桜が静かに悲しんでいるように見えますね。これは仏教で言う大悲です。仏が庶民の苦しみを見て、静かに、しかし深く悲しまれるのを大悲というのですが、それを画にしたような風景ではありますんか。その大悲は近頃の私の有様ではないかとも思います。けれども、こうしてあなたとこの景色を眺めていると、二人の心が一つになるようで幸せに感じます。私はあなたを幸せにできているのでしょうか？子供もできず、ずいぶんと辛い気持ちなのでしょうね。しかし辛く思う気持ちは持たなくとも良いですよ。今の鎌倉では、源氏の子供に幸せを保証してあげられません。言い訳かも知れませんが、子供ができるのも神のお気持ちかも知れませんよ」

「・・・私は、御所のその優しい気持ちで十分でござります。殿のおかげで人の上に立ち位くじの上限に立つことができました。お詫びして貰うことなどはありますんよ。」

「渡宋であなたを一人にしますが、私は逃げ出すのではありません。必ず帰ってきます。宋に渡り、本当の仏の教えを学び、鎌倉に真実の仏教をもたらすのです。そうでなければ、鎌倉の流血はいつまでも止まらないのです。あなたには寂しい思いをさせますが、許してください」二人の見つめ合ひには涙が潤んだ。

四月十七日 遂に渡宋船は完成した。由比ヶ浜の空には、さわやかな初夏の空と浮き雲がひろがっている。実朝が多くの御家人に進水のための船曳の人を出すように命じたので、その人々が百人を越えて待機していた。

御所車三台に実朝と室、政子と義時が乗っている。近侍の者達と多くの御家人、庶民が見守る中で、二階堂行光と和卿の総合指揮の

もと、作業が始まろうとしている。宋朝も驚かす麗しい巨大な、木の香りも新しい船が浜にそそり立っているのが目に入る。午の刻（こうとき）（昼）指揮台に乗った、行光が和卿を建造者として和卿を紹介する。和卿が挨拶をする。

台の上に立つた和卿は大きな声で話し始める。

「皆さんのお力を頂き、渡宋船ができあがりました。今日は、皆さんと協力して、船を海に浮かべます。大変重い物です。大太鼓をたたいた時に力を入れて引いてください。」

和卿の弟子の造船頭がゆつくり太鼓をドーンとたたくと、御家人、船大工、郎党が顔を真つ赤にして綱を引いた。大船はなかなか動こうとしなかつたが、やがてみしみしという音とともにゆるりゆるりと身動きし始めた。ドンという音とともにギシリギシリと前進する。敷き詰められた丸太の上をそりのようには船台が滑つて行くのだ。

やがて船は海に入り始めた、実朝、室、義時、広元が、目を見開いて、御車の御簾の影からそれを見ている。その時「ズン」という鈍い音がして船が止まつてしまつた。より多くの人々が船を押すがあたかもくつつけてしまつたように微動だにしない。海の方から船で引っ張る、牛を連れてきて人とともに押してみる、何をしても無駄であった。日頃、浜で見物していた漁師が言つには「あの、遠浅の浜で大船を造つて海に浮かぶはずがなかんべ。あの和卿という男は船の事をしらねえんじやねえか?」と言うことだった。和卿は東大寺建立に当たり建材を横領し宋に帰国する船を造ろうとして、後鳥羽院から出入り禁止を言い渡された男だという風評もあつたのである。今日それが具体的現れてしまつたのかもしれない。

義時が去り、御家人と郎党が去り、実朝と室と広元と少数の御家人と陳和卿が浜に取り残された。まるで言葉がない。和卿の目から涙が溢れている。浜におりた実朝の前で土下座すると、無言で去つて行つた。実朝は近侍を残して、室と広元を帰らせた。

夕暮れて行く浜で、実朝はいつまでも酒を飲んでいたが、船に合掌すると「帰るぞ」とポツリと言つた。

由比ヶ浜に誰もいなくなつた。海にのめり込んだ姿の大船が、折

かりの満円に漏り切れてこるものである。

五月十一日 鶴岡八幡宮の別当（主席）定暁が腫れ物の為入滅した。

五月二十五日 御所の持仏堂（將軍の所有する仏像を安置する、お堂）で文殊像を供養する。実朝は長年大切にしていた牛宝（牛の胆嚢結石と釈迦の遺骨の碎片である舍利と香とを丸く包み、金銀漆で玉のようになし細工した物。持つ人に、あらゆる望みを叶えてくれるという）を布施として供養僧の行勇に進呈した。

広元が同席していて「それはいけません」と、押しとどめるのだが、実朝は「かまわん」と言つ。「そのような幸運を授けてくれる宝物を手放すのは、不幸を呼び寄せるようなものではありませんか。だから、広元のお願いですから、おやめ下さい」と、なおも言つたが、遂に布施してしまつた。

六月二十日 二代將軍頼家の子息、公暁くぎょうが京都園城寺より京都に到着し、欠員となつていた鶴岡八幡宮の別当に任じられた。

十月十一日 公暁は別当職について、始めて遙拝の儀をする。

十一月十日 広元の健康が優れない。目が疲労し、身体にできものができる。

十一月九日 広元の病重く、義時が広元邸にお見舞いに行く。

十一月十日 広元は存命を考え、役職を降りて出家する。実朝は結城朝光を見舞いに出した。

十一月十日 広元の病が、ようやく癒える。しかし目は白黒をさえ判断できない状態である。

建保六年（1218年） 実朝一十七才

一月二十一日 雨 京都の使者が鎌倉に着いた。さる二日、実朝将軍は権大納言に任じられたという知らせである。権大納言と言うのは、実質大納言の役職であるという、平安朝廷の官職である。大納言という役職を説明するのは少しやっかいである。長くなりすぎだが朝廷の位階の説明を我慢して読んでいただきたい。朝廷の最高幹部を公卿という。二十番目の位である小初位から位階が始まり大初位・従九位・正九位・従八位・正八位・・・従一位・正一位・従一位・正一位と位が上がっていく。公卿と呼ばれるのは従三位以上上の者か四位でも官職の参議（朝廷の重要審議をする者）を得た者の事である。公卿と呼ばれる者はおおむね二十人ほどにすぎない。この公卿が重要な官職を分け持つ。参議・中納言・大納言・右大臣・左大臣・太政大臣と位階が上がつて行く。太政大臣は欠ける事がある役職であり、人格を得て太政大臣に始めてなりうる、名誉ある最高職であり、いうなれば相撲の横綱と同じである。平安朝においては武力をもっぱらとする警備のものである武士は決して三位以上の公卿にはなれなかつた。武士は人を殺したりする下品な者達であつたからである。

この日、権大納言に実朝が任命されたということは、武士の統領である実朝が、公卿いりし朝廷の第四位の大納言相当の官職を手にしたという事を意味しているのだ。従来得ていて「將軍」という官職の正式の名称は「征夷大將軍」で、東北方面最高軍司令官という意味を持っている。この役職は太政大臣と同じで、令外の官とよばれ臨時に設けられる官職なのである。しかし位は太政大臣とことなり、低位の者でかまわないのである。平安朝廷は衛府という軍力を

担当する官職を持つには持っているが、実際には通常は大軍力をもたない、無力な不思議な政体なのだ。地方の反乱などがあると、その都度、令外の官である將軍が決められ、出征する形をとつてきたのである。

渡宋船が失敗した後に、実朝は、以前よりもっと、位階獲得に努力したので義時は驚いた。義時は考える。

「ひょっとすると天皇と同格であると言われている最高位の太政大臣になることを実朝は狙っているのではないだろうか。渡宋船などというばかげたもので、この俺を苦しめたばかりなのに今度は、朝廷の位階などというもので、又、俺を悩ませる。朝廷の位階などに何の価値もありはせぬのに執着するのは愚かな事だ。鎌倉は朝廷の臣などではない。御家人が実朝将軍のすることを真似て和田義盛のようになりたいなどと言い出したら、鎌倉の制度が乱れてしまう。この頃は何かと実朝が日障りだ。もうそろそろ将軍の力を奪つて北条の家の明日を作り上げる時なのだ。このまま実朝の好きなようにさせておくと、鎌倉も平家の二の舞を演することになりかねない。もう実朝を引退させたい。しかし引退では収まるまい。実朝が生きている限りは実朝は謀反の中心に祀り上げられることは必定だ。・・・実朝は滅んでもらうしかあるまい。・・・そうだ、うわさでは元將軍頼家の息子の公暁が実朝を憎んでいると聞こえているな。どうやら世間を良く知らない智恵のない者だから、うまく扇動すれば実朝暗殺に動くかもしれん。仇討ちには人々の目が眩まされる。仇討ちは暗殺を美しい出来事にする。このやり方は父（時政）が曾我の仇討ちで北条の政敵の工藤祐経を滅ぼすために使った手口だ。・・・頼朝公が行つた富士裾野の大牧狩りで起きた曾我兄弟の仇討ちは美談として語られるが実態は違つていたな。・・・工藤祐経は叔父の祐親に親の所領をだまし取られて恨みを持つていた。祐経の郎党一人が放つた矢は叔父に当たらずに一緒にいた、その息子の河津祐泰に当たつてしまつたのだ。祐泰亡き後には曾我十郎・五郎の一人の子息が残された。工藤祐経は、そののち頼朝率下に参入し、有力な御家人に成長した。父は言葉巧みに十郎、五郎に、

仇討ちを果たさねば、武士の面目が立つまい、成功した暁には手厚く庇護しようと言いくるめたのだった。それで、工藤氏は親の仇討ちと言つことで富士の巻狩りで殺害されてしまつたが、本質は父、時政の謀略だったのだ」

北条時政の妻の一人は十郎・五郎の父、祐泰の兄弟で、十郎・五郎はいわば時政の庇護下にあつた。前記のように時政は言葉巧みに仇討ちを果たさねば武士の面目が立つまい。仇討ちを果たした後は、私が將軍に奏上して所領を確保してあげよう今まで言つた。しかし、その言葉は嘘で十郎・五郎は仇討ちのあと、殺害された。

半月が北条義時邸の庭を照らしている。義時は庭を前にして、なおも思索の中に入つてゐる。

- 妻が公暉の乳母である三浦義村だが、義村はおれの考えに協力して三浦氏には大切な公暉を仇討ちにし向けるに違ひあるまい。義村は、おのれをを守るためにあるのなら、従兄弟も敵に手渡す世渡りにだけた冷酷な奴だからな。公暉が信頼する義村にこう言わすのだ。「実朝の命を取つたら、私が北条を族滅し公暉様が將軍におなりになるのです」と。・・・実朝を亡き者にする前に、まさか俺が將軍になるわけにはいかないから、次期の將軍を朝廷から頂くようにしておかねばならぬだろうな。朝廷への使者は姉上の尼御台所に、うまく頼みこまねばなるまい。今の鎌倉は、もはや將軍などいなくともやつて行けそつだが、力は弱つたと言え、朝廷も油断がならない。朝廷懐柔のためにも皇族の若君を將軍にむかえるべきだ -

かつて和田氏の反乱に協力すると言つて血印を押した和田氏の本家三浦義村は、色々理由をつけて約束を違えて、義時に密告したのは、前記のごとくであつた。その経歴を持つ義村は公暉を仇討ちに走らせるために公暉との酒席を何度も設けて、すっかり丸め込んでしまつた。純朴な公暉は、創作された実朝の悪行の数々を聞かされて、実朝に深い憎悪をもつた。

一月四日 快晴 尼御台所（政子）が京都に向けて出発した。北条時房が伴う。表向きは高野山参拝であるが、目的は將軍実朝の後継者さがしである。誅殺された稻毛重成の孫娘、十六才も連れて行く。皇族の士御門道行に嫁がせるためだ。

一月十日 広元は位階を求める実朝の命を受け、波多野朝定（はたのともさだ）（実朝に学問所番人に指定された和歌に堪能な人）を京都に向けて出発させる。近衛の大将の位を必ず手に入れたいということである。

三月十六日 波多野朝定が京都から戻つて来た。実朝将軍は左近衛大将を兼任することが許された書状を持ち帰つた。

近衛大将は近衛（朝廷を防衛する役）の最高職だ。左・右の近衛府があり、従三位以上の者が任命される。位は従三位だが役職の重要さは大納言を越えていると言う。実朝は征夷大将軍の役職に近衛大将の役をあたえられたのである。

四月十四日 尼御台所が京都に於いて従三位に叙せられた。これほどの位への女の叙位は、壇ノ浦で入水した幼帝、安徳天皇の祖母、平時子のみであり、破格の事だ。この恩賞は、子のない実朝将軍にもしもの事があつたら、皇族から将軍をお迎えしたいと願い出た事によるのだ。

四月二十九日 晴 去る十五日、政子に後鳥羽院より面会の話しがもたらされたが、田舎者の老尼が、ご対面しても益などはありますまいと告げて、政子自身の京都諸寺の仏の拝観を断念して、慌てて京都より下つてしまつた。

五月五日 晴 実朝は政子に付いて京へ行つた北条時房に参上せよと命じる。実朝は京都の事情を尋ねる。時房は言つ。「先月八日に祭りがあり、そこで行われる蹴鞠けまりが見たいものだと思って射たところ、招待されました。右近衛大将殿は随臣に守られた壯麗なお車から蹴鞠みすをご覧に成つていました。私の息子の時村も同道したところ、上皇は御簾を上げてご面会なされました。十五、十六日と続けて参内しましたが、そのおりには清親殿（実朝義父、坊門信清の甥）がいつも付いてくれていたのです。あの暖かな思いやりを忘れることができません」久々に華やかな京都の近況を聞いて、実朝

はこのところの暗い気持ちからしばし逃れることができた。

六月二十七日 晴時々曇り 左近衛大将に任じられたので、鶴岡八幡宮に、後家人多数を連ねて拝賀する。北条義時は「無駄な事だ」と機嫌が悪い。

七月八日 直衣始めが行われる。直衣は鮮やかな色彩の貴族の平服であるが、公卿に任じられるこの「平服」で宮中に入ることができるようになるのだ。その「豪華平服」始めの儀式なのだ。

十一月一日 右大臣藤原通家が左大臣に転じた。実朝は右大臣に任じられた。つまり実朝は征夷大將軍・左近衛大將・右大臣という麗々しい肩書きだ。右大臣は太政大臣・左大臣につぐ重職だ。もちろん鎌倉幕府が政権を取っている以上、これらの肩書きは実質的なものではない。しかし義時には、実に苦々しい事態だと感じられるのだった。

十一月二十日 右大臣となつたので、右大臣としての政所（大臣執政室とでも呼ぶべきか）を開かねばならない。その政所始めが行われる。義時、執事行光、文章博士仲章、文筆官清原清定、親広（広元長男）、時房らが衣類を整え列をなして座つている。文筆官の清定が吉書を書く。義時がその書を持つて御所に手渡しに行く。書を行光に預け、義時が先に立つ。実朝將軍は南庭の前の邸で吉書を一覧する。

その後、義時は政所に戻り飲食の接待をする。

十一月二十一日 晴 京都より装束、御車、調度など朝廷より届けられる。明年の実朝將軍右大臣着任挙賀に使用するのである。

建保七年（1219年） 四月二十一日改元 承久元年

一月二十三日 曇り たそがれ時より降雪一尺（30?）。坊門大納言（坊門忠信実朝室の兄で歌人。大納言は左大臣・右大臣に次ぐ官位。朝議に加わり大臣の仕事を補佐する役）が京都より到着する。義時の大蔵の屋敷を旅宿とした。このほかにも、京都より多くの宮人がやって来た。みな、挙賀の式典に参加するためである。

一月二十四日 前日の雪が積もつてゐる。坊門大納言が御所にやつて來た。実朝室と対面する。十五年ぶりの兄との再会は実朝室の気持ちを懐かしさで一杯にする。その後、將軍を交えた宴となる。うら若い女房十人ほどに梅の花なども飾らせて配膳役とするので座は華やかとなる。実朝は義兄の為に鴇毛ときげ（鴇のときように白い毛並み）の鞍をつけた馬を贈つた。安達景盛が馬を引いて皆に見せた。

義時邸は雪で白くなっている。雪は静かに降り続けている。夕刻、義時は一人居室に居て、思索に入っている。——右大臣就任の晴れ舞台、鶴岡八幡宮で行われる式典はまたとない仇討ちにふさわしい場所だ。この仇討ちの裏に俺がいることを誰に覺られてもならない。仇討ちの目標が実朝だけとは不自然だ、当然この俺も目標だろう。公曉の徒党に密かに加わらせておいた、義村の息子からの話しへは、公曉は俺をも暗殺しようと思っているようだ。それは当然の事だ。

俺はどうやって、仇討ちから逃れるか……。俺は実朝将軍の後ろを、お刀を持って歩む、そうである限りでは、俺も公曉達の法師によつて殺されるだろう。お剣を、俺が持たないわけにはいかない。持たなければ犯人は俺だと解つてしまつ。……そうだ、お剣持ちを、体調が悪いなどと言つて、途中で変わつてしまおう。うまいことに、公曉は俺の顔をあまり良く知らない。拝賀が行われる時は夜だ。夜の闇の中、かがり火の光だけではお剣を持っているのは俺か他の者かわかるまい——

一月二十七日 晴のち、たそがれ時より雪 積雪二尺(60?)
実朝将軍は右大臣就任拝賀(右大臣就任お礼の参宮)の為、鶴岡八幡宮に行く。酉の刻(午後六時を中とした午後五時より午後七時)御所より出立する。次は参賀の行列。

二列の牛馬の雜人(厩舎の者)計四人。薄紅色の狩衣。袖すぼみ縫い。

雜事に關わる舎人(下級官人)二列計四人。柳の様、細筋模様のかみしも。漆塗り鳥帽子。

殿上人（朝廷御所に入ることができる高位宮人）一列計十人。（
文章博士源仲章を含む）

前駆の笠持ち一人（雨の為の菅笠）

前駆の御家人一列二十人・最後尾、お剣持ち・北条義時
宮人二人 以上二十二人は全て 白地の狩衣・弓を持ち弓筒を右
腰に付けている。

実朝將軍の乗る牛車ぎゅうしゃに、供の者四人。童姿わらべの牛使いが一人。

隨兵 一列十人 それぞれ甲冑持ち・弓矢持ち各一人、路傍を先
に行く

雜色（雜役、使い走りの侍）二十人。平服。

檢非違使（朝廷令外の官、鎌倉幕府成立前は警察官と裁判官を兼
ねる強權けいぜんを行使した）とその郎党。（舍人。郎党四人。調度係の小
舍人・童各一人。看督長かどのおさ（檢非違使属官、牢獄管理、犯人逮捕など
にあたつた）二人。火長（下級職員）一人。雜色六人。放免ほうめん（最下
級の手下。刑期を終えた囚人や許された者が犯人の搜査、護送な
どに当たつた）五人。

次に調度係 佐々木義清と隨臣六人

次にお車の公卿 各一台五人（実朝室の兄、坊門忠信を含む）そ
れぞれ隨臣五人ほど付く。

次に御家人一列三十人

その後に郎党が数多く千人ほども連なる。

大蔵御所から鶴岡八幡宮までの五町（550?）の短い距離に千人を越える、武将、宮人の隊列が進むのであるから、先頭の当たりの実朝将軍の牛車が宮に辿り着いてなお、後尾はまだ御所を出たばかりという様子であった。

実朝の牛車の前を、大刀を掲げて歩む義時は、刀をとなりの御家人に託すと、三十人ほど先の源仲章に近寄ると、小さな声でこう言った。「どうも、身体が不具合でござります。申し訳ありませんが、お剣持ちを変わつて頂きたい」「おお、それは大儀な事でござりますな。それではお代わりいたしましょう」

義時は、その場所から離れていた。仲章は、將軍の牛車の前の、お剣持ちの位置に行き、お剣を預かった。牛車の中の実朝は、義時が場を離れ、仲章が変わる、その光景を御簾ごしに、いぶかしげに見ていた。義時が、かがり火の間の暗闇に姿を消す後ろ姿も見えた。夕暮時からフワフワと降りはじめた雪はやがて細かい、視界を妨げるような雪に変わった。

あまりの雪に、式は中止かと思われる頃、二尺も積もつて雪がやんだ。雑役たちが参道や石段の雪かきを行つた後、実朝は石段下で牛車から降り立つた。かがり火に照らされた雪は美しく輝き、宮人、御家人達の華麗な装束とあわせて莊厳な雰囲気を盛り上げた。殿上人九人と、お剣持ちの源仲章と將軍実朝が銀杏の大木が横に立つ石段をしずしずと登つて行く。石段を登り切つて、宮の僧の案内で本殿の席に座つた時、事もあるうに、筆頭の公暁と手下の僧が白刃を手にして、実朝達を囮んだ。実朝は驚いた。公暁が目の前に立つと、「父の仇討ちでござります」と強い一言を放つと、実朝の心臓を一突きにした。実朝は一瞬、この世に悔いはないと思った。痛みも感じじうちに、実朝の視界は暗転した。源仲章と殿上人達は恐れ、おののき隅によけていたが、源仲章が引きずり出されて、やはり胸

を一突きにされてたちまち息絶えた。

本殿から逃げ出した殿上人が、石段の上で、大声を上げた、「右大臣殿が殺害され申した!」石段下で待機していた御家人が騒然となつた。石段を駆け上がり、本殿にはいつてみると、実朝の首なしの遺体がだれもいない本殿に横たわっていた。

吾妻鏡には、「この時のことは「石階之際に窺い来たり、剣を取りて丞相（大臣）を侵し奉る」とある。しかし、筆者は日頃、御家人がすぐ近くに待機する場所で実朝將軍が殺害されたことに疑問を持っていた。古くから代々木八幡宮で警護の役を務めてきた石井保治さんという方の家の口伝では実朝公は石階段の大銀杏の所で殺害されたのではなく、その上の宮に参拝したところを殺されたのだとう。石井家の祖先の鶴岡八幡宮の警備であつた人が、それを目撃したというのである。

また、この時公暁を助け暗殺に加わった僧を調べてみると興味深いことが発見できる。「鶴岡八幡宮寺供僧次第」という記録には、僧、良祐は北条時政に推薦されて僧となつた。顯信、猷弁良弁のうち一人は北条氏の推薦によつて僧となつたという記述がある。僧のほとんどが北条氏の子飼いであるのだ。しかもこの僧達は事件後、追放という軽い罪で処理されているのみなのである。つまり、この事件はすべて義時の手の内でおこつたことなのである。公暁は、その日の内に義時、義村の兵によつて予定通り誅殺されてしまった。

一月二十八日 辰の刻（午前八時頃）実朝室は悲しみの中、出家した。戌の刻（午後八時頃）実朝の首が見つからないまま、勝長寿院の横に葬つた。実朝が亡くなつたことによつて、百人を越える御家人が出家した。

承久三年五月十九日 実朝將軍暗殺から丸一年が経つた。京都守護の伊賀光季（姉妹が義時の妻）から去る十五日京都を発した飛脚が到着した。

後鳥羽院が方々に声をかけ官軍が組織され始めているといつ。光

季にも院からの強い要請があつたが撥ね付けたと言う。広元の息子の親広は守護であるが院の要請に応じたという。光季は西園寺公経（右近衛大將、西園寺家の始祖、頼朝の母の姉妹を妻とし、京における源氏の強力な支援者）と語らつていたので、身の危険を知りながら、この行動を取つたのだ。光季は十五日牛の刻（昼）に官軍によつて討ち取られてしまった。京都守護は鎌倉幕府の朝廷に対する觀察機関で、それ相応の武力を蓄えていたが、千を越すにわか官軍も勢いには勝てなかつた。

伊賀光季誅殺の後、後鳥羽院は北条義時追討の宣旨を全国に下した。

関東に当てた宣旨を持つた使者も今日、各地に到着したという噂である。捜査したところ押松丸という京都から来た者が宣旨と添状を所持していた事が判明した。それを取り上げ尼御台所（政子）邸で政子と義時は緊張の面持ちでそれを開いて見て驚いた。

三浦義村の弟、胤義から義村あてにも義時追討の薦めが来た。

「宣旨が届きました。『勅命に応じて義時を誅殺せよ、勳功の恩賞は欲しいだけ取らせる』との事です。今こそ兄上は立ち上がる時です」との内容である。

義村は返書を持たさずに使者を追い返すと、その書状を持つて義時の所に行つた。そして言う。

「私は弟の反逆に同意せず、義時殿の味方として、他に並ぶ者がない忠誠を尽くします。」

時房、泰時、広元、足利義氏（母は時政の娘。濃い親族として、義時、泰時を良く補佐した。足利幕府を立てた足利尊氏の祖）以下が続々參集し始めた。

天皇家と戦い、賊軍になるとつとに怖じ氣づいた御家人を集めて、政子は一世一代の弁舌をふるつた。

「みな、心を一にして承るべし。これ最期の言葉なり。故右大将、朝敵を征伐し、関東を草創してより官位といい、俸禄といい、その恩澤すでに山よりも高く模勃（海溝）よりも深し。報謝の志浅からんや。しかるに今 ^m逆心のそしりにより、非義の綸旨りんしを下さる。名を惜しむの族、早く秀康、胤義らを討ち取り、三代將軍の遺跡をまつとうすべし。ただし院に参らんとするものは、ただ今申しきるべし」

古代からただ一つの日本の王家として君臨する天皇家は鎌倉幕府の武者には神聖にして不可侵のように思えたに違いない。その天皇家を敵として戦うことには恐ろしい事であつた。それは、一時関東独立国を作つて「新皇」を名乗つた平将門たいらのまさかどの反乱以外には、歴史に類のないことであつた。その平将門も、ついには朝廷に滅ぼされたのであるから、朝廷は侮りがたいと思うのである。天皇と鬪えば、天皇家側は官軍であり、鎌倉は賊軍と呼ばれる。そのおびえを、政子の言葉は断ち切つたのだった。

晩鐘の頃、義時の館で、義時、時房、泰時、広元、三浦義村、安達景盛らが評議を重ねた。意見が分かれたが足柄、箱根の関所で官軍を迎えたと決着した。

しかし広元は、この多数意見に対して、御家人の意氣を高めるためには京都に攻め上る事が絶対に必要であるという考えに固守した。義時が、尼御台所（政子）に両者の意見を奏上すると政子は言った。

「上洛するような気持ちがなければ、絶対に官軍を破ることはできません。武藏の大軍を持って速やかに京に攻め上るべきです」

遠江、駿河、伊豆、甲斐、相模、武藏、安房、上総、下総、常陸、信濃、上野、下野、陸奥、出羽、諸国に北条義時は尼御台所名でつぎのように書を発した。

京都より官軍がすでに出立したという風聞がすでに聞こえてきている。北条時房、北条泰時が軍勢を率いて出陣する。北条朝時は北国方面に向かう。この事を速やかに一家の人々に伝えて一刻も早く出陣せよ。

五月二十一日 再び、天下の重大事について評議が行われた。本拠地を離れて京に行き官軍に立ち向かうのは、どのようなものかと いう御家人からの異議が多かつたからである。広元は言った。

「上洛と決定して、武蔵、各地からの軍勢を待つて、一日たつだけで、こんな異議がでてしまった。心猛き武蔵野武士ですらこの有様であるから、まして西国の同様する御家人はたちまち朝廷の側につきかねません。今夜のうちに、何がなんでも、大将たる泰時殿が出立なさるならば、先を争う東国の武士の事ですから、怒濤のごとく出陣するに違いありません」

義時はその言葉にうなずいた。

五月二十一日 小雨のち曇る 卯の刻（朝六時）北条泰時は京に 向け出立した。わずか十九騎である。

泰時が出立すると、鎌倉の御家人はあわてて後を追つた。それだけでも千騎を軽く超えた。進むに連れて、伊豆から駿河から、また甲府から信州から多くの兵が加わってきた。泰時の軍勢は最終的には二十万の兵を集めて、京都に攻め入つた。官軍は対すること一万強の軍勢に過ぎなかつた。

こうして、平安時代は眞の終わりを迎えた。最期の治天の君（天下を治める実力を持つた帝）後鳥羽院は隱岐の島に流されて、生を終えた。天皇とその他の上皇もことごとく島流しなつた。主立つた貴族達は地方につれていかれ殺害された。

これ以降、天皇は明治時代を迎えるまで、全く無力な飾りの帝王となりはてた。政治に於ける全ての決まり、全ての決断は鎌倉の北条氏のものとなつたのである。・・・武士の時代がやつて來たのだ。

この物語を終わるにあたり、いくつかのエピソードを書きたい。

和田の乱の時、和田側として鬪つたあと、行方の解らなかつた、実朝の友と言つべき和田朝盛は承久の乱には上皇側として参戦した。敗退後彼は再び消息不明となつて歴史の闇の中にきえてしまつた。現在、三浦半島の三浦市初声町高円坊に朝盛塚なる墓がある。地名の高円坊は朝盛の法名から取つたと言われる。それから推測すると、承久の乱後、逃亡して僧侶として生きたのではないだろうか。とすれば北条の目を逃れ生きる人生はどんな人生であつたのだろうか。

江戸時代の天保十年（1839年）和歌山藩の儒者、仁井田好古にいだいわくの手により成立した「紀伊続風土記」に実朝に関する次の記事がある。

そもそも興國寺を建て寄進した願性上人は関東武士葛山五郎なり。

源実朝公の近侍としてあたかも影のよう従つていた。

実朝公がある夜、夢に見た事には実朝公は生前は宋国の名のある寺の高僧であつた。その功があつて日本の將軍に生まれ変わつたのだといふ。実朝公は自覚めて歌を作られた。

世も知らじ われもえ知らず 唐国の いわくら山に 新樵りしを
(世の中の人は知らない、私も知らなかつた中国の神山のいわく
ら山で 新を切る行をしていたのを)

実朝公は、そんな前世もあつて、將軍でありながら法師のような方であります。実朝公は宋に渡る船の造船に失敗した後、葛山五郎に前世の実朝公が修業したという温州狩蕩山に行つて寺の絵図を入手して、日本に建てよと命じられました。

五郎はその命に従つて九州博多で宋に渡る風を待つていましたが、將軍が亡くなられたという報を聞き、ひどく悲しみ、髪を切り出家しました。法名を願性とつけ、敵のいる鎌倉には戻らず、高野山に登つて実朝公を供養したという事です。

(以上が、風土記の文だが、葛山五郎の父は甲斐、駿河の藤原姓の国司の血をうけた郷士であつた。父は頼朝の旗揚げの時、参加し、富士の裾野の宏大な領地を得た。五郎は、年も実朝と同じほどであつたから実朝の気に入る所となり近侍の一人となつたのだ。)

さて、残された実朝室だが、実朝が亡くなつた後、京都に戻り、
実朝の遺骨を守つて太通寺を創建し、寺のある場所にちなんで、西
八条禅尼と呼ばれた。

この敷地は元、平清盛の御殿のあつた所で、頼朝がそれを奪取し、代々鎌倉將軍の所有するところとなつた。実朝室はこの太通寺内に

六宮八町ろくくみやはちまちゅう（八町四方の敷地に六つの御殿が建っていたのであるうか）という女性の為の治外法権の場所を作った。その逸文がある。

御領八町のうちには、むかしよりいまにいたるまで、子細他所にことなり、たとい重過の者なりといへども、このうちに入ねれば、他人らうせきをいたす事なし。末代にいたるとも寺門この由を存知すへし

（御領八町のうちでは、昔から今に至るまで、決まりは他の場所と異なり、たとえひどい過ちを犯した者でも、他の人に乱暴な扱いを受ける事はありません。寺の人々よ、末の世になつても、このことを忘れてはなりません）

この文には、切ないほど人々の平安を願う気持ちが込められている。この気持ちは、まさに室が実朝と共有した心ではないだろうか。実朝室は実朝が亡くなつて五十年ほども後、次の様な文を残して八十一才で亡くなつた。

我、すでに春秋をおくること八十年にみてり
人間の無常いくばくか
目にさえくるるおりにふるるあわれことに
身をかえりみるおもひふかし

怒濤の歌

完

実朝をめぐる人名録

源 実朝 みなもとのさねとも 建久三年八月九日生（1192年9月17日生）建保七年一月二十七日（1219年2月13日）享年二十八才（満二十六才）鎌倉幕府を開いた源頼朝の子。第一代将軍頼家の後を継いで第三代将軍となる。歌人として知られ九十一首が勅撰和歌集（朝廷の選になる和歌集）入首し、歌集として金塊和歌集がある。作品中は「実朝」で通したが、当時は「實朝」が本名。

源頼家 みなもとのよりいえ 寿永元年八月十一日（1182年9月11日）生。元久元年七月十八日（1204年8月14日）^{II}亡。享年二十三才（満二十一才）鎌倉幕府第二代将軍。若さゆえの独断的政策を阻む、北条家によって将軍職を剥奪された。伊豆国修善寺に幽閉された後に、北条氏によって暗殺された。

北条政子保 ほりじょよしほ 元年（1157年）～嘉禄元年七月十一日（1225年8月16日）鎌倉幕府を開いた、源頼朝の正室（正妻）。頼朝が亡くなつた後、出家したので尼御台所と呼ばれた。源頼家、源実朝の母。北条時政の娘。

北条時政 ほりじょときまさ 保延四年（1138）～建保三年一月六日（1215年2月6日）

伊豆士郷で、さして重要な官職を持つことがなかつた様に考えられている。これは官職があれば、介とか呼ばれていただろうが、北条四郎が通り名であったことは、無官であつた事を示しているからである。また「吾妻鏡」にも、「豪傑」として紹介されているだけで、本来示される官位などが書かれていない。

しかしながら、頼朝に娘、政子が嫁ぐことを許し、平家への反乱である「旗揚げ」に、中心的な働きをして、北条氏の成功の元を作

つ
た。

北条義時 ほりじょう ぎとき 長寛元年（1163）～元仁元年六月十三日（1224年7月1日）享年62才。北条時政の次男。不確かではあるが母は伊東佑親の娘と考えられている。ちなみに姉、政子の母は不明である。したがつて義時と政子は異母兄弟である可能性が高い。義時と政子の関係は男女関係をも匂わせてくると筆者は思うのである。そこにこそ政子の息子達に対する冷たさの原因があるのかと思われる。

十八才の時、石橋山の戦いで長兄の宗時が戦死して以来、北条家の長子としての立場を得た。しかし、吾妻鏡にしばし江間姓で書かれているところから、分家の初代と設定されていたように考えられる。父時政の後妻、牧の方の息子、政範まさのりは母の出身が貴族なので、嫡子と目されていたようである。

中原広元 久安四年（1148年）～嘉禄元年六月十日（1225年7月16日）晩年になるまで中原広元の名であったが、大江広元に改名した。元は朝廷に仕える下級官人であつたが頼朝の側近となつた。兄が頼朝と親しく、早くから下京していた関係から、弟の広元も頼朝の従者となつたのである。鎌倉幕府政所初代別当をつとめる。

一階堂行政 父、藤原行遠は保延年間（1135年～1141年）に遠江国司を殺害して尾張に流された。そのとき熱田大富司藤原季範の妹との間に行政が生まれた。吾妻鏡元暦元年八月二十四日（1184年）の條に鎌倉幕府公文所棟上げに奉行として三善康信とともに登場する。一階堂姓は一階建のお堂を持つ永福時よつぶくじ近くに屋敷を持つた事による。元は工藤姓。行政と息子・行光・行村はいざれも文書に長けた人で、それらの日誌などが初期の「吾妻鏡」の原

典となつてゐると見られてゐる。筆者は

読者の皆さんに鶴岡八幡宮から北西一キロほどの、永福寺跡地を訪ねることを強くおすすめしたい。今は広大な跡地となつてゐるが、実朝の美意識を思わせるには充分な、鎌倉屈指の観光遺産である。

一階堂行光 長寛二年（1164年）～承久元年九月（1219年）一階堂行政の長男。鎌倉幕府の重席事務官僚。

一階堂行村 行政の次男。評定衆（行政・司法・立法の全てを司つた）長。一階堂家は文筆の家でありながら京で検非違使となり、「山城判官」と呼ばれる。和田合戦では奉行を受け、鬪つた。これにより「吾妻鏡」の和田合戦の記事の多くは、行村の記録に依存すると思われる。

あだちもりなが
安達盛長保元元年（1135年）生／正治二年四月二十六日（1200年6月9日）没

源頼朝が流入であつた時からの側近。出自は定かではない。頼朝の乳母、比企尼の長女を妻とした。妻は宮中で女房を務めていた事があり、京の情勢を頼朝に伝えるのに功があつたという。又、頼朝に政子を近づけたのは盛長であつたとも言つ。

石橋山の合戦で敗れ、頼朝とともに、安房に逃れるが、下総で強大な力を持つ千葉常胤を説得して味方につけた。その後、終世、鎌倉幕府の相談役として、重きをなした。

あだちかげもり
安達景盛生誕不詳／宝治一年五月十八日（1248年6月11日）
安達盛長の息子。二代将軍頼家と不仲で、頼家に愛妾を奪われた。比企の乱にも、母の実家である、比企側につかず北条の側で鬪つた。三代将軍実朝の代には信頼篤い側近の立場を得た。

承久の乱の時は、政子一世一代の朝廷討伐の演説文を朗々と代読して、御家の英気を高めた。一説に源頼朝ご落胤とも言つ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7178o/>

怒濤のうた 鎌倉幕府第三代將軍源実朝の青春 銀杏は見ていた！

2011年6月20日20時14分発行